創立30周年記念誌

社会福祉法人　太陽の家

1995年10月

太陽の家
JAPAN SUN INDUSTRIES

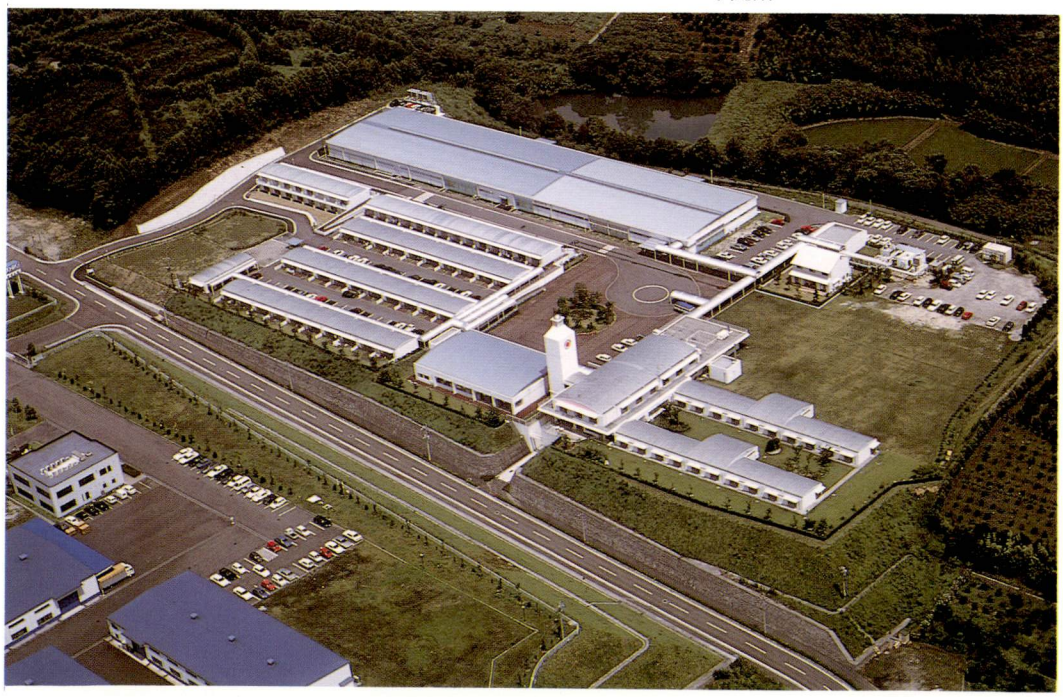
麦は踏まれても踏まれても
ぐんぐん成長します
太陽に向って
のびつづける
麦の形には
団結を
意味するものがあります

世に身心障害者(児)はあっても
仕事に障害はありえない
身障者に保護より
働く機会を太陽を!!

■別府事業本部（法人本部）
敷　地　　22,039.37㎡
建　物　　33,570.66㎡
1965年設立

全国に広がる太陽の家

■日出事務所（サン・コミュニティ・大神）
敷　地　　42,210.17㎡
建　物　　5,794.86㎡
1988年開所



■愛知事業本部（愛知太陽の家）
敷　地　　11,839.00㎡
建　物　　11,639.90㎡
1984年開所

■京都事業本部（京都太陽の家）
敷　地　　8,055.00㎡
建　物　　8,039.09㎡
1986年開所

30周年によせて

会長　井深　大

太陽の家が創立30周年を迎えることは大変な喜びであり、又、感慨無量の思いであります。

思えば、中村先生との出逢いが、私と太陽の家とのご縁の始まりになりました。

今でもはっきり思い出せますが、中村先生が私を訪ねて来られ、太陽の家についての説明をされたのですが、そのひたむきで熱意溢れる姿勢に私はすっかり圧倒されてしまいました。

「最も重要なことは、障害者は世の中で一人前の人間として認められた存在でなければならないし、又、そのような社会であらねばならない。これが、太陽の家を設立した基本理念であります。」と中村先生は私に説かれました。

当時としては、その言葉は私にとって大変なショックでした。それは障害者に対する考え方への意識革命ともいえるご意見でした。

初めて別府太陽の家を訪ねたときには、その寮での生活、工場での作業などを目の当りに見て、頭も胸の中も突き上げる様な感激で熱くなりました。

この時、中村先生の深い考え方がやっと理解できたと思いました。

それ以来、太陽の家の成長、発展にいろいろな形で係わる機会を持ち、今、30周年を迎える立派な太陽の家を見るにつけ、これを中村先生に見て頂けないのを誠に残念に思います。

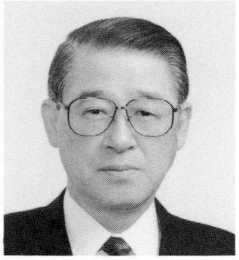
今や、我が国でも障害に対する認識が大きく変化し、それぞれの能力も正当に評価される様になり、働く場も活動する範囲も拡がってきました。障害者の人格は尊重され、権利も認められる様になってきました。

今後は、精神的にもどの様に自立してゆくかを自覚すべき時代になってきたのではないでしょうか。これ迄の様に保護されることばかりを考えてきた生き方から自分たちで何が出来るか、世の中の事柄にどういう形で参加していくかといった精神的な独立を目標に社会全体が認識を変えていく時代になったと思います。

中村先生の目指しておられた理想は現実になってきました。太陽の家の30年間の歩みが正しかったことの証です。

太陽の家が世界に先駆けてやってきた様々な試みは、パイオニアとしての評価を充分に受けられる様な成果を立派に挙げてきました。

この30周年を一つの一里塚として、これからも一年一年を大切に積み重ね、リーダーシップをとる者の誇りと責任を自覚し、次の時代へと引き継いで頂きたいと期待してお祝いの言葉と致します。



感謝とお礼のことば

理事長　畑　田　和　男

障害者にとって慈悲や保護よりも働く場が必要であり、人間性回復の原点であるという考え方に立って太陽の家が創設され、早いもので30年を迎えます。故中村裕先生と太陽の家運動に参加した障害のある人々は、当時社会の無理解という苦難の道にもめげず、自立という夢と希望に向かって、確固たる現在の基礎を築いてきました。太陽の家の運営の基本は、障害が重かろうと軽かろうと、また障害があろうとなかろうと、共に人間らしく暮らしていけるベースキャンプでありたいということであります。

私たちは「太陽の家に対する後援者は投資者である」と訴えてきました。施設は貴重な社会資源として経済・文化の面で大いに地域貢献しています。障害者の雇用労働者も570名に達し、安定した生活が送れるようになりました。別府本部ばかりでなく、愛知、京都へと太陽の輪が広がり、それぞれの地域で着実に根付いています。県外に太陽の家ができるのは、創立以来の夢でした。愛知では故明石六郎氏や日本電装、京都では故 立石一真氏やオムロンなくして、それぞれの太陽の家は存在しませんでした。さらに、「サン・コミュニティ・大神」の建設は太陽の家の新たな挑戦でした。療護施設「ゆうわ」は生活施設として日出における重要な拠点となっています。「ゆうわ」は施設だけが孤立せず、ソニー・太陽日出工場や福祉ホームと一緒にあることも意義があります。

太陽の家も21世紀に向けていろいろな課題があり、なかでも職能的に重度な障害者の雇用は真先に考えなければなりません。

世界経済大国日本の国民のひとりとしての豊かさ・充実感にはほど遠い重度の障害をもつ人々が数多くいることもまた事実です。援助を必要としている人たちのための生活の質の向上により一層の努力を払わねばなりません。また、障害者ひとりひとりが自らの限界に挑戦し、有意義な人生になるよう努力していく姿は、どんなに時代が変わろうと尊く価値あることだと信じます。太陽の家に集う1600名の皆さん21世紀に向って新たな一歩を踏み出そうではありませんか。今まで暖かいご支援・ご援助を賜わりました心ある人々に対し、深甚なる感謝とお礼を申し述べます。

社会福祉法人太陽の家

創立30周年にあたって

厚生大臣　**森　井　忠　良**

社会福祉法人太陽の家創立30周年に当たり、心からお祝いを申し上げます。

貴法人は、昭和40年に故中村裕博士の御尽力によって創設されて以来、「保護より働く機会を」をモットーに、障害者一人一人の障害の程度や適性に応じた労働の機会を提供するとともに、障害者の社会参加を推進するための幅広い活動に取り組まれ、多くの成果を挙げてこられました。

また、民間企業との提携方式による事業の拡充や職能開発といった新たな分野にも取り組まれるなど、民間授産事業の経営や障害者の社会復帰の在り方においても先駆的な役割を果たされました。

さらには、フェスピック大会や大分国際車いすマラソン大会といった我が国が世界に誇れる身体障害者のスポーツ大会を創設し、スポーツを通じて積極的な国際協力を展開されましたことは、我が国はもとより国際的にも高く評価されているところであります。

関係者の皆様のこれまでの御尽力に対しまして、改めて敬意を表する次第であります。

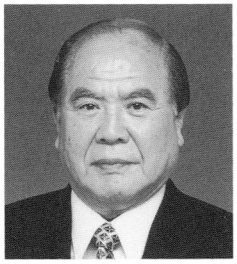
さて、近年、我が国の障害者施策は、障害者基本法の制定や障害者対策に関する新長期計画の策定により、新たな飛躍の時を迎えております。

厚生省といたしましても、こうした動向を踏まえつつ、障害者の自立と社会参加に向けて、各種施策の積極的な推進に努めるとともに、障害者保健福祉推進本部において、障害者施策の基本的方向について総合的に検討を進めているところであります。

こうした施策を一層実効あるものとするためには、障害者自身の自立や社会参加への意欲はもとより、これを支える地域の拠点としての民間団体の役割がますます重要になっていくことと思われます。

こうした意味からも、斯界のパイオニアとして活躍される貴法人に寄せられる期待は極めて大きなものがあり、今後とも障害者の社会参加に向けて、一層の御支援をお願い申し上げます。

終わりに、貴法人の一層の御発展を心から祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。



太陽の家創立30周年を祝して

大分県知事　平　松　守　彦

太陽の家創立30周年おめでとうございます。

昭和41年、「保護より働く機会を」をモットーにわずか15名のスタッフで船出した太陽の家は、今日では、京都府、愛知県の県外施設やサン・コミュニティ・大神の運営をはじめ、協力企業との連携による共同出資会社を経営するなど、約1,000人の障害者が働き、生活する、日本でも有数の施設に発展してまいりました。

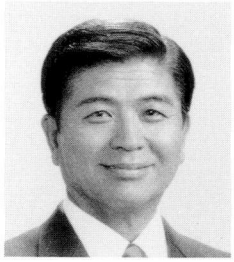
このような発展の陰には、大企業と提携した生産方法を取り入れ、入所者の適性に応じた処遇と高い賃金を保障するなど、先駆的な授産活動への取り組みと、障害者の職業的自立という目標に向かって、血のにじむ努力の積み重ねがあったものと存じます。

また、開設当初から身体障害者の健康管理や機能回復のためスポーツを積極的に取り入れ、全国、さらには全世界の障害者にスポーツを普及させるため、大分国際車いすマラソン大会や各種スポーツ大会を支援し、自らもフェスピック大会の事務局を務めるなどの結果、今日、大分県は身体障害者スポーツ発祥の地、身体障害者スポーツの先進地といわれるまでに至りました。

別府市の一角に蒔かれた福祉の種が、このよう開花し、身体障害者福祉のモデル的施設として我が国はもとより、広く海外においても高い評価を受けておりますことは、やさしい福祉のまちづくりを積極的に推進しております本県にとりましても誠に意義深く喜びにたえません。これは、太陽の家の創設者であり推進者でもありました故中村裕博士の障害者の社会的自立にかける情熱と高い識見と、中村博士の遺志を継ぎここまで育ててこられました畑田理事長をはじめ、役職員の方々のご尽力の賜と深く敬意を表する次第であります。同時に、陰となり日なたとなって太陽の家を支えていただいた協力企業の皆様方の深いご理解とご協力がなければ、今日の発展はなかったものと心から感謝を申し上げます。

近年、障害の重度化、重複化、また障害者の高齢化等により福祉に対するニーズが複雑多様化しており、このような新たな動向に即応した施設利用者の処遇や施設運営の確立が求められており、また、地域福祉の拠点として施設が果たしていく役割は、ますます増大していくものと存じます。

太陽の家が、これまでの輝かしい実績のうえに、大きく飛躍され、文字通り身体障害者の「太陽」として新たな足跡を記していかれますとともに、役職員の皆様、太陽の家を支えてこられました皆様方のますますのご健勝とご活躍を祈念申し上げお祝いの言葉といたします。



太陽の家創立30周年によせて

別府市長　井　上　信　幸

社会福祉法人「太陽の家」創立30周年おめでとうございます。

昭和40年10月に、当時は周囲がまだ田んぼであった現在地に事務所を設けて根を下ろした太陽の家は、その翌年には身体障害者の授産施設が開所され、その後、更生援護施設「ゆたか寮」や療護施設「ゆうわ」など年を経るごとに施設の整備と拡充につとめられ、身体障害者に必要なリハビリテーションや養護を行って障害者の社会復帰に大きく貢献されてきました。

一方では、「保護することより働く機会を」とのことをモットーにして、働く意欲をもちながらも一般企業に受け入れられない身体障害者のために収益性の高い近代的な先進企業と提携して職場の設備や宿舎、障害者の労働と生活環境に配慮した「福祉工場」が次々と開設され、最新の設備と医学的に配慮された安全な工場から品質優良な製品が次々と社会に送り出され、その生産性は高く評価されております。

このように、幅広い福祉関連施設を併せもつ太陽の家では、施設の一部のプールや体育館、コミュニティーセンターホールを付近住民に開放して広く一般の利用に供し、また、別府ならではの温泉浴場「太陽の湯」には付近住民もともに入浴し、更に、スーパーマーケット「サンストア」の開店など太陽の家が障害者と健常者とのふれあいの場ともなって地域の中心的役割りを担い、本市の福祉推進に寄与していただいているところであります。

ご案内のとおり、本市は「山と海、豊かな温泉」に恵まれ毎年たくさんのお客さまをお迎えしております国際観光温泉都市でございますが、一方では、太陽の家を始め福祉、及び医療に関する施設がたくさん集まっている「福祉、医療集積都市」ともいえるまちでございます。

本市では、「身体障害者福祉モデル都市」や「住みよい福祉のまちづくり」などを行って、障害者や高齢者が住みやすい、生活しやすい社会環境改善の施策を行ってきましたが、この度、太陽の家付近を区画指定して「人にやさしいまちづくり」整備計画を策定し、実施に向かいます。

ＪＲ亀川駅から山の手に向けた一帯を整備し、誰もが利用できる広場や公共施設をつくり、また、障害者や高齢者の移動における安全性の確保などを行いますが、計画の中心はやはり太陽の家が福祉のまちの核になります。

その太陽の家が当地に開設されてこのかた30年、施設の特性と輝かしい実績を発揮して今日に至りましたが、今後とも、社会福祉法人「太陽の家」がますます繁栄し、ご発展されますよう心から祈念して創立30周年をお祝い申し上げます。

30周年にあたって

オムロン株式会社代表取締役会長　立　石　孝　雄

太陽の家の創立30周年を心からお祝い申し上げます。

昭和40年に、「世に心身障害者はあっても、仕事に障害はあり得ない」という非常に高邁な理念をもって創設されて以来、幾多の困難を乗り越えて30周年を迎えられる今日では、全体として1,500名を超える立派な組織に成長・発展されました。

ご関係の皆様にとっては、この30年の回想は尽きることがないと思われますが、私にとっても、故中村裕博士の思い出とともに大変感慨深いものがあります。

中村先生と当社との出会いは昭和46年でした。当社の創業者であります立石一真相談役のもとに、中村先生と秋山ちえ子さんが障害者の自立を目指した福祉工場建設の協力依頼に来られたのがきっかけでした。設立当初の太陽の家では大分県が竹の産地であることから、竹を用いた生活用品の製造・販売を始められましたが、思うようにいかず一旦は挫折。

しかし、それぞれの身体障害者に見合った自動工具や補助具を用いれば一般健常者並みの生産ラインが出来るはずだと考えられ、寮なども備えた福祉工場の建設を思いつかれたようです。ところが、これも大手メーカーの協力がなかなか見つからず、方々探し回られた末に最後の望みを託して訪ねてこられたのが当社でした。こうして1972年（昭和47年）、オムロン太陽電機（現・オムロン太陽）が創業者、故立石一真の夢と決断で別府太陽の家の中に、太陽の家・現オムロン・社員の持株会の協力で株式会社として設立されました。

身障者の方々が自活できる職場をつくること。そして同時に事業として経営を維持できる工場とすること。これがスタートの条件でした。働く人達は社会復帰を目指して熱心に作業に熱中されたことと思います。製造ラインは、働く人達の残存機能を厳しく測定して、人間と機械のマッチングがはかられ、つくられていきました。そして創業がはじまると、たちまち黒字が計上され、おかげさまで以降23年間、概ね黒字ベースで推移しております。また、1985年（昭和60年）に京都府や京都市の協力を得てスタートしたオムロン京都太陽も順調に今日に至っています。

身障者のみなさんが、このように自らの働きによって給料をもらい、株主としての配当金を受け取り、税金を納め、そのことによって生活を安定させ、国や地域に貢献されているというのは私にとってもたいへん嬉しいことです。社内では身障者の方々どうしの結婚も増え、元気なお子さんも生まれており、ドライブやハイキング、あるいは魚釣りにと家庭生活をエンジョイされています。これは私だけではなくオムロングループの社員にとっても大きな喜びであり、誇りでもあります。

さて、今日の世界の動向をみる時、戦後50年の経営の枠組みが本格的に崩壊し始め、世界経済の大きな変革がやってこようとしています。こうした厳しい環境の中でこそ、太陽の家が「身障者に働く機会を」というモットーのもとに、さらに多様な障害者の方々が働ける機会や職場をつくり出し、引続き世界に先駆けるパイオニアとしての役割を担っていかれることを切望してやみません。

記念すべき30周年の節目を迎えられるにあたり、故中村先生の創立の理念と明日への夢の実現に向けて、太陽の家のますますの発展を祈念いたします。

太陽の家創立30周年

記念誌に寄せて

ハリー・ファン（香港）

リハビリテーションの世界で太陽の家といえば、教育の世界でオックスフォード・ケンブリッジかハーバードと言うようなものです。事実、太陽の家は30年にわたって、理想的な福祉のモデルづくりの中で発展してきました。そのすばらしい業績は、二人の整形外科医である故中村裕博士と畑田和男博士の夢とビジョンとたゆまざる努力によってつくられたと言っても過言ではありません。

私は幸運にもお二人をよく存じ上げています。1970年代のはじめでさえ、先駆者の中村博士は、重度障害者を援助する必要性を感じていました。博士は彼らに働く機会を与え、普通の生活ができるようにしなければならないと説きました。

博士は企業や政府関係の友人やマスメディアと接触し、別府市で手工業を仕事とする作業所を始めました。このモデルとなる作業所は、すぐに日本で有数の企業と提携して、組立ラインを導入した近代的な工場となりました。工場のそばには宿舎が建てられました。年月を経るごとに、スーパーマーケット、レクリエーション・スポーツ施設、銀行やその他の事業が加わり、障害者自身が投資して、経営するようになりました。

これはすばらしい業績であり、中村博士のモットー「保護ではなく機会を」「世に障害者はあっても、仕事に障害はあり得ない」を反映していると言えます。これは、世界中で後に続く人々の良いお手本となるでしょう。また、意志あれば必ず道が通じるという証明であり、障害者にとっての励みとなるでしょう。

太陽の家の創立30周年にあたって、心よりお祝いを申し上げます。多くの友人と共に祝福できることは大変名誉であり、誇りに思います。

MESSAGE FOR JAPAN SUN INDUSTRIES 30TH MEMORIAL BOOK

Prof. Harry S.Y.Fang

When one mentions Japan Sun Industries in the world of Rehabilitation it is like speaking about Oxford and Cambridge or Harvard in the field of education. Indeed in the 30 years Japan Sun Industries has developed into a model (welfare) city, a remarkable achievement built two men, both Orthopaedic Surgeons, the late Dr. Yutaka Nakamura and Dr. Kazuo Hatada.

I was fortunate enough to know them both. Even as early as the 70s Dr. Nakamura, the pioneer, saw the need to help some of the very severely disabled that he helped to save, that they should be given a chance to work and to lead a normal life.

He approached the media and his friends who were industrialists, government officials and royalty and started a model workshop in Beppu working on handicrafts. Very soon this was modernised into assembly lines and modern factories with the help of the leading companies in Japan. To the workshop and factory, living accommodations were built, adding to it over the years supermarkets, sports and recreational complexes, banks and other utilities, all run and invested in by disabled people themselves.

It is indeed a remarkable achievement and reflects truly Dr. Nakamura's mottos "No charity, but a chance" and "No one is so disabled as to be unable to work at all". Let this be an example for the rest of the world to follow and an inspiration to people with disabilities that if there is a will there is a way.

I feel very honoured and proud to join with many of their friends to send Japan Sun Industries all the very best wishes on their 30th anniversary.

太陽の家創立30周年に憶う

水　上　　勉

あれから、早や30年経った。創立当初の、まだ国立病院わきの小野田セメント療養所あとに、太陽の家の杭が打たれ、木造バラックの作業棟で、くるま椅子使用の５、６人が竹細工のお絞り置き、仏壇、ヤグラ炬燵など作っていた風景がうかぶ。創設者の中村裕先生に、次女の障害部に母親の骨を移植する手術をしていただいたのが縁だった。その時、先生から青写真を見せられ、全国に点在する在宅重度障害者は18才以後医療援助も立ち切られ、職業につきたくてもその施設がない。国の施策のおくれを熱っぽく語られたのである。私は一介の作家であり、二分脊椎症の娘の親にすぎなかったが、博士の言葉に啓発されて、「拝啓総理大臣殿」を書き、「くるま椅子の歌」を書いて、その稿料を、博士にささげ、東京渋谷に「太陽の家東京事務所」を設け、資金あつめや、国の省庁との連絡に上京される博士の手助けをしたことだった。

いまも忘れられない光景の一つだが、小野田セメントの古い療養所の建物が手に入って、木工場が出来た時、小雨ふる一日に、別府整肢園のブラスバンドの園児たちが、テントの中に集まって演奏し、全国からのお客さまを迎えたあの光景だ。これが開所式だった。お客さまたちは、集塵機が買えないために障害者たちが、口にタオルをあてて、ヤグラ炬燵をつくる作業棟を見学されたのである。

冒頭に、あれからと書いたのは、じつはこの日からという意味である。この日から30年。私は46才だったが、いま76才になって、中村先生がこの世におられない悲しみを、あらためて、噛みしめている。

皆さまはどうか知らぬが、私にとってこの30年の歳月をふりかえることは、つまり太陽の家の歴史をふりかえることになるのだが、わが人生の足もとを照らしだされる怖れを感じるのである。私はのち、中村博士の急逝によって、中村裕伝の編集スタッフに加わるのだけれど、先生の夢が、九大医局時代からのものであったことがわかると自ずから襟をひきしめられる気持ちになったのであるが、例の有名な「世に心身障害者はあっても、仕事に障害はあり得ない。太陽の家に働くものは被護者ではなく労働者であり後援者は投資者である」と先生自らが考えられた二行の句が小さな額に入って理事長室にかかげれらていた光景を思い出すまでもなく、博士の太陽の家運動の意味の深さと情熱の猛りが思い出されるのである。まこと人生の大事業はその人にとって一つだ。

中村先生の急逝により、畑田先生が志を受け継がれ、創設者の夢はさらに実現しやがて、作業棟がふえ、近代化に成功、著名なソニー、ホンダ、オムロンなど大企業の太陽の家進出によって、中村先生の蒔かれた大麦の種子は、大きく芽立ちし、発展したのである。小野田セメントの古い建物を出発点とした頃をおぼえている私には、太陽の家のなかに銀行や、健常者も一緒に入れる温泉プールや、スーパーマーケットまでが誕生するとは考えられもしなかった。誰が今日の発展を想像し得たろうか。

畑田先生は、中村先生の片腕といえる外科医であった。創設時代、小野田セメントの敷地の北隅にある三間あるかなしかの平屋に住んで、いつでも、作業棟の障害者に危険が訪れれば、かけつけられる態勢をとっておられた時代を思いおこすのである。まったく、片腕どころか、中村先生の足をつとめられた方であった。中村先生が急逝された時、太陽の家事業はこの畑田先生に受け継がれ、今日の発展に向かえたのも、創始者がすばらしいアシスタントを用意しておられたことに思いを致した人も多かろう。まったく畑田先生の力なくしては、太陽の家の今日はあり得ない。

むろん、これは初代理事長、二代目理事長、三代目理事長の思い出を語っているのだけれど、肝心のことは、太陽の家運動に参加した多数の障害者のことである。つまり労働者のことである。ソニーの井深大氏が中村博士から、仕事の進出を希望された時、「なぜ大分別府にまで」と先ず考えられ、ついで、別府にいらして、多数の労働者がすべて障害をもち、その労働がきめこまかく誠実であることを見て、進出を決断された話は、二十五周年記念誌に詳しく延べられている。井深氏をはじめ、ホンダの本田宗一郎氏、オムロンの立石一真氏は、これら進出企業の理解者であり協力者であった。

30年経った今日、私は小雨ふる一日の、小さな工場の開所式を思い出すのだ。中村博士の早逝を悔むに切なるものがあると同時に、太陽の家のゆく末ながい発展の前途をも思うのである。皆さん長い歩みをありがとう。30周年おめでとう。いま、私に、小雨のなかの障害児たちのブラスバンドがきこえてくる。

「太陽の家」創立30年を祝って

歴史を、忘れずに、伝えよう

秋　山　ちえ子

「太陽の家」創立30周年を心からお祝い申しあげます。

私の今の心境は「感無量」の一語につきます。十分に説明し切れない程のいろいろの思い出が心の中に湧き上がってくるのです。

これは今は亡き中村裕先生が30数年前に「太陽の家」を創られた頃のことを、つぶさに見ているからだと思います。

身障者の本当の倖せは物を恵まれたり、憐れまれたり、保護されることからは得られない。自分で仕事をすること。障害の部分は機械器具を活用すればいいという考えの先生は、ご自身の知力、体力、財力を存分にこの仕事に注がれた。献身されたのです。

あの頃、身障者が世に出て働くのは稀有なことで、せいぜい十人に一人といわれていました。そんな時に、15人の障害者が働く「太陽の家」をオープンしました。

30年前の1965年10月５日でした。

身障者の機能回復 ―リハビリ― にスポーツを積極的に取り入れたのも裕先生でした。

オリンピック大会のあとで開催される「パラリンピック大会」への日本の身障者の初参加、アジアと南太平洋の国々の身障者のスポーツ大会「フェスピック」「車椅子マラソン」身障者が技能を競う「アビリンピック」も、中村先生の発想から生まれたものです。

株式会社で働けることが社会人としての証明ということで、私は先生と一緒にこのことを理解していただけそうな企業を訪問して、説明とお願いをしたことも、今は懐かしい思い出です。

私が「太陽の家」の昔のこと、中村裕先生の思い出をのべたのは、「太陽の家」の今後の益々の発展のために、「歴史を知らなければ、正しい発展は望めない」という言葉を賜わりたいからです。

私は平和と核廃絶と福祉の仕事に一生懸命です。友人の中には「戦うのは人間の本能。それをとめることはできない」という人がいます。が、私は平和、核廃絶、福祉は「文化」と理解しています。

「文化」とは生物の中で考える能力を持っている人間だけが作りあげることが出来るすばらしいものと思っています。

「太陽の家」という「文化」の輝かしい将来のために、「歴史を忘れないこと」「歴史を語り伝えること」をお祝いの言葉の一つにさせていただきます。

太陽の家30周年を迎えて

韓国社会福祉法人聖再園代表理事　南　　諰　均

日本の障害者福祉の先駆者故中村裕博士は、1965年「世に心身障害者はあっても仕事に障害はあり得ない」「保護より働く機会を」と主張し、職員わずか十数名で「太陽の家」を創設して以来、あらゆる困難を乗り越えて、今日の太陽の家を世界的な障害者の企業として育て上げてきました。今年で30年を迎えたことに対し、偶然にも韓国で、同じ医師でありながら、同じ障害者の施設をほぼ同じ時期に始めた同志として、心から賛辞をお送り致します。

「太陽の家」を今日のような世界的に有名な障害者の働く工場たらしめた陰には、故中村先生の不屈の信念とあふれる情熱に加え、その背後には、現理事長畑田先生のたゆまない協力と従業員達の積極的参加があったからです。聖書の言葉に「一粒の麦がくされて、多くの実を結ぶ。」とありますが、一人の偉大な発想により多くの業績を残しました。太陽の家は別府を始めとし、愛知・京都・大神と広がり、障害者のモデル工場として世界中の多くの人々がその経営を学んでいます。太陽の家の特徴は、企業との共同出資、企業も協力した授産訓練、独自の職能開発センターの経営、地域社会とのふれあいや国際交流など幅広いすばらしい発展ぶりに敬服しています。

私と太陽の家の交流は1967年から始まりました。偶然来日していた私は、秋山先生の紹介により故中村先生にお会いして以来、翌年には故中村先生の好意で韓国で初めて私の施設の障害者グループが太陽の家を訪問することができました。1975年には、私の施設の障害児５名が１年間太陽の家で職業訓練を受けました。滞在中たまたま第１回フェスピック大会が大分・別府で開催され、その５名が韓国の代表選手として大会に参加することができました。1984年愛知県蒲郡市で開かれた第１回国際障害者レジャー・レクリェーション・スポーツ大会では、故中村先生の特別な招待で一行が参加でき、先生一家と私ども夫婦が久しぶりに再会した時、先生が「お互い健康に注意してもっと障害者のために頑張りましょう。」と言っていました。それから数カ月後の７月23日先生の急逝が知らされ、私は非常にショックでした。先生が協力を惜しまないと言われたソウルパラリンピックは、1988年成功裡に終わりましたが、その式典に先生がおられなかったのが今尚残念でなりません。

太陽の家と私どもの施設は1968年から交流を続けてきましたが、1989年５月17日には両施設が正式に姉妹施設を締結しました。30周年式典には私達もぜひ参加したいと思っています。どうか太陽の家とりわけ共同出資会社や協力企業の皆様が今後ともますますの発展をなさり、アジアにおける障害者のモデル企業としての主導的役割を果たして戴きたく、創立30年にあたり衷心から期待し、お祝い申し上げます。

目　次

太陽の家全景写真

井深　大　挨拶 …… 4
畑田和男　挨拶 …… 5

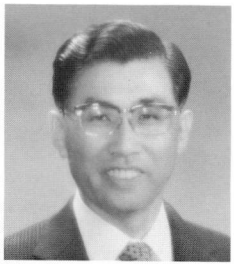
祝　辞

森井忠良 …… 6
平松守彦 …… 7
井上信幸 …… 8
立石孝雄 …… 9
ハリー・ファン …… 10
水上　勉 …… 12
秋山ちえ子 …… 14
南　諶均 …… 15

30年のあゆみ …… 17
組織運営の概要 …… 65
定款目的の変遷 …… 66
施設一覧 …… 67
現在の役員 …… 68
歴代役員 …… 69
主な補助金 …… 72
見学・来訪者の状況 …… 75
人員の推移 …… 76

施設の概要 …… 77
現在の作業場状況 …… 78
事業種目の変遷 …… 88
共同出資会社一覧 …… 90
授産施設から社会復帰した人の数 …… 92
給与・工賃支給実績（平均月額） …… 93
出　勤　率 …… 94
障害別人員の推移 …… 95
受診状況（別府事業本部） …… 96
受診状況（愛知事業本部） …… 96
受診状況（京都事業本部） …… 97
大分国際車いすマラソン大会参加状況 …… 98
全国身体障害者スポーツ大会参加状況 …… 99
国際ストークマンデビル競技大会参加状況 …… 100
主な国際スポーツ大会への参加状況 …… 101
海外旅行へのチャンス …… 102
研究開発の概要 …… 103
30周年記念作文 …… 118

30年のあゆみ



創設者 故 中村 裕 博士

昭和40年（1965年）、「身障者に働く場所と憩いの場所を」と副題の付いた「別府リハビリテーションセンター設立趣意書」が、社会福祉法人別府整肢園の中村裕園長によって世に出された。

設立趣意は次のように述べられていた。

「現在、わが国には百万人を越える身障者がいるが、その就職率は欧米先進国の80%に比し40%と極度に低い。然もその多くは生活保護の対象となっている。又病院で医学的治療が終わっても障害に適応した仕事がなく、在院日数はいたずらに延長し病床回転率は低下しつつあるが、残念ながら退院後のリハビリテーション施設はない現状である。

先年東京で行なわれたパラリンピックの外国選手の多くは、我が国の選手が病院収容者であるのに比し有給就職者であり、且つ在院期間が平均6カ月と言う事実は国家財産的見地からみても税金消費者を支払い者にかえる事は大きな意義がある。又身障者自身にとっても自活出来ればこれにすぎたる喜びはないであろう。

以上述べた身障者の社会復帰への経路を開くために米国に於ける善意工場（GOOD WILL INDUSTRY）、英国に於ける庇護職場（レンプロイ）を参考にし、我が国の国情に添い身障者の自活と職業指導に適した工場及び宿舎を提供し、豊富な別府温泉を利用した西独、オーストラリアにみられる様な身障者の残存機能強化と身障者の憩いの家を兼備した別府リハビリテーションセンター設立を企図したのである。」と。

対象者は「残存機能を充分に発揮した自活を志す全国の身障者」であり、事業内容は「生産部門」と「憩いの家（残存機能強化）部門」からなっていた。

「生産部門」は、身障者に対する保護的、慈善的な従来の施策とは異なり、残存機能に応じた仕事を提供し、一般企業と同じ能率給のもとに、「独立採算の見込みのある業種は企業化する」ことを目指していた。

「憩いの家（残存機能強化）部門」は「単なる休養宿泊施設ではなくヨーロッパにみられる様に専門医の指導による短期入所機能強化を主目的」としていた。そのための施設として、車椅子バスケットも出来る機能訓練室と、25m 6コース（内2コースは視覚障害者用の設備をする）の温泉プールを描いていた。

こうした構想の下に水上 勉氏を始めとする賛同者が集まって「太陽の家」誕生に向けての具体的な活動が開始された。

昭和40年(1965)　5.10　別府善意工場の設立計画が発表された。

別府整肢園の付帯事業として、家庭用品の廃品を集めて、再生し販売しようという、アメリカのグッドウィル・インダストリーズの方法を取り入れようとした。けれども、この計画は見事に失敗した。アメリカと日本では経済事情が違っていた。廃品と言っても、再生できるものではなく、まったくのガラクタばかりが集まった。

計画は再び練り直すことになった。

不要品の回収はガラクタの山になった

9.11　別府リハビリテーション・センター設立発起人会の開催

発起人：高安慎一、山本清人、羽田野次郎、黒木利克、伊勢久信、水上　勉、中村　裕

目的は、身体障害者の働く工場の建設であった。

9.28　別府リハビリテーション・センター設立準備委員会

財団法人「別府リハビリテーション・センター」とするはずであったが、英語では一般にわかりにくいのではと、水上勉氏の提案した「太陽の家」に名称を決め、社会福祉法人とした。

「工場」の建設から「施設」へと一歩後退した形になったが、まず形を作り、基礎を作ることにした。

そして小野田セメント会社の療養所(敷地1,800坪、建物ブロック平屋179坪)の購入を決定。

開会式のテープカットをする
木下知事と高安理事長

9.30　小野田セメント会社との土地建物売買契約を締結

10. 5　太陽の家開所

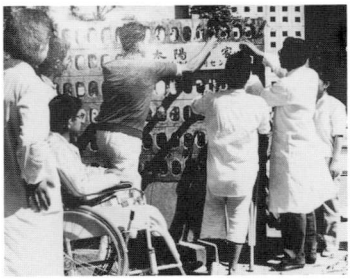
木下郁大分県知事らのテープカット、別府整肢園児童のブラスバンド演奏、入所者(15名)代表の須崎勝己氏の宣誓などが行われた。作業科目は義肢装具部、竹工部、金工部、木工部、洋裁部。

昭和41年(1966)　1.14　新成人者のための祝賀会を行う。新成人者２名。

1.15　第１期建設計画のプラン作りが始まった。

九大工学部・青木教授、後藤組、菊池氏などによって。

建設予算は、	建築工事費	46,715,620円
	初度調弁費	1,350,000円
	合　計	48,065,620円
財源内訳は、	県費補助	30,307,500円
	自己負担	17,758,120円


看板を掲げる入所者たち

昭和41年(1966)　1. 中旬　「太陽の家」東京事務所を開設

仕事の確保、活動資金、広報その他の連絡の便を計るため。寄付金を集めるための相談会を開く。

水上勉氏、秋山ちえ子氏、伴淳三郎氏、橋本祐子氏、J・W・ダート氏、それに中村裕であった。

タイムカードシステムを導入

2. 1　タイムカードの採用。入所者34名となる。

太陽の家のシール、ステッカーを東京で作成し、配布。

国有地減額譲渡申請を始める。

2. 3　小野田セメントおよび同健康保険組合と土地建物売買契約締結。

1.25　社会福祉事業振興会からの借入2,000万円決定

2. 3　国庫補助2,000万円

県費補助1,000万円交付決定

2. 3　小野田セメントに土地建物代金2,500万円支払い

当初、2,700万円の契約であったが、その後、先方の好意で減額になった。

開所当時、食器を買うお金もなく、隣の旧海軍病院の食器をもらって使った

2.14　社会福祉法人「太陽の家」としての認可がおりる。

これによって別府整肢園から独立した施設となる。

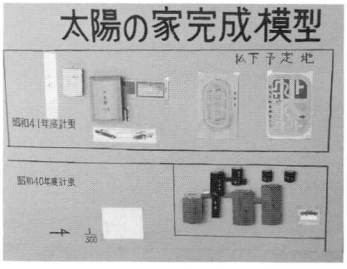
法人設立時の役員

理事長：高安　慎一

常務理事：中村　裕

理　事：水上　勉、黒木　利克、山本　清人、羽田野次郎、伊勢　久信

監　事：堀　七衛、橋本　和子



自動車教習所の建設を描いたこともある

2.15　第1期建設工事入札現場説明会

3. 5　第1期建設工事着工

3. 8　社会福祉法人設立登記が完了した。

基本金は14,318,000円であった。

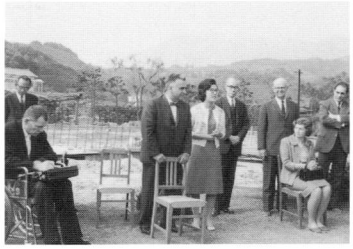
4. 1　身体障害者授産施設として指定される。

指定通知を受けたのは6月3日である。

これによって、国、県から委託費が入ることにより、経営の基盤が安定した。自立した会社を作ることからは一歩後退した形になったが、いつかは会社をという決意をなくしたのではなかった。

昭和41年(1966)

木の芽会の機関紙“むぎ”


ビスカーディ氏も訪れて
(ジャスティン・ダート氏は運営委員として参加した)

開所間もない頃の憩い風景

身体障害者授産施設太陽の家授産場、定員34名。
授産科目：義肢、木工、竹工、縫製、印刷

4. 1　毎日５分間の朝礼をはじめる。

4.16　自治組織“木の芽会”が発足
(のちにむぎの会として発展していく。)

4.19　秋山ちえ子氏が月刊誌「主婦の友」のために取材。
これによって全国的に大きく報じられることとなった。
その他のマスコミも好意的に取り扱ってくれ、その後の募金活動の大きな助けとなった。

4.30　アメリカ・アビリティズ社のビスカーディ氏が来訪

5.31　新しい作業棟が出来上がり、木工、竹工、金工科が移動。

6. 3　身体障害者授産施設指定通知受領(昭和41年４月１日付)

6. 5　第６回大分県身体障害者体育大会に参加
昭和36年に全国で初めての身体障害者スポーツ大会が大分県で開催され、37年には第11回国際ストークマンデビル競技大会に日本から最初の参加選手２名が大分県から選ばれた。
これらが、39年の東京パラリンピックへとつながっていく。
この年、太陽の家から初めて15名が参加、以後毎年多数が参加している。

6. 7　ハス池(現在の職能開発センターのあるところ)の埋め立てを始める。

6.20　大分の菅製作所からプレス機械が搬入され、パイプ椅子部品の生産を始めた。

6.25　温泉権を小野田セメントから買取り、名義変更が完了する。

7. 1　金工科のプレス作業が開始される。

7. 2　ＮＨＫテレビ・時の話題で「立ち上がる障害者」として放映され、全国的な認知がさらに深まる。

7.11　日本自転車振興会から、第２、第３作業棟の建設資金として2,524万円の補助金が決定する。

7.28　中村常務理事を囲んで、寮の名前を決定する。
九重、鶴見、由布、扇の各寮

7.31　第２、第３作業棟の建設杭打ちが始まる。

昭和41年(1966)

パイプイスの生産

8. 1　作業員の手によって、簡易手洗い場を作る。

8.　毎日バスケットの練習をすることを決め、練習をはじめる。メンバーは小田、沼田、寺川、川見、沖津らであった。

8.16　国立病院からの土地(7,475m²)の払い下げを受ける。
敷地面積13,425m²となる。

8.20　木の芽会主催の納涼大会が催される。

8.23　日高市蔵氏の寄付により、タッパーウェアーから40万円でリフト付きバス(19名乗り)を購入。
東京パラリンピックで活躍したもので、後年、フィージーに贈る。

8.23　木の芽会の応援で売店を開く。

9. 1　車椅子スポーツ大会を開催。
全国から約100名の脊髄損傷者を集めてスポーツ大会を開催した。太陽の家の中核となり、やがては運営までも担ってくれる優秀な身障者に来てもらう狙いであった。しかし、病院や、労災保険で生活している彼等には労働意欲は薄く、この試みは失敗に終わった。
バスケットボールでは対九州労災に勝ち、対国立箱根療養所に負けた。槍投げでは、小山茂（現、上野茂氏）が新記録を樹立した。

義肢補装具の製作

9. 3　第１期工事の落成式、130名の方々が出席。
２つの寮と１つの作業棟が完工し、定員は90名増え、124名となった。

建築面積	2,115.5m²
総工費	42,907,946円

10. 3　創立記念日の行事を行う。

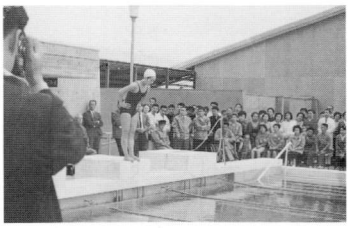
10.14　第２期工事の落成式。

第２作業棟	801.99m²
第３作業棟	690.67m²
プール	490.00m²
建設費	32,761,200円(補助金：2,524万円)

授産作業場の整備近代化が行われ、安全適正な作業環境が整った。

縫製科ではパイプイスのカバーなどを

10.18　プール開き
水泳は全身運動であり、かつ水の浮力を利用できるた



高橋栄子選手を招いてのプール開き

昭和41年(1966)　め、身体障害者の機能強化、回復訓練には最適のスポーツである。このため太陽の家設立の当初からその建設を計画していたが、この年、お年玉の補助金250万円が得られ、それに自己資金20万円を加えて建設が実現化した。25mの5コースと、階段、スロープを設けると共に、一部に浅い部分と手摺をつけた。国内における身体障害者用プールの先駆けを作った。プール部分は屋外であったが、他に脱衣室、シャワー室を設けた。

10.22　天皇、皇后両陛下行幸啓。

11. 6　皇太子ご夫妻行啓。

12.19　餅つき行事を行う。

12.21　大分大学のクリスマスパーティーに参加する。

昭和42年(1967)　2.27　西鉄ライオンズがチャリティー行事として大分県営球場で善意野球を行う。

2.28　所内結婚第1号、姫野国夫さんと船木道代さん

4.18　大分方面でも募金箱を設置し、募金活動を開始した。

4.20　小倉の井筒屋で太陽の家写真展を開催する。

昭和42年(1967)　5. 6　広島若草園の岩崎貞徳氏に「障害者機能の方向づけについて」と題してタワー法の講演をしてもらう。

障害者の医学的側面と就労との関連性について科学的な取組の必要性を考えていた。

「失われたものを数えるな、残されたものを最大限に活用せよ」という、グッドマン博士のことばがここにもあった。

木工科の作業

5.11　早川電機株式会社からコンプレッサーなど3台が届く。

手内職的な生産活動ではなかなか経済的自立を計るだけの収入が得られなかった。そこで、もっと付加価値の高い製品を作ることへの取組を始めたのである。マスプロダクションによる大量生産への挑戦であった。

残された機能を最大限に発揮できるように、安全で能率的なラインが作られた。

5.16～17　トキハ(大分市)で太陽の家写真展を開催する。

5.19　第2作業棟の工場開きを行う。早川徳次氏も式典に参列された。

木工科(早川電機)作業員26名、クリーニング科(綿久寝具)

モーターの音が作業場の中に響き渡り、工場としてのスタートを切った。労働者になることへの誇りが作業する人々の中に沸起こった。

基準寝具のクリーニング

5.22　劇団プークのチャリティー公演が大分文化会館で行われる。

6.19　木工ヤグラ部門の操業を開始する。

シャープの電気ごたつのヤグラ部門の生産活動である。本格的なライン作業で製品が出来上がっていき、作業場の中にはモーターの回る音がして、工場という雰囲気ができた。

だが、作業環境は決して良いとは言えなかった。まだ、集塵機が無く、作業員たちは口にタオルを巻いての作業を強いられた。

日産70台、12月には作業員35名となり、日産120台に、昭和48年には70名で850台、50年には60名で1,200台を生産するまでになった。

昭和42年(1967)　7.　第３期工事、鉄筋３階建て、1334,932m²
世帯用、女子単身用宿舎(桜寮)など、体育館の備品費をふくむ建設費は35,164,000円。

7.18　医務室が設置される。

7.20　第３期、第４期工事開始。
第４期は機能強化センター体育館642m²で、この建設資金は文芸春秋社長佐々木茂索氏から遺贈された1,200万円をあてた。

7.22　夏期手当てが支給される。

7.30　木の芽会主催の納涼大会

9.14～20　箱根療養所スポーツ大会に参加する。

12.17　木の芽会主催クリスマスパーティー

12.21　期末手当て支給

12.　パイプ椅子の生産は販売の失敗（受注手形の不渡になる）から廃止することになった。
物を作ることはできても売ることは無理だと判断し、以後、物づくりを中心にした。

レンズキャップを生産する金工科

昭和43年(1968)　1.30　心電図などの検査を行う。

2. 4　別府警察署、消防署の協力を得て、避難訓練を行う。

2.10　第３・４期工事落成式、作業場見学、式典参加450名、体育館(機能強化センター、642m²)は「佐々木記念体育館」と呼び、これによって太陽の家のスポーツが育っていく。体育館の落成式に間に合せて太陽の家讃歌が作られ、朝礼のときなどに歌われた。後年、この歌は作り変えられた。

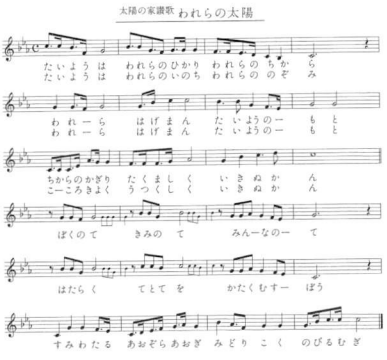
新築になった体育館の前庭でのくつろぎ

太陽の家讃歌　われらの太陽

作詞　小林恒夫
作曲　岸本吉生

一　太陽は吾等の光　吾等の力
吾等励まん　太陽の下
力の限り送しく　生き抜かん
ぼくの手君の手　皆の手
働く手と手を　固く結ぼう
澄み渡る青空仰ぎ
みどり濃く伸びる麦

二　太陽は吾等の命　吾等の望
吾等励まん　太陽の下
心潔く美しく　生き抜かん
ぼくの手君の手　皆の手
働く手と手を　固く結ぼう
澄み渡る青空仰ぎ
みどり濃く伸びる麦



昭和43年(1968)　4．1　身体障害者労働研究室(後の身体障害者職能開発センター)が設置される。

初めの太陽の家看板

太陽の家の開設当時の看板には「日本、人的機能活用センター」と添え書きされている。この事が意味するように「機能開発」と言う事は太陽の家の設立当初からの大きな目的であった。そこで「入所希望者が持っている残存機能はどの程度か。どの職種に向くのか。彼等が安全に能率的に働くには機械をどう改良し、どうレイアウトすればいいのか。過労と合併症を起さないためにはどうすればいいのか。日常生活を楽しく行えるようにするにはどんな配慮が必要か」を科学的に検討。その後、昭和46年秋には「身体障害者機能開発センター」となり、昭和54年には「身体障害者職能開発センター」となって、研究、開発を続けている。

この研究室はすでに前年からその実態は存在していた。シャープの電気ごたつの木工ヤグラの生産に当たって、生産工程と身体障害者の機能面、医学的管理をうまくマッチングさせるための研究を行い、作業工程の分解と身体機能を考えた配置によって、ライン作業を可能にしたのである。こうして、近代的な工場への歩みが始まった。

4．1　社会党委員長 勝間田清一氏来訪

4．3　木工工場に集塵装置を設置する工事が始まる。

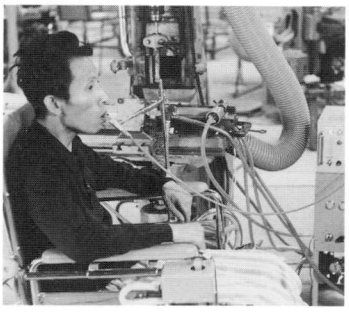
4.25　韓国大田市の身体障害者施設「聖世再活院」から児童ら14名来所。

以来、交流が深まり、平成2年姉妹施設の締結をする。

6．1　金工科京都度器がスチールメジャーの組み立てを開始。

6.18　園田直 厚生大臣来訪

6.19　口スイッチによる木工用ドリル試作1号機を公開。


口スイッチによる作業風景

このロスイッチは、自動車運転、テレビ操作、電灯の点滅、ドア、カーテンの開閉など、寝たきりの重度障害者でも日常生活動作の一部の自立を図る多目的スイッチとしても使用できるもので、当時としては注目を集めたものである。

昭和44年(1969)　9.21　身体障害者雇用促進に貢献したことにより労働大臣から表彰される。

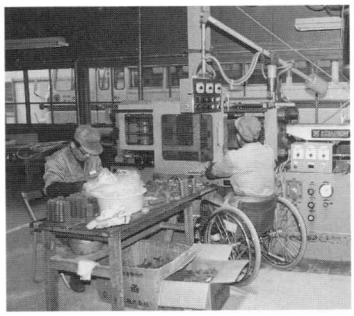
10.21　木の芽会主催の運動会を行う。

11.12　常陸宮ご夫妻ご来訪。

1.15　プラスチック射出成型機１台、付属機器一式を清水市の川口鉄工所から寄付を受け、２月から直営のプラスチック科が生産を開始する。

このプラスチック成型の仕事を持ち込んだのは東京工業大学の森政弘教授(当時・東京大学生産技術研究所助教授)であった。

そして、この１号機は車いすでも安全で、能率よく操作できるように30数か所の改造を行った。



30数か所の改造をしたプラスチック射出成形機

2.20　プラスチック科生産開始。

径22センチの湯桶と、菊の模様の入った小鉢の成型。

４人、２交替16時間稼働、日産3,000個でスタートしたが、採算ベースに乗せるために、６人、３交替24時間稼働、日産5,000個とした。24時間稼働はこれが初めてであったが、世間から非難を浴びた。

4.19　隣接国有地（現在の本館、福祉工場の場所）6,633㎡を減額(2,785万円)譲渡してもらう。

太陽の家の所有土地面積は20,058㎡となる。

4.27　城島高原で木の芽会レクリェーションを行う。

5. 7　レントゲン車の払い下げを受ける。(別府市から)

太陽の家のバッジを作成、90円で配布。

7. 1　全国労働安全週間行事の実施。

安全委員会の設置、標語の募集、年間無事故職場の表彰。

労災防止対策の徹底を図る。

7. 4　理事長に中村裕、常務理事に畑田和男が就任。

7. 5　プール開き(木の芽会主催)

別府大学水泳部、別府女子短大ハワイアンクラブ、全逓別府支部の方々のご協力による模範水泳など。

7.15　ストークマンデビルゲームズに太陽の家から初めて参加。江藤秀信スラローム１位、森崎一晴水泳３位、ウィーンのゲームで江藤秀信が槍正確投げで金メダル２、スラロームで銀メダル１を獲得。

太陽の家から初めてストークマンディビル競技会に参加

昭和44年(1969)　日本からの初参加は昭和37年、大分県からの２名であった。

8. 4　サマータイムを実施。
始業、終業を15分繰上げ、９月30日まで、
就業時間　8：15～17：15、午前と午後に15分の休憩。

8. 5　社会福祉事業振興会と２千万円の借入契約を締結。
この頃新しい土地の利用計画について度々協議する。
福祉工場(正確にはこの時点ではまだ保護工場となっている)の建設計画が出される。
６階建て
福祉工場、宿舎、事務室、身障者労働研究所、
コンピュータ室、診療室、保育園、レストラン、
出張郵便局、銀行、憩いの家、娯楽室など
後に計画は縮小されて申請された。

ボイスコイル巻き作業

9.　電器科発足
ウェストン音機株式会社のボイスコイル巻きを行う

9. 9　ＢＧＭテストが実施され、時期尚早との結論を得た。

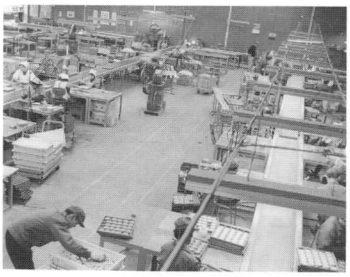
9.30　義肢科を廃止する。

10. 1　入所定員154名に増加。
土曜日の就労を午後30分短縮する。

10. 4　創立４周年の祝賀会を行う。
皆勤者の表彰、各クラブの紹介、記念夕食会など。

10.15　生活指導課が21時までの時差出勤体制となる。

10.20　ＮＨＫブックスによる「太陽の家の記録」が出版される。


京都度器の巻尺生産

10.24　新しい土地の埋め立てを開始。（国有地払下げ地）

10.25　金工科京都度器作業所のベルトコンベアーを増設。
日本船舶振興会補助事業によりポータブル心電計、ＶＴＲ多用途監視記録装置他計 750万円購入。

11.19　電器科の将来についてウェストン音機株式会社の首脳部と打ち合わせ。

12.23　餅つき行事、忘年会。

昭和45年(1970)　1. 7　クリーニング作業場で火災発生、小火でおさまる。

1.10　各作業場に昼食時、保安要員を配置することとなる。

1.26　県立別府養護学校中学部本年度卒業予定者４名の研修受入れ。

昭和45年(1970)　班長研修会を始める。
機械点検日を設ける。

2. 6　作業員の心電図、肺機能検査を実施。

2.20　国民健康保険税納付組合設立、組合長は事務局長とする。

2.26　ソニー株式会社井深大社長から白水社文学全集など83冊余を寄贈される。

2.27　午後3時の休憩時間に体操を実施。

4. 3　大分市三洋で川澄化学社長と理事長が事業導入について会談。

4.23　木工科モーター加熱で集塵機を焼損。

4.25　第一プラスチック科の二交替作業を実施。

4.30　中村理事長がストックホルム、スベトラエンスキードなどの身障者施設を視察。

5.15　日本硝子商事株式会社大津工場に5名、研修のため出向、7/17まで。

5.31　電器科および竹工科を閉鎖する。

6. 2　第二プラスチック科(マネキンの製作)を開設する。この頃、㈱安川電機製作所と事業導入関係の折衝を行う。

6.29　第二プラスチック科の一貫作業を開始。

7.10　県鉱工課および失業保険課と事業導入について話し合う。

7.15　本館建築工事の地鎮祭を実施。

8. 4　木工科に三面かんな・グレードサンダーを据え付ける。

8. 5　関西エバーブラック(大阪)へ近藤秀樹が研修出向、10/8まで。

9.19　体育祭、演芸会を行う。

9.30　金工科京都度器作業場の閉鎖。

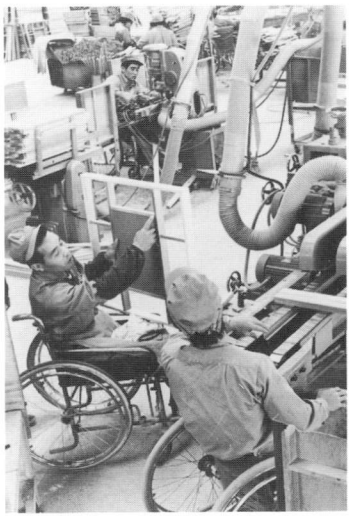
10. 1　田島製作所との企業提携によりスチール製巻き尺の加工を開始する。
この巻き尺製作を、京都度器から田島製作所に1日で切り替えたいきさつについては、「太陽の仲間たちよ」(中村裕著)に詳しく述べられているが、とにかく同じ作業員が次の日にはマークの違う同じ物を作るようになった。

10. 1　木工科の二交替制を実施する、12/15まで。

10.23　金工科田島製作所の創業披露式を行う。

11. 2　金工科田島製作所作業場からの初出荷。

マネキンを作るプラスチック科


集じん器なども揃った木工科

昭和45年(1970) 11.13　モデルハウス建築会議を行う。

テトラエース

12. 4　四肢麻痺の重度障害者用のモデルハウス「テトラエース」オープン。東京大学生産技術研究所の森政弘教授、池辺陽教授らが中心となって、ナショナル建材、東陶機器などの協力によって近代科学の粋を集めた実験用住宅を建設。

三角形の鉄骨スレートぶき平屋建40m²、ベッド、バス、トイレ、冷蔵庫、テレビ、電子レンジ、電話などが完備されていた。

超音波式リモコン式で電動車椅子による移動やドア操作ができた。

12.21　金工科田島製作所作業場の一部二交替制による生産を開始。

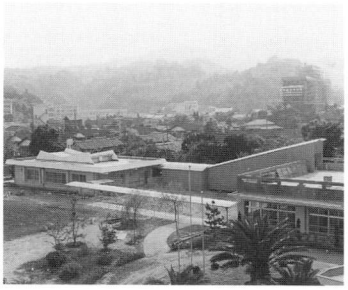
温泉掘削100m、自噴180ℓ/分、51度

昭和46年(1971) 1. 4　入所者に対し、各課長から太陽の家の方向、生活指導取扱い、会計業務の概要などについての講習を行う。

1.12　公衆浴場の設置について別府市と折衝を続ける。

1.14　脊髄損傷者に水分摂取の勧めを行う。

2. 9　大分銀行頭取、吉村薬品社長、大分県厚生部長、菊池理事、中村理事長らが募金活動について打ち合わせを行う。



太陽の湯が完成

2.10　太陽の家将来問題研究会を開く。

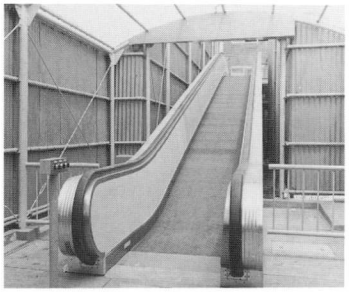
大分県社会課と福祉工場について打ち合わせを行う。

3. 8　労働省から委託研究費100万円の決定通知を受ける。

大蔵省告示14号で1億円募金の寄付金指定をうける。

3.20　公衆浴場建設に伴う別府市補助金900万円が決定する。

浴場は「太陽の湯」と名付けられ、障害者従業員用と、地域住民へ開放した一般浴場が設置され、一般浴場は地域の方々に好評で、オープンしたこの年の5月から翌年の3月までの利用者は7万人を数えた。この当時の入浴料は大人10円、子供5円であった。障害者用の浴場は車椅子使用者も利用しやすいように工夫され、タイルも滑りにくい天草石を使っている。

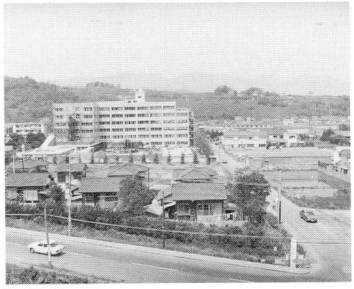


動く歩道

3.29　富士グループの寄贈で本館西南角に動く歩道(大阪万国博覧会で使用したもの)の設置工事始まる。

昭和46年(1971)　4. 4　この頃公害問題あり、市当局、地域住民の方々と再々打ち合わせ。

4. 6　県知事、県議会議員の不在者投票を実施、市長、市議会は21日。



本館完成当時の周辺風景

4.18　本館6階建て落成式、約300名出席。

本館落成を機に、たばこ小売り人指定、切手売りさばき人の指定を受け、公衆電話および電話ボックス、郵便ポストの設置、預金取扱所(大分県信用組合)の開設を行う。

6 階 建	8,148.25㎡
総 工 費	148,000,000円
県費補助	59,780,000円
自己負担	88,220,000円

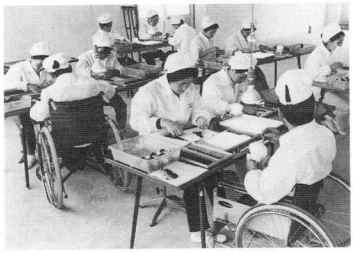
4.19　創立記念バスケットボール試合(体育館で)

5. 3～ 7　韓国聖再園訪問、理事長ご夫妻、車いす者等14名、

5. 4　天皇陛下よりご下賜金を賜る(古希につき)

5.13　あゆみの箱から3,500万円寄付受ける(本館5、6階建設資金として)

5.14　第8回日本リハ医学会(仙台)において畑田理事が研究発表。



医 療 機 器 科

5.14　社会福祉法人恵の園より6名の研修受入れ。

5.18　福祉工場検討会、厚生省、県当局と(事後数回話合いがもたれた)

5.18　日本自転車振興会補助金交付2,551万円決定(職能開発センター)

5.21　日本自転車振興会補助事業による労研部分増築着工。

5階建　1,298.35㎡

工事費　41,446,520円

5.29　全国肢体不自由児父母の会連合会講師として中村理事長が「人間尊重に基づく70年代の障害者対策」について講演。

6. 1　重度身体障害者授産施設の指定を受ける、定員83名。

6.12　金工科メジャー製作100万個達成。

6.24　県下募金発起人会、財界、政界等要人列席。

6.26　グッドウィル・インダスリーズ・インターナショナル

昭和46年(1971)　代表者会議(米国)に理事長出席～7/11
グッドウィル・インダストリーズのアジア・リハビリテーションセンターの指定を受ける。

7.　リフト付電動車いす試作第1号機できる。

7. 1　理容室開店、衛藤電気店開店(扇寮)

7. 6　陸上自衛隊奇術クラブの訪問を受ける。

7.10　プール開き(木の芽会)、別府大学選手による模範水泳。

7.17～18　県身障体育大会出場、金メダル15個他入賞、バスケットは太陽の家体育館で。

7.21　ＮＨＫＴＶ“あすへの記録”でテトラエースについて放映「身体障害者住宅への提言」というタイトルで。

8. 5　募金打ち合わせ会、マスコミ関係協力要請
コンピュータ・プログラマーの適性検査実施、80名。

8.16　福祉工場検討会実施。

8.17　スペイン、イタリアのリハ関係者来訪。

8.18　隣接国有地に雇用促進事業団住宅建設のため、身障住宅について打合わせ(県の要請)

8.　脊髄損傷者のプッシュアップのための音楽を流し始める。

8.20　木工科サンアップ荒尾作業所開始、神棚製作。

8.　新募金箱作成、プラスチック製、マーク、モットー入り。

9.　定例による褥瘡検査実施始める。

9.　福祉工場計画具体化につき、この頃より建築関係立案検討を行う。

9.19　中村理事長、秋山ちえ子氏が立石電機株式会社を訪問。立石一真社長と会見、福祉工場構想の実現化に理解を求め、協力していただくことになる。この立石電機株式会社を紹介していただいたのは当時の自由民主党幹事長橋本登美三郎氏であった。

9.20　ＯＢＳで太陽の家活動記録放映。

9.25　トキハデパート前で街頭募金を行う。

10. 4　立石電機㈱と協議、四方部長と、事業導入につき話し合い、以後急速に進展する。

10. 8　三菱財団助成金1,100万円受、心理、生理学的検査機器購入。

10. 9　秩父宮妃ご来訪。

理容室がオープン

褥瘡防止のプッシュアップ体操

テトラエースをご覧になった
秩父宮妃殿下

昭和46年(1971) 10.15　プラスチック科で巻き尺ケース製作開始。

神棚製作の工芸科

10.15　別府市より国民健康保険税完納表彰をうける。

10.16　元韓国王妃、李方子氏来訪。

10.16　日高市藏理事より、本館外壁部時計の寄贈を受ける。

10.16　障害者機能開発センター開設披露式実施。

10.16　日本肢体不自由児協会より10万円受、脳性マヒに関する委託研究費。

10.　企業主懇談会（木曜会）が始まる。

10.19～12.24　海外視察研修、野尻義孝労働研究室長(中央競馬社会福祉財団の助成で)

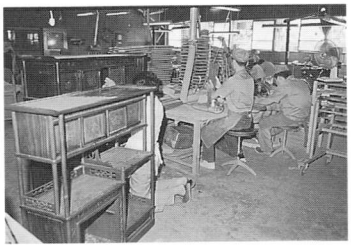
10.27　秋山ちえ子氏、橋本登美三郎夫人来訪。

11. 4　別府市助役荒金進氏より100万円の寄付を受ける、公害対策費として、木工の騒音防止壁を作った。

11. 7　木の芽会大運動会実施。

11.12　ＩＢＭ堀口マネージャー来訪。

11.13　パンパシフィックリハビリテーション会議(東京)において理事長研究発表。
「力動的職業更生に対するコミュニティ計画について」



家具製作の木工科

11.21　全国車いすバスケットボール選手権大会３位入賞。

11.22　元韓国王室、李玖氏来訪。

11.30　クリーニング科閉鎖。

12. 1　木工科唐木作業開始、唐木による高級家具の製作。

12.13　オムロン太陽電機株式会社の発足式。

12.18　忘年会実施。

12.22　大分労働基準監督署より立ち入り検査。

12.28　防火避難訓練実施(停電時)

昭和47年(1972) 1.12　立石電機本社四方部長他来訪打ち合わせ。

1.15　新成人者16名、市成人式で近藤秀樹が意見発表。

1.21　NHKTV明日を生きる“絶望からの挑戦”で江藤秀信を取材、放映。

1.24　大分県リハビリ施設研究会発足。

1.24　大分県労働基準監督署より監査を受ける。
障害者の残業問題について労働基準監督署から注意を受ける。

2.　リフト付電動車いす２号機試作。

昭和47年(1972)　2.　単調労働と作業ミスに関する研究実施。

2. 5　オムロン太陽電機株式会社設立登記。
資本金500万円、立石電機45%、太陽の家26%、立石電機関係者15%。
資本金のうち70万円（14%）は障害者の持株会“太陽会”の出資。
取締役社長には立石一真氏が就任。

福祉工場従業員採用のための面接

2.18　福祉工場従業員選抜試験実施。

2.20　ＯＢＳＴＶ“人間万歳”に長田夫妻出演放映。

2.23　県社会福祉施設整備費60,999,300円交付決定。
（福祉工場建設費）

2.23　韓国民族舞踊団９名見学。

3. 9　東南アジアより研修者一行９名受ける。

3.14　田島製作所の延原常務と業務打ち合わせ。

3.23　福祉工場従業員選抜試験、職業安定所による面接。

4. 1　福祉工場及びオムロン太陽電機株式会社操業開始。
オムロン太陽電機の社員５名、福祉工場従業員７名でスタート

建築面積	2,044.44m²
総 工 費	92,061,040円
県費補助	60,999,300円
自己負担	31,061,740円

福祉工場スタート

4. 1　応用資材科発足、電子部品組み立て準備作業。

4. 8　福祉工場及オムロン太陽電機株式会社創業披露式

4.13　研修センター建設費とし、日本船舶振興会より補助金交付決定通知受領、補助金額2,856万円

5. 7～10　在京募金発起人会開催、理事長出席。

5.10　大分県下の障害者福祉施設連絡協議会発足。

5.16　朝日厚生文化事業団主催沖縄よりの本土公害視察団来所
理事長、杉の井ホテルで講演。

5.17～19　全国職業更生施設協議会総会及び研究会開催（太陽の家）約100名出席。

5.31　関西地区募金打ち合わせに中村理事長出席。

6. 1　本館５、６階内装工事着工。

昭和47年(1972)　6.22　全国安全週間行事として講演会実施。
講師・労働省顧問岡部実夫氏、及び大分労働基準監督署次長

7. 8　第12回大分県身体障害者体育大会バスケットボール競技で太陽の家体育館が会場に。

7. 9　第12回大分県身体障害者体育大会に15名出場
金メダル13個他。

7.15　本年度より全国身体障害者スポーツ大会で車いすバスケットボールが試合競技種目として正式採用される。
霧島労災チームと模範試合実施。

7.20　定期健康診断実施、日赤車によるレントゲン撮影。

8. 9　ＴＶ大分、福祉工場について取材。

8.24　全国養護学校ＰＴＡ連合会で中村理事長講演(別府市)

9. 6　森繁久弥劇団一行来訪。

9.15　研修センター及び本館５、６階内装工事完工。

9.23～24　西日本ブロック車いすバスケットボール大会開催(体育館)
オムロン太陽チーム１位、太陽の家チーム２位。

両日本ブロック大会で初優勝

9.23　研修センター建築補助事業監査、日本船舶振興会鈴木部長。

10. 1　木工科シャープ作業場は、瑞穂工事株式会社がシャープよりの受注会社として契約締結。

10. 6　福祉工場指導監査のため厚生省更生課より３名来所。

10. 7　研修センター落成披露式
身障者・中島、杉尾、上田夫妻３組合同結婚式、
中村理事長、秋山ちえ子氏の媒酌。
研修センターの建設には、日本船舶振興会の補助金を受けたがその申請に当たって、その目的を次のようにのべている。「世界47ヵ国280社が加盟するグッドウィル・インダストリーズ・カウンシルにおいて、アジアのセンターに指定された太陽の家は国内はもとよりアジア各地から医学的、職業的リハビリテーションに関する研修生を受け入れることになったので、これら研修生の宿泊研修施設を整備して国内外における身体障害者の社会復帰の促進と国際親善に奉仕することを目

研修センター「憩いの家」
正面玄関

昭和47年(1972)

的をする。」と。研修センターは「憩いの家」と名付けられ、その後、国外のみならず、国内からも多くの、様々な研修生を受け入れ、同時に、太陽の家の人々のクラブ活動の場、そして、家族の宿泊場所として利用されている。

施設は宿泊室5室(定員10名)、研修室、集会室兼ラウンジ、会議室、図書室、お茶室、浴場などからなっていた。鉄筋コンクリート造り平屋建てで、噴水池のある中庭が明るく美しかった。1991年(平成3年)に機能強化研修棟として建てかえられた。

建物面積　733m²
総 工 費　36,500,000円
補 助 金　28,560,000円
自己負担　7,940,000円

10.16　身障者用住宅についての調査のため日本大学木下教授来所。

10.19　パラリンピック選手（田中慶博・梅田幾世）の派遣に大分県から補助金20万円が交付された。

10.31　金工科関西エバー作業場閉鎖。

11. 3　別府市功労者として理事長、表彰を受ける。

11.18　ユニーク・ソーシャルダンスパーティー開催、東京身障友の会片岡みどり氏の指導による。他20名来所。

ダンスパーティーを楽しむ

11.25　水前寺清子ショー(大分)益金より32,155円寄付受ける。ＯＢＳ大分放送より、木工科サンアップについて取材。

11.30　工芸科窓口サービスセンター部門閉鎖。

12.13　県社会福祉施設整備資金利子補給補助金1,566,520円交付決定。

12.17　フランス人、パトリック・ロービン氏研修のため来所。

1.11　中央競馬社会福祉財団より電動車イス製作開発費250万円交付決定。

1.15　成人式(別府市公民館)で御前照夫が男子成人者代表として意見発表。

成人式で意見発表

2. 1　医療機器科、流れ作業による量産体制に入る。

2. 6　募金打合会(東京)、橋本登美三郎氏、井深大氏、水上勉氏、秋山ちえ子氏等出席。

昭和48年(1973)　2.11　足立学園生27名研修。

2.22　1億円募金指定期間満了。

2.28　地元募金発起人会。

3. 5　自治親睦組織“むぎの会”発足。

福祉工場の発足とともに旧自治会「木の芽」の有力メンバーが大量に退会したため、運営が問題になっていたが、授産従業員、福祉工場従業員、事務局職員全員による新しい「むぎの会」が結成された。

3.10　大分県企画「大分豊かなる国」映画製作のための取材。

3.12　元太陽の家理事長・高安慎一氏逝去。

3.24　故高安慎一氏葬儀(体育館)

3.　オムロン太陽電機株式会社、黒字決算を計上
以後黒字経営を続けている。

4. 4　日本自転車振興会補助金交付内定通知
プラスチック射出成型機購入費991万円。

4.14～27　身障者スポーツリーダー養成講習会(東京)に江藤秀信（セキ損、車いす使用）が参加。

この頃活躍していたバンド
サニーエコーズ

5. 1　授産作業員にも社会保険の適用が認められた。後年、重度医療保障制度が出来て、その意義はうすくなった。

5.15　同志社大学大塚達雄教授の「脳性マヒに関する」講演会を開催。

この頃にはすでに重度の脳性マヒ者の問題が浮上していた。福祉工場の設置によって、ポリオや、脊髄損傷者の社会復帰についてはその方向性を見出していたので、次の課題に取り組まねばならなかった。そのため、中村理事長は翌月、早速、オーストラリア、センター・インダストリーに「脳性マヒ者の就労状況」について調査のため出張し、帰国後、次々と研究会を開いた。

「福祉都市を推進する会」のメンバーが市内各所の総点検を行なった

7.27　別府市が福祉モデル都市として指定される。

厚生省は別府市など全国6市を身体障害者福祉モデル都市に指定した。これは、身体障害者に対する一般市民の理解を深め、障害者が明るく、住み良い市民生活ができる環境を作ることを目的としている。太陽の家ではむぎの会を中心に「福祉都市を促進する会」を発足させ、積極的な活動を行った。

昭和48年(1973)　7.30　井深会長が当法人会長として朝礼で挨拶をされる。
むぎの会“太陽新聞”を創刊。

8. 1　韓国明暉園の全女史が来所。約半月太陽の家で研修。

8. 2　機能開発センター補助金として大分県から200万円交付。

ドーマン氏法研究会

8. 8　福祉モデル都市の指定に伴い大分県、別府市、身障者団体、施設関係者らが太陽の家で会合、30余名出席。

8.11　脳性マヒ者に対するドーマン氏法の検討会を実施。
医師、学者、脳性マヒ者を家族に持つ人達など約100名出席。

8.29　杵築市大字塩屋崎に土地約18,000坪購入、仮登記をする。
昭和51年に発表するサン・ニュータウン計画のための用地を目指していたが、当初は蜜柑園を経営した。

9. 3　博多港でのさくら丸オムロンテクニカル広場に福祉工場車いす従業員多数が見学旅行。

9. 8　オーストラリア・センターインダストリーズ理事長マクレオド氏、総支配人ヒューム氏来所。
「脳性マヒ者の職業更生について」講演、約150名出席。

9.17　別府市補助金交付決定30万円。
募金の一環として、他の市町村からも入金あり。

農園芸作業にも挑戦の園芸科

10. 1　園芸科が発足。杵築のみかん園および別府敷地内の庭園管理を主な作業内容とした。

10. 6　日本鋼管株式会社から動く歩道の視察、福岡空港に設置のため。

10.29　石坂直行氏講演「車いすヨーロッパひとり旅」を実施。

11.10～16　初めての文化祭を実施。
書道、華道、フラワーデザイン、映画会、バザー、福祉都市を促進する会、前夜祭など多彩な催しを行う。

11.11　「ハンディキャップ別府ガイド」を発行。
太陽の家関係者を主メンバーとする福祉都市を促進する会の編集。

11.13　脳性マヒ治療法の権威者、アメリカのドーマン氏来所。
勉強会を実施、井深大会長も来所。

11.15　北九州に設置を予定されている福祉工場、用地などについて市民生局から来所、視察。

昭和48年(1973) 11.23 大分市・トキハデパートに新設の身障者用トイレオープンに福祉都市を促進する会のメンバーが出席。

12. 期末手当てから全従業員が創立以来初めての募金活動を実施し、児童施設栄光園にスベリ台を贈る。集まった金額は6万5千円。大分市の後藤体器株式会社のご協力を頂き、スベリ台を5万円で購入、残りも寄付した。

昭和49年(1974) 1.12 石油ショックによる材料不足などのため第二プラスチック科のマネキン人形製作を閉鎖する。

1.17 フィリピン、レッダ夫人が2月18日までの間研修のため来所。27日からパドリゴン氏も合流。

中国から身障スポーツの視察団が訪れた

1.22 オーストラリア製電動車いすを受領。

2. 4 中国スポーツ視察団一行が来所。

2.20 杵築市に第二次土地購入、2町歩、1,600万円。

2.28 むぎの会福利厚生分科会のなかに労働研究会が設置された。

労働条件の改善、生活条件のレベルアップを目指して研究することとなった。第一回の会合では労働時間の短縮の問題が検討された。

3.22 社会福祉法人清水基金からさくら寮暖房費として500万円寄贈される。

3.25 前川財団から消防退避訓練設備費として40万円助成を受く。

東京事務所の入口

4.29 日本車いすバスケットボール選手権大会で準優勝。

5.29 太陽の家東京事務所とサン・インフォメーション・センターを開設。

昭和48年10月1日「サン・ホーム・サロン」という名のセンター構想を発表した。老人や身体の不自由な人のための環境設備相談室の必要性を社会に訴えたのである。同年11月11日には工業技術院も充実したヨーロッパの身体障害者日常用具展示センターの例をあげながら、この相談室の設置に理解を示してくれた。

情報センターの展示室

現在このセンターは社会福祉法人身体障害者自立情報センター（理事長 秋山ちえ子）となって、障害者に必要な自助具の研究、開発、展示、指導、ニュースの発行、相談などを行っている。

昭和49年(1974)

つげ細工を作った工芸科

6. 1　特機科ソニーが発足、17名の従業員がラジオの組み立てを行う。
昭和53年には会社設立にまでこぎつける。

9. 5　川澄化学工業株式会社の協力による医療機器科を廃止。

9.20　アビリンピック旋盤部門において杉尾良一さんが3位入賞。

10.17　フェスピックに発展途上国を参加させる会が発足し、街頭募金活動などを開始。

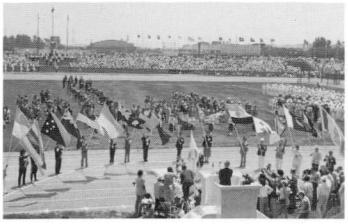
10.21　特産科が発足、椎茸の包装を行う。

12. 2　工芸科が発足、つげ細工をする、55.6.30閉鎖。

12.11　韓国聖世再活院生5名研修開始、1年間。

昭和50年(1975)

街頭での協力を呼びかけ



フェスピック大会の開会式

1.23　発明工夫コンクールで入賞。
レバー付車いす、和室車いす、航空機内用ミニチェアー

2. 1　参議院議長 河野謙三氏来訪

4.11　中村理事長が吉川英治文化賞を受賞。

4.28　企画広報室長吉永栄治が別府市議会議員に当選。
全国初の車いす議員が誕生、以後多くの人達の立候補を勇気づける、国会議員の八代氏もその一人である。
得票数1,868票、立候補者48人中14位当選、議員定数36名、選挙応援には秋山ちえ子さん、野末陳平氏、宮城まり子さんらも駆け付けてくれた。

5.16　太陽の家前の横断歩道に盲人用ミュージックチャイム信号機を設置。

5.26　日本自動車工業会からリフト付バスを寄贈される。
約15年近くもの間太陽の家の人々の足となる。

6. 1　第1回フェスピック大会開会式。(大分市陸上競技場)
フェスピック(FESPIC)とは、The FAR EAST and SOUTH PACIFIC Games for the DISABLEDを略して作られた名称です。全身体障害者を対象としたスポーツ大会で中村理事長が提唱し、大分県などが主催した。

7. 1　太陽二平株式会社が設立された。
シャープのヤグラコタツを受注する会社として二平合板株式会社、瑞穂工事株式会社などの出資により設立された。

昭和50年(1975)　8. 9　ＯＴＯ(むぎの会傘下のクラブ)主催による第一回納涼大会が開かれた。地域交流を目指した夏の夜のお祭りは、その後むぎの会主催としてつづいている。

10. 5　創立10周年記念式典を実施。

10.17　特機科ソニーの森伸吉がアビリンピックのラジオ・テレビ修理部門で２位入賞。

11.19　中村裕著「太陽の仲間たちよ」が講談社から刊行

昭和51年(1976)　2.12　電話級アマチュア無線講習会を開催。
３月13日に10名が合格通知を受ける。

3. 1　大分県知事他へ福祉システム村構想案を提出。
サン・ニュータウン構想である。

旧体育館裏のアーチェリー場

6.28　オーストラリア・センターインダストリーズ所長のマクレオド氏がセンターインダストリーズについて研修センターで講演を行った。

7. 5　大分県福祉の町づくり委員会が開かれる。

7.10　身障者用総合コントロールシステム、リンガダック（環境制御装置）を導入。

9.11　台風の影響で工場が浸水被害を受ける。

10.10　第５回フェニックス杯争奪全国身障者アーチェリー大会に３名が参加し、松倉英治選手が大会新記録で優勝。

ブラッドゴールド教授の講演会

11. 2　体育館裏にアーチェリー場をつくる。

11. 8　スウェーデン・エーテボリ大学のスベン・オルフ・ブラッドゴルド教授を招いて、「身障者のリハビリテーション過程及び社会への触れ合いについて」の講演会を開催。県職員、老人ホーム、病院など福祉関係者約320名が参加。

昭和52年(1977)　1. 5　インドネシアに車いすを６台贈る。

5.18　オランダの身障者の町「ヘッド・ドルプ」の創設者アリ・クラップワイク博士を招いて講演会を行う。

世界の実践者を招いて福祉の街づくりの研究が行なわれた

7.11　第二作業棟の解体工事が始まる。

9.22　第１回職場対抗バドミントン大会を実施。
労働衛生週間の一環行事として、日頃運動をしていない人も参加できるように考え、平成元年の13回大会まで続いた。珍プレー、迷選手を続出し、職場の楽しい雰囲気を作り上げることにも貢献した。

昭和52年(1977)　10. 1　むぎの会レクリェーションを住吉浜で実施。

11.13〜23　フェスピック・オーストラリア大会応援旅行
太陽の家から選手５名が参加。応援団23名

12.11　スーパーマーケット「サンストア」が開店
障害者の職域拡大と、地域サービス、交流をめざすとともに、慈善ではなく、営利を目的とした事業としてスタートした。店員16名のうち、身障者６名、売り場面積は　490m²、総工費約２億円。３Ｆ建てで、２Ｆにサンインダストリーが、３Ｆにオムロン太陽が入居した。

12.17　別府市ロードレース大会の車いす部門に９名が参加。中部中学校前をスタートとする2.7kmのコースが新設され、女性２名を含む25名が参加。このことが後に車いすマラソン大会開催の引き金となる。

オープン当時のサンストア

第１回目の車いすロードレース

太陽の家讃歌

中村　裕　作詞
八洲秀章　作曲

Allegretto　♩＝108

よのうなばら　あかねーさす　ーむ
らーさきはゆるゆふーつるみ　ーき
ばうにみちてむねーをーはり　ーっ
よくあかるくいきーぬーかん　ーわ
れらのちからたいようのいえ　ーた
いようのいえ　ーえ　ーえ　ー

太陽の家讃歌

中村　裕　作詞
八洲秀章　作曲

一、豊の海原　西さす
紫映ゆる　由布鶴見
希望に満ちて　胸をはり
強く明るく　生き抜かん
われらの力
太陽の家　太陽の家

二、麦は伸びゆく　青空に
たとえわが身に　障りあり
世の雨風は　辛くとも
こころあわせて　生き抜かん
われらのいのち
太陽の家　太陽の家

三、とわにつきせぬ　湯の里に
われら集いて　肩を組み
理想に燃えて　励みつつ
平和の為に　生き抜かん
われらの光
太陽の家　太陽の家

昭和53年(1978)　1.14　株式会社サンインダストリーが設立された。

資本金500万円、ソニー51%、太陽の家23%、その他26%

1981年９月１日ソニー・太陽株式会社に社名を変更。

ソニーのオーディオ製品の生産を行う。

昭和53年度の売り上げ5,477万円、利益116万円、株主への配当20%

第２作業棟オープンのテープカット
中央は橋本登美三郎氏

1.15　第二作業棟が改築され、落成式を行う。

この式場で、新しい太陽の家讃歌、一粒の麦、応援歌が制作発表される。（42頁に楽譜掲載）

2.16　航空機の車いす者の単身搭乗拒否事件がおこる。

むぎの会では太陽新聞にキャンペーン記事を掲載、関係団体に改善を要求。その結果、３月15日づけで身体障害者の航空機搭乗制限が緩和された。

2.23　タキ商会が太陽の家内で車いすの修理サービスを開始する。

3.13　ＳＣＰ(重度脳性麻痺)プロジェクトチームが発足。

4.27　韓国太田市の聖世再活院の開院式に出席のため23名が訪問旅行をする。5/1まで。

7.　1　精機科発足、ホンダ関係のタコメーターの組み立てを始める。

10.　ハンディキャップ別府ガイド改定を版を発行。むぎの会会員約40名が、３ヵ月にわたって、別府市、大分市をはじめ、国東半島、湯布院間を走り回って取材。200ヵ所以上の公共機関、病院、飲食店、観光地などを調査し、181頁の立派なガイドブックができた。

サンストアをご覧になる
三笠宮妃殿下

11.　8　三笠宮妃殿下ご来訪。

12.16　昨年に引き続き別府市ロードレース大会車いす部門(３㎞)に３名参加。

これを最後に翌年は車いすの参加は廃止された。

昭和54年(1979)　4.　1　新作業員制度が発足。

太陽の家の授産施設で働く障害者のうち、直接企業に就職することが困難でも、太陽の家内の職場であれば雇用に該当する人々を太陽の家が直接雇用し、授産作業場でのリーダー役を担ってもらうことにした。こうした人々は本来福祉工場に雇用が可能な人々であるが、工場の拡張が困難であるため直接雇用に踏み切った。

昭和54年(1979)　4.10　第二木工作業所(サンアップ荒尾作業所)が閉鎖される。昭和46年８月から神棚を制作していた木工科サンアップは、かねてから粉塵、音響などの公害防止の対策を検討していたが、最終的に移転せざるを得ないとの結論に達し、この日、すべての作業を終了した。多いときには16人、終了時には12人の障害者が働いていた。

職能開発センターが完工

4.15　身体障害者職能開発センターが完工。

7. 3　初心者水泳教室を開始。

7.31　新しいデザインの電動車いすの試作品が完成。

8. 1　プラスチック科杵築作業所開設。

杵築市に所有する農地３万３千平方米(当時)の一角に、鉄骨平屋建て、面積８00㎡の作業棟を建設した。これは、次第に高齢化していく障害者の雇用確保を狙うもので、プラスチック射出成型作業の工場とした。

8. 4　国際児童年拠金チャリティーバザーをむぎの会が開催。拠金30万684円が集まる。

国際児童年チャリティーのための
むぎの会のポスター

9.21　コンピュータ・プログラマーの養成講座を開講。

三菱商事社会環境室の協力を得て、16名が受講を開始した。この講座のため、三菱商事からコンピューター式が寄贈され、三菱財団からは養成のための研究費として

700万円が助成された。

10.12　日本障害者職業リハビリテーション研究大会が太陽の家で開かれた。

13日にはハロルド・H・ウィルキー博士の「コミュニティと職業リハビリテーション」と題する記念講演があった。

ハロルド氏の講演

昭和55年(1980)　1. 5　旧扇寮周辺取り壊し開始。

年々増加の傾向にある重度脳性麻痺のためのリハビリ施設が必要になってきた。

3.26　「愛は地球を救う」の寄付金によってリフト付マイクロバスを贈られる。

5.14　韓国 李方子氏来訪。

5.16～18　身障スポーツ創立20周年記念大分県身体障害者競技大会

昭和55年(1980)

昭和36年に日本で始めての身体障害者のスポーツ大会が大分県で開催された。その当時は身障者スポーツに対する社会の理解はまだほとんど無く、世間から障害者を見世物にするのかといった非難が出た。しかし、そうした非難の声があるからこそこのスポーツ大会は必要だった。20年経ったこの頃はそうした声はまったくといっていいほど無くなっていた。

1981年9月に開催予定されている国際技能競技大会のプレ大会が太陽の家で開かれた。

太陽の家ではこれらの大会に参加した8か国49名の選手、役員を受け入れ事前研修を行った。

坂本九が出演の
ザ・よっちょいでコンサート

5.18 「ザ・よっちょいで」コンサートを開催。
永六輔、坂本九らの出演
大分県身障スポーツ創立20周年を祝い、競技大会を盛り上げるために企画され、多くのボランティアによって運営された。

6.21 情報処理科が発足。
サン・ストアに続く第三次産業への進出である。

6.24 新しいデザインの電動車いす「太陽」が初出荷される。

太陽の家生産の電動車いすを九州
各県でキャンペーンセールス

7. 9 大分銀行太陽の家支店が開店
車いすの行員も2名採用され、サンストアに続いて障害者のサービス業への進出となった。店内は障害者が利用しやすいようにさまざまな工夫がなされている。

9.28 車いすバスケットボール「火の国杯」で太陽の家チームが優勝。

11. 7 中国武漢市第二病院に車いす1台を贈る。

昭和56年(1981)

1. 「完全参加と平等」のテーマのもとに「国際障害者年」が始まる。

国際障害者年啓発パレード

1.17 大分市での国際障害年啓発パレードに太陽の家から32名が参加。

2. 1 応用訓練科が発足。

2.25 心電図解析センター開所式。
コンピュータによる心電図の解析作業サービスを行う業務を開始した。

3.21 コミュニティーセンター(841.61m²)を開設。

昭和55年(1980)

内海桂子、好江さんの漫才などでコミュニティセンターのオープンを飾った

地域社会との交流の場であり、地域の公民館的存在としてその機能を果たすことを目的に造られた。建設費には別府市からの補助金2,000万円をあてた。オープン行事は永六輔が司会、進行した「春の寄席」～内海桂子、好江の漫才など～を地域の人々とともに楽しんだ。

4. 1　重度身体障害者更生援護施設「ゆたか寮」が開所。

鉄筋コンクリート造　5階建

面　　積	1,758.43m²
総 工 費	267,250,000円
日自振補助	172,730,000円
自己負担	94,520,000円

ゆたか寮の訓練室

重度の障害者や、機能が衰えてきた人々などを対象に、機能の回復、強化を図ることを目的に設置した。

とりわけ近年増加している重度脳性麻痺者の処遇強化については昭和48年頃から取り組んでおり、その具体的な方策の一つとしてこの施設は存在している。

4/20から機能訓練を開始、5/12からスポーツ訓練も開始。

4.17　応用訓練科の発足

すぐに授産作業場での就労が困難な重度身体障害者のための職場適応訓練を主体とした。

4.19　“わたぼうしコンサート”の開催。

昭和56年(1981)

4.21　チャームアップ美容教室を開催。

障害を持つ女性も美しく装いましょうと、資生堂大分営業所の協力を得て開催、40名が参加した。

5.26　中村理事長が障害者福祉功労者として、厚生大臣表彰を受ける。

このデコボコ踏切もいまは改修されている

6.　むぎの会（会長 長田博行）は、別府市亀川新川にある日豊本線踏切がデコボコで車いすなどが通りにくいため大分鉄道管理局に改善のお願いをし、改修してもらった。

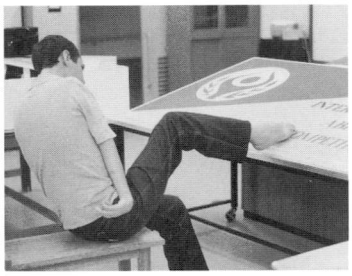
8. 3　工作科で八重州リハビリ株式会社の車いすを生産開始する。

8.27　国際障害者年にちなみ、別府市内小・中学校児童生徒の太陽の家見学会を開催、63名の児童に働く障害者の

姿を見学して貰った。

この時の感想文はひとつの冊子にまとめられた。

9. 1　制御機器科が発足、オムロン太陽電機の第2工場として、リレーの生産を行う。



国際アビリンピツクのためトレーニングする海外からの選手

9.16　国際アビリンピックに出場する外国選手の研修受入れ。10月に開かれる大会のため、東南アジア、アフリカ、中南米からの出場者、9ヵ国(ザンビア、ブラジル、コスタリカ、アルゼンチン、コロンビア、ネパール、ブータン、トンガ王国、フィージー)、32名が約1ヵ月間太陽の家で事前研修を行った。

9.25　ホンダ太陽株式会社が設立された。

本田技研工業株式会社をはじめとする関連会社の協力によるものである。

資本金 500万円。本田技研工業 51%、日本精機 10%、太陽の家 39%

代表取締役社長 畑田和男

計器類や電装部品を中心に生産活動を開始。

森南海子さんの進行によるファッションショー

9.26　森南海子デザイナーを招いて、洋裁教室、ファッションショーを開く、合わせて資生堂大分支店の協力で美容教室も開催。

9.29　改装なった第一作業棟での操業開始、落成式に200名が来訪。

建築面積	2441.07㎡
総工費	205,020,000円
日自振補助	68,090,000円
自己負担	136,930,000円

制御機器科をご覧になる三笠宮寛仁殿下

10. 1　三笠宮寛仁殿下ご来訪。

10. 1　重度身体障害者授産施設の定員変更、145名から175名に。

10.17　第1回国際アビリンピックが東京で開かれる。

61ヵ国、850名が参加、中村理事長は役員として活躍した。

10.30　第1回大分国際車いすマラソン大会前夜祭と、それにあわせて“われら人間コンサート”を杉ノ井ホテルで行う。

松島トモ子、ベデスダ弦楽四重奏の出演。

昭和56年(1981) 10.31　三笠宮妃殿下ご来訪
（全国レクリエーション大会のために）

11. 1　第１回大分国際車いすマラソン大会。（大分市）
14ヵ国、117名のランナーが走り、109名が完走した。距離は21.0975キロメートルのハーフコース。太陽の家から20名が参加、全員完走した。
これまで、ボストン・マラソンや、ハワイ・ホノルル・マラソンなどに車いすランナーがフリー参加したことはあるが、車いすランナーだけの大会は世界でも初めてのことであった。いまでは世界トップレベルのレースになっている。

第１回大分国際車いすマラソン大会のスタート

11. 3　太陽の家が大分合同新聞文化賞特別功労賞をうける。
中村理事長は大分県功労者表彰をうける。

12. 9　中村理事長が内閣総理大臣賞を受賞。
これを祝って、むぎの会他、協力企業の皆で辻畑隆子作のブロンズ像を記念品として贈った。

12.21　ブルネイの国際障害者年記念行事に、三菱商事株式会社ガス部の協力を得て、太陽の家の写真パネル、電動車いすを展示し、紹介映画を上映した。

昭和57年(1982)　1.　愛知県蒲郡市に太陽の家蒲郡誘致委員会が発足。

2.　アメリカの経済誌、ウォールストリート・ジャーナルで太陽の家のことが紹介される。

ウォールストリートジャーナル紙で紹介される

2.13　電機科ＴＩが日本ＴＩ日出工場から表彰を受ける。
電機科ＴＩ部門では36名の従業員が毎月400万個のIC外観検査を行なっており、その外観検査の重要性を良く理解し、安定した品質、納入などに多大の貢献をしたとして、日本テキサスインスツルメンツ日出工場から表彰を受けた。

5.24　明石会研修生受入れ。
愛知県蒲郡市に太陽の家を建設することが決まり、そのために事前研修の必要性があると考えられた。そこで入所希望者11名と事務職員１名が約２年間別府で勉強することになった。

愛知太陽の家開所に向けて研修する明石会研修生

6.29　リフト付バス１号車をフィージーに贈る。
東京パラリンピックの時、日本で初めて製造された

昭和57年(1982)　7台の福祉バスのうち1台を太陽の家が購入し、利用していたが、国際アビリンピックのため太陽の家で研修したフィージーの選手がフィージーにはリフトバスがないと訴えたため、このバスを寄贈することになった。輸送は定期航路を共同運搬している3つの船会社が無償で行なった。

フィージーに寄贈されたリフト付バス

7.19　韓国車いす楽団“ベデスダ弦楽四重奏団”の演奏会を開く。

この楽団のメンバーの内2名は、昭和49年に太陽の家で研修した人たちである。

10.30　第三回フェスピック香港大会に応援ツアーを企画。

大分空港からの全日空チャーター便で145名が3泊4日の旅をする。

昭和58年(1983)　2.13　林 義郎 厚生大臣来訪

7. 1　愛知太陽の家建設準備室を開設。

3名の職員が派遣された。

11. 5　第4回朝日九州車いすバスケットボール選手権大会で優勝。

11.21　三菱商事太陽株式会社設立協定書調印式

平松大分県知事の立ち会いの下に調印し、これによって、障害者の頭脳労働分野への職域拡大が図られることとなった。

仏壇の金箔貼りをした工芸科

12. 1　三菱商事太陽株式会社創業式

三菱商事、三菱事務機械などの関連企業から情報処理関連業務の委託を受け、システム設計やプログラミングなどを行う事となった。

資本金1,000万円(三菱商事67%、太陽の家33%)

会長：馬渕秀夫、取締役社長：中村　裕。

12.20　工芸科、金倉仏光堂との提携を終了する。

昭和59年(1984)　1.27　中村理事長が朝日社会福祉賞を受賞。

3.29　「24時間テレビ」チャリティー委員会から小型バスの寄贈受ける。

3.30　デンソー太陽株式会社が設立される。

愛知太陽の家の協力企業であり、かつ障害者の雇用の場でもある日本電装株式会社と太陽の家との共同出資会社。

昭和59年(1984)

資本金 1500万円、日本電装 51%、太陽の家 49%

取締役社長　本多勝美氏

愛知太陽の家
オープンのテープカット

4. 1　愛知太陽の家が開所する。

愛知太陽の家重度授産場(定員50名)、

愛知太陽の家福祉工場(定員100名)。

敷地面積	約11,000m²(蒲郡市からの貸与)
建築面積	3,281.7m²
延べ床面積	7,703.0m²
総工費	1,186,105,750円
愛知県補助	798,660,000円
蒲郡市補助	63,000,000円
自己負担	324,445,750円

(明石財団からの寄付など)

開所式は4月9日に催された。

4.　成人病予防検診を開始。

この年は40才以上を対象に85名が受検した。

4. 4　中国武漢市へ車いすスポーツの指導に機能訓練課の小林順一を派遣。

5日から9日まで武漢市で車いすの操作や、トレーニングの方法などについて指導を行った。訪中費用は大分合同福祉事業財団が負担した。

レスポの開会式

4.21　第1回国際障害者レジャー・レクリェーション・スポーツ大会が愛知県蒲郡市を中心にして開催される。

競技スポーツに参加することが困難な重度障害者もレクリェーション・スポーツに親しんでもらおうという趣旨である。また、この大会は蒲郡市市制30周年記念行事でもあった。

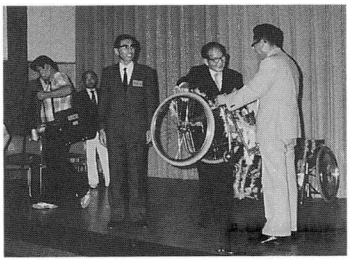
これを機に愛知県では毎年県内大会が開かれるようになった。国際大会の2回目は1986年にオランダで開催された。

22日には「障害を持つ人々も健常者と同様にレジャー・レクリェーション・スポーツ活動を必要としている」という「愛知宣言」を採択した。

5. 9　親善バスケットチーム韓国訪問。(5.15まで)

5.25　中国身障スポーツ視察団(団長・張自覚氏)が来訪。

昭和59年(1984)　中国では身体障害者福祉基金会という組織が作られ、障害者に対する福祉活動が本格化し、身障者スポーツについても団体組織が組まれ活動を開始した。
5/26～27日に開かれた大分県身体障害者体育大会を視察した。


中国に車いすを贈る

5.25　中国身障スポーツ視察団にスポーツタイプの車いす66台を寄贈。
中国の33省に2台ずつ配布してもらい、スポーツ振興に役立ててもらおうということである。

6.28　立石一真氏の胸像除幕式を行う。

7.14　大分県福祉技術開発研究委員会が開かれた。
障害者に自立と職域拡大を図るための技術の研究・開発を勧めようという会である。
出席委員は、東正氏、片岡正喜氏、後藤光義氏、長谷川健介氏、西田不二夫氏、松井健氏、宮部喜代二氏、丸山一郎氏などに平松守彦大分県知事と、中村裕理事長などが加わっていた。

7.23　太陽の家創設者であり、日本に於ける身障者スポーツの育ての親でもある中村裕理事長が逝去された。

7.26　畑田和男常務理事が理事長に就任。

7.28　故中村裕理事長の告別式。
中村家、大分中村病院、太陽の家の合同葬とし、井深大会長が葬儀委員長を勤めた。式には皇太子殿下、妃殿下からのおことばと供花がそえられ、約3,000名が参列。最後のお別れを行なった。

中曽根首相のご視察

9.15　転倒問題専門委員会を設置。

10. 3　中曽根康弘総理大臣がご来訪

11.10　増岡博之厚生大臣来訪

12.　中村裕先生を偲ぶ追悼集を作成。

昭和60年(1985)　3. 1　工芸科ホンダが作業開始。

3. 6　京都オムロン太陽株式会社が設立される。
資本金 1500万円、オムロン 61%、太陽の家 39%
代表取締役社長 山本忠明
1990. 1. 1　オムロン京都太陽株式会社と社名変更。

4.15　京都太陽の家研修生を受け入れる。

昭和60年(1985)　4.21　太陽の家創立20周年記念ソフトボール大会を行う。

5. 3　太陽の家創立20周年記念バスケットボール大会を行う。

8.19　京都太陽の家建設準備室が開設される。

8.31　太陽の家創立20周年記念レクリェーションキャンプ大会を催す。

住吉浜リゾートパークに一泊し、焼き肉パーティーや、庄野真代コンサート、ジャンボ大会などのゲームを楽しんだ。愛知太陽の家からもむぎの会の代表が参加した。

昭和60年(1985)　9.15　京都車いす自立の旅一行92名が来所。次の年の京都太陽の家オープンに伴い、太陽の家を理解するための京都市民の旅であった。

愛知太陽の家
コミュニティセンター

9.30　愛知太陽の家コミュニティセンター内に、蒲郡信用金庫太陽の家支店が開店する。

10.　愛知太陽の家コミュニティセンターが落成。記念行事としてバスケットボール大会を開催した。

10. 5　太陽の家創立20周年記念式典を実施。

来訪者110名

中村裕先生の銅像を建立、除幕式を行う。

10. 5　創立20周年を記念して、メッセージを込めたタイムカプセルを埋設。2015年に開封される。

11.28　永六輔一行による演芸会を催す。

昭和61年(1986)　1.21　授産科目の名称を作業内容に見合ったものに変更する。

電機科T・I → 電子科

工芸科 → 機材科

電機科OM → 電機科

3.21　車いすバスケットボールチームが沖縄へバスケットボールの指導にいく。

京都太陽の家
オープンのテープカット

4. 1　京都太陽の家が開所。

京都太陽の家重度授産場、定員50名

京都太陽の家福祉工場、定員100名

建築延べ面積	7,708.39㎡
総　工　費	1,313,900,000円
京都市補助	800,105,000円
京都府補助	433,795,000円
自己負担	80,000,000円

開所式は5月13日に催された。

昭和61年(1986)　4.　この頃からツインバスケットの指導を開始する。

5. 6　書籍「すすめ太陽をあびて」を大分県内の全小中学校に贈る。

「障害者の社会参加に力をつくした医師・中村裕」と言うサブタイトルをつけた、小学中級向けの本がPHP研究所から出版された。障害者問題を小中学生に理解してもらうとのねらいである。

5.28　スイス・ゼンバッハ湖一周車いすマラソン大会に藤原修が参加、吉永栄治が団長として同行する。

ヘッド・ドルプを見学するレスポ参加者たち

8.31　第4回フェスピック・インドネシア大会応援ツアー

9.12　第2回国際障害者レジャー・レクリェーション・スポーツ大会がオランダのアルンヘムで開催され、太陽の家から15名参加。

「発展途上国におけるスポーツによるリハビリテーション」と題して畑田理事長が意見発表した。

10.23　サン・コミュニティ・大神建設用地、21,704㎡の買収が完了。買収費用は77,015,449円。

11. 1　故 中村裕先生メモリアルセミナーが開かれる。

12. 6　ツインバスケットも盛んになり始め、太陽の家からも名古屋で開かれた第1回日本車いすツインバスケットボール大会に参加した。

12.23　サン・コミュニティ・大神建設工事入札説明会を開く。

昭和62年(1987)　4.16　財団法人 中村裕記念身体障害者福祉財団が設立される。

7. 1　サン・コミュニティ・大神建設準備室が開設される。

10.16　精神衛生対応力の強化対策として、精神衛生講座を実施、合わせて5回開催した。

10.20　京都勤労身体障害者文化教養体育施設「サン・アビリティーズ京都」が完成、落成式を行う。

太陽の家が運営を委託される。

11. 5　サンストア開店10周年記念セールを8日まで行う。

昭和63年(1988)　3.13　愛知太陽の家作業棟の増築完工。

増築面積は1,645.17㎡

4. 1　身体障害者療護施設“ゆうわ”が開所。

定　　員：50名

建　設　費：442,335,000円

延べ床面積：2,340㎡

昭和63年(1988)　6．1　身体障害者福祉ホームがオープン。

建　設　費：177,460,000円

延べ床面積：1,470㎡

戸　　数　単身者用：24戸、24名

世 帯 用：3戸、6名

生活施設「ゆうわ」の居室

7．1　ソニー・太陽株式会社日出工場が完工。

延べ床面積：1,600㎡。

7．2　サン・コミュニティ・大神開所式を行う。

参 列 者：300名

敷 地 面 積：　39,170㎡

総 事 業 費：903,583,787円

大分県補助金：343,442,647円

サン・コミュニティ・大神
オープンのテープカット

大分県が日出町大神地区を福祉の町に指定したのを受け、その一環として建設したもので、日出町土地開発公社に用地の確保を依頼、太陽の家としてはじめて建設プロジェクトチームを結成、実施した。

この頃、マークのデザインを変更。類似のマークをもつ福祉施設が出来た為、シンプル化した。

最初のシンボルマーク
（デザインは大蔵善雄氏）

10.14　ソウル・パラリンピック応援旅行、3泊4日。

大分国際空港から大韓航空のチャーター便で176名参加。

10.15　九重レクリェーションを行う。(別府本部)

近年の重度化と伴に、長期休暇にもかかわらず帰省先のない人達が増え、そうした人達に対する余暇活用の対策も必要となってきた。この日、車いす使用者14名を含む88名が事務局の介助員20名と共にゲームなどを楽しんだ。

九重でのレクリエーション

10.20　太陽の家が大分県知事表彰をうける。

10.27　「中村裕伝」が発刊され、それを記念して、水上勉先生の講演会を開く。

12.15　京都太陽の家に全国福祉保育労働組合京都地方本部太陽の家分会が結成された。

平成元年(1989)　4.17　愛知太陽の家創立5周年記念式典を行う。

この5周年式典に先立ち、国際障害者レジャー・レクリェーション・スポーツ大会の提唱者である故中村裕博士の顕彰碑が建立された。

平成元年(1989)

昭和46年10月に太陽の家を訪れた時の李方子女史

4.30　太陽の家と深く交流していた韓国の障害児の療育施設「明暉園」の理事長をされていた李方子さんが亡くなられた。

生前は明暉園の子供達と研修に訪れたり、来日の際には太陽の家に立ち寄られ、情報交換等をされていた。

6.19　シルバーハウジングの起工式。

モデルハウスであったテトラエースを解体し、高齢者も対象にした新しい住宅を考えることにした。これは国のシルバーサイエンス計画に基づくものでもある。

総事業費：51,185,000円(研究費を含む)

敷地面積：480m²

延床面積：188.99m²（1F101,90m²　2F87,09m²）

7.　ゆたか寮の寮母さんたちが日頃の介護業務をきめ細かくまとめた手引書を作成した。B5版、24頁。

平松県知事を迎えてのてい談風景

7.14　大分市コンパルホールで中村裕先生を偲ぶ会が開かれ、平松守彦大分県知事、岩田学園理事長 岩田英二氏、井深大会長によるてい談が、秋山ちえ子氏の司会で催された。タイトルは「大分県もうひとつの教育」

7.15　ゆうわでピアノ演奏会を開く。

福岡の医師からピアノの寄贈を受け、その披露の演奏会である。

宗氏も伴走して聖火リレー

9. 8　フェスピック聖火の採火式。

第5回フェスピック神戸大会の開催に先立ち、その大会の発祥の地である太陽の家で採火を行い、フェリーで神戸に運んだ。

中村先生の銅像の前で美根大分県福祉生活部長と畑田理事長が採火、その後車いすランナーと、伴走の応援に駆け付けてくれた旭化成の宗 茂氏が、別府国際観光港まで聖火リレーを行った。

愛知太陽の家オープンであいさつする明石六郎氏

9.14　第5回フェスピック神戸大会応援旅行(50名)～16日まで。

10.27　愛知太陽の家創設の親、明石六郎氏が亡くなられた。

氏は昭和56年に私財10億円を投じて財団法人明石会を設立し、昭和57年1月12日を初めとして度々別府市の太陽の家を訪れ、愛知太陽の家の誘致に尽力され、昭

平成元年(1989)

モデルハウス「年輪」

和58年１月から太陽の家理事に就任、昭和62年には特別養護老人ホーム「蒲郡眺海園」を設立するなど障害者の福祉に情熱を傾けてこられました。

11．2　常陸宮御夫妻がサン・コミュニティ・大神にご来訪。
シルバーハウス「年輪」の竣工式。

11．5　第９回大分国際車いすマラソン大会。
矢田成昭選手(三菱商事太陽社員)が県内１位となる。

平成２年(1990)

4．2　別府本部本館２階、５階、６階の大規模修繕工事が完了。

5．6　三菱商事株式会社から総額１億１千万円のコンピュータのハードとソフトの寄贈を受け、３か年計画で事務局のＯＡ化を推進した。

聖再園との姉妹結縁に参加した人たち

5.17　韓国聖世再活院との姉妹施設締結を行う。
畑田理事長以下16名が韓国を訪れ、ミニバスケット・チームが公開競技を行うなど親善交流を深めると共に、さらなる協力を約束して姉妹施設となる。
また、ミニバスケット・チームにとってはこの旅行が初めての海外遠征であった。

6．　太陽の家で第九を歌う会ディノインが練習を開始。
平成７年10月の太陽の家30周年に発表することを目標にした。

7．7　われら人間コンサートの開催。
創立25周年を記念して、このコンサートを誘致、大分市コンパルホールに600名の聴衆を集めた。
ネパールから３名、中華人民共和国から３名、日本から１名が出演し、永六輔さんが司会進行した。また、別府整肢園の19名によるハンドベルの賛助演奏も行われた。前日の６日には太陽の家でも演奏会を開いた。

25周年を記念しての
われら人間コンサート

7.10　サン・コミュニティ・大神の「ゆうわ」でディサービスを開始する。

8．8　機能強化研修棟の起工式。
これまでの体育館、憩いの家を解体し、二つを合わせた新しいものに作り替えることとなった。

9.24　韓国・聖世再活院の業務支援のため、伊方事業部長と溝口事業部主任が30日まで韓国を訪れた。

平成２年(1990) 10. 5　創立25周年記念むぎの会大運動会。

ゆうわの生活風景をご覧になる
秋篠宮ご夫妻

10.24　新食堂棟、作業棟の起工式。
環境改善を図り、快適な生活空間を目指して、作業場と住居が一体となっていた本館を職住分離させることとした。

10.27　秋篠宮御夫妻、サン・コミュニティ・大神にご来訪。
第10回マラソン大会のため来県し、この日ゆうわ、ソニー日出工場、年輪をご視察された。

平成３年(1991)　1.12　オムロン株式会社相談役の立石一真氏が逝去された。
昭和46年の福祉工場開設以来、共同出資会社の設立や重度障害者の就労機会の拡大、京都太陽の家創設などに計り知れないご尽力をいただいた。

福祉工場オープン祝賀会での
立石一真氏（右）

3.15　創立25周年記念パネルディスカッションを行う。
これからの太陽の家の在り方を求めて、協力企業の方々からサジェッションをいただきながら意見を出し合った。畑田理事長の記念講演の後、二部に分けてディスカッションを行った。パネラーは次のとおり。

協力企業の方々をお招きして
様々の提案をいただいた
パネルディスカッション

第１セッション　「太陽の家の足跡」

広部　和夫（オムロン太陽株式会社顧問）
河村　　崇（田島製作所取締役製造本部長）
杉本　邦弘（有限会社電子印刷センター社長）
吉永　栄治（社会福祉法人太陽の家京都事業本部長）
（座長）
伊方　博義（社会福祉法人太陽の家事業部長）

第２セッション　「夢と現実に向けて」

竹内　佑一（オムロン株式会社秘書室室長）
安留　幹雄（ソニー株式会社渉外業務部長）
岩井　　進（本田技研工業熊本製作所管理事務室長）
沢田　富雄（三菱商事株式会社人事部次長）
横田　繁夫（社会福祉法人太陽の家事務局長）
衛藤　秀信（オムロン太陽株式会社工場長）
（座長）
吉松　時義（京都オムロン太陽株式会社取締役統轄管理部長）

（敬称略）

このパネルディスカッションの記録は小冊子にまとめられ、参考資料にさせていただいている。

平成３年(1991)　4.13　憩いの家(宿泊施設)オープン。

4.16　グッドウィル・インダストリー社長ジョージ・W・ケッセンジャー氏他３名来所(愛知)。
4/22には別府本部を見学。

4.17　ソニー・太陽株式会社カーオーディオ用アダプター百万個達成記念式典。

4.19　京都太陽の家創立５周年記念式典
秋山ちえ子氏の講演と、新星78による演奏会を催した。

5. 1　福祉ホーム大神ハイツの増築工事が完了。
居住定員は30名から60名になった。建築費は全額ソニー株式会社からの寄付によった。

5.22～27　韓国で開かれた第３回ソウル国際リハビリテーション機器展に展示参加し、太陽の家の活動を紹介した。

6. 3　香港車いすバスケットボールチーム一行歓迎レセプション。

6. 7　養護学校情報交換会(愛知)。

6. 8　寮親睦レクリェーション(おじか)。

7. 1　身体障害者通所授産施設の開設(別府)。従来の身障・重度の授産場に併設されていたものを独立させ50名定員とした。

7. 1　ソニー・太陽株式会社日出工場増設。

7. 6　新作業棟・食堂棟竣工。

7.13　職員研修として京都太陽の家では近隣の清掃を行ない、ゴミ、あきかんなどの回収を行なった。

7.21　新食堂オープン。
別府本部での温食サービスの実施。

8. 2　日出町小・中学校福祉体験教室受入れ(ゆうわ)。
以後、毎年実施されている。

8. 3　京都太陽の家・サマーフェスティバル。

8. 4　福祉ホーム、ソニー・太陽株式会社日出工場竣工式

8. 5　本田技研工業株式会社最高顧問であり、太陽の家の顧問をしていただいた本田宗一郎氏が逝去された。

8. 7～16　第３回アビリンピック香港大会の一環として行われたリハビリテーションのための技術、機器展に特別参加し、太陽の家の活動を紹介した。

8.28　オムロン株式会社から京都太陽の家創設５周年を祝って、サンルーム“ひまわり”の寄贈を受ける。

ソウルでの展示会風景

ホンダ太陽設立に訪れた時の
本田宗一郎氏

アビリンピック香港大会での展示会の模様

京都太陽の家に憩いの場所
サンルーム「ひまわり」がオープン

平成３年(1991)

地域の人々と楽しんだコンサート

地域社会へお礼の清掃奉仕

京都太陽の家のピアノ開きに参加してくれた花園幼稚園児たち

9．1　身体障害者通所授産施設へのＭＲ(精神発達遅滞者)の混合利用が今年度から認められ、太陽の家でも９月から受入れを開始した。

9．6　韓国聖再園交歓会、歓迎レセプション

9．7　創立25周年記念式典を行う。
ソニー吹奏楽団によるコンサートを開き、地域の方々にも楽しんでもらった。

10．1　故明石六郎理事献花式(愛知)。

10．5　むぎの会が亀川地区の公園や駅などの清掃奉仕活動を行い、日頃お世話になっている地域社会に感謝の意を表した。

10.15　別府太陽の家のむぎの会主催運動会が亀川小学校のグラウンドを借りて行われた。

11.11　ホンダ太陽株式会社創立10周年記念式典。

11.12　ソニー株式会社から愛知と、京都にピアノの寄贈を受ける。

12.14　京都で花園幼稚園児他も参加してピアノ開きコンサートを行う。

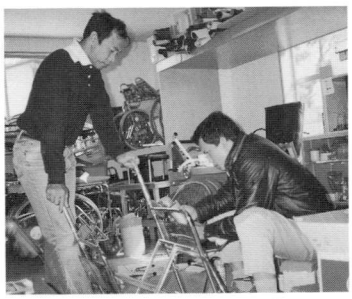
12.19　愛知太陽の家でもピアノ開きコンサートを行う。

11.14～17　ナイスハートバザールに太陽の家も出品(大分トキハ会館)。

12.18～19　治具研究交流会

12.25　サン・コミ大神・ゲートボール場使い始め試合。
広い芝の広場を地域のゲートボールクラブの試合会場などとして利用できるように開放することになり、初めての試合が行われた。

平成４年(1992)



カンボジアからの研修生

1.27　愛知太陽の家にピアノ同好会発足。

2.17～ 3.30　カンボジアからの車いす修理研修生受入れ。

3.17　愛知太陽の家“春のおとずれ”コンサート。

3.18　瓜生山学園(京都芸術短期大学)より絵画の寄贈をうける(京都)。
美術学科の学生が工場を見学し、太陽の家の為に絵画８点を製作し、その寄贈を受ける。

4．1　この年、永年の課題であった重度障害者の就労に対して、福祉就労対策室を設置して、調査、研究を開始した。

平成４年(1992)　4. 1　太陽の家の組織を別府、愛知、京都の三事業本部に変更し、新たに管理部を儲ける。また、国際課も設置。

この30年間の海外からの見学、研修者は3,000人以上を数えている事からも分かるように、太陽の家では設立当初から国際交流には力を入れてきた。リハビリテーションに関するさまざまな情報交換を行っているだけでなく、近年は、フェスピックの事務局や、大分国際車いすマラソン大会の国際部を担当することを通じて、研修生の受け入れ、障害者スポーツの振興普及などを中心に活動を行っている。

また、前述のスポーツ大会の業務だけでなく、大分県身体障害者体育大会第20回大会、国際アビリンピック、国際レジャーレクリェーション大会、全国身体障害者スポーツ大会滋賀県大会、ソウル・パラリンピックなど、他団体からの依頼を受けて、海外選手の招請、勧誘の業務支援なども行ってきた。

ヨットセーリングに挑む
愛知太陽の家

大分県では障害者のためのカヌー
大会も開かれるようになった

4. 6　富士通カストマエンジニアリング株式会社の協力によるＦＪ機器科発足式。

4. 8　オムロン太陽株式会社創立20周年記念式典。

4.20　二紀会同人・日比野文英氏の油絵「鳥の詩」(100号)の寄贈を受ける（愛知太陽の家）。
前岡崎養護学校先生・日比野恭子さんから。

5.29　日本車いすスポーツ研究会第１回会議(横田局長出席)。

6. 6～ 7　愛知・京都太陽の家親善試合。
（卓球、バドミントン）。
愛知太陽の家フォトクラブ撮影旅行（横浜、鎌倉）。

6.23　ドイツＦＡ業界誌「Frectronik」の取材。
（京都太陽の家）

7.17　ホンダＲ＆Ｄ太陽株式会社創立。
資本金 3,000万円、本田技研研究所 60%、
本田技研工業 25%、太陽の家 15%
代表取締役社長　畑田和男

7.29　韓国、崔氏(イマニエュル電子社長)一行との交流会。

7.30　韓国、崔氏一行とのバスケットボール交流試合。

8. 1　亀川夏祭りにむぎの会出店。

平成４年(1992)　8．8　蒲郡眺海園の納涼大会にボランティア参加。

9．5～6　愛知太陽の家フォトクラブ写真展(博物館)。

9．7　第１回障害者の雇用促進のための施設改善コンテストでデンソー太陽株式会社が最優秀表彰をうける(千葉県で表彰)。

10．1　三菱商事株式会社から簡易組み立てトイレを贈呈さる。1991年から社員50名が大分国際車いすマラソン大会にボランティア参加していたが、スタート前のトイレが不足しているのを痛感し、レクリェーション用としても使える野外用トイレを太陽の家に寄贈していただいた。

県外遠征も楽しみな
ミニバスケットボール

10．4　むぎの会奉仕活動。

10.11　兵庫県で開かれた第５回のじぎく杯争奪車いすツインバスケットボール大会で太陽の家ミニバスケットボールクラブが優勝した。

10.16　オムロン太陽株式会社創立20周年記念旅行(沖縄)。

10.25　３事業本部むぎの会交流会(京都太陽の家で)。

10.28　中国武漢市車いすマラソン選手歓迎会。

11.13～15　第２回日本車いすスポーツ研究集会。

12.15　大分市立鶴崎中学校生徒会一同からトレーニング器具一式が寄贈された。

平成４年からむぎの会主催大運動会に生徒有志が毎年ボランティア参加し、交流を続けている。

平成５年(1993)　1.14　ソニー・太陽株式会社15周年記念式典。

1.19　通信衛星技術者セミナー(三菱商事太陽株式会社)。

1.30　本館４階宿舎改造工事完了。

別府事業本部では環境改善事業を進めているが、本館の作業場を昨年新作業棟に移転したのに引き続き、その跡を宿舎に改造した。

タイからの研修生

2.22～ 3.23　タイ車いす修理研修生受入れ(別府)。

2.28　公共下水道切替工事完了。

3．4　韓国ソウル放送による京都事業本部の取材。

3.19　タイ研修生送別会(別府)。

3.23　オムロン株式会社から休憩室備品一式目録を贈呈さる。3/25にサン・クラブ(別府・休憩室)のテープカット、オープニングセレモニーを行う。

平成５年(1993)　3.28　サン・コミでふれあいコンサート、グループＵＮＯによる演奏会。

杵築分場の作業風景

5. 1　身体障害者通所授産施設分場杵築工場開設。
定員10名の通所施設の分場で、プラスチック製品の加工作業を６月３日から始めた。

5. 8　「秋山ちえ子の談話室」１万回感謝のつどい(コミセンホール)。

6. 3　京都むぎの会長崎旅行。

7. 7　杵築市、速見郡やさしいまちづくり推進協議会まちかど点検に参加。

7. 9　「フェスピック大会への参加を支援する会」発起人会及び設立総会。基金は目標の２千万円を越え、フェスピック北京大会組織委員会に２千万円を寄付した。
　また、この会の要請に応じて日本船舶振興会は、スポーツ用車いす120台を同委員会に寄贈した。

フェスピック大会を支援するための会議

8.22　12時間マラソンスポーツ。

8.25　給与・工賃支給日を、毎月28日から25日に変更した。
ローンや、銀行引き落とし支払い日が一般に27日であることが多いため、それに対応できるようにした。

10. 1　常陸宮殿下・同妃殿下、京都太陽の家ご来訪。

10. 2　むぎの会奉仕活動(別府)。
太陽の家周辺、亀川駅の清掃活動。

10. 4　愛知事業本部ではエイズについての健康教育を行った。

10. 6～10　むぎの会交流会(愛知太陽の家で)。

10. 7　姉妹施設「聖再園」訪問し、交流会を行った。

11. 1～２.28　マレーシア研修生受入れ。

京都太陽の家を訪れた
常陸宮ご夫妻

11.30　本館３階宿舎改造工事完了し、鶴見寮居住者が本館に移動した。

平成６年(1994)　2. 4　三菱商事太陽株式会社10周年記念式典(別府湾ロイヤルホテル)。

2.19　マレーシア研修生送別会。

6. 4　別府むぎの会が福岡ドーム見学旅行を実施

6.17　講談社から「太陽の家の仲間たちよ」と題する少年マガジン別冊が刊行された。

平成６年(1994)　8．1　別府太陽の家の前をリフト付路線バスが通ることになり、太陽の家前というバス停も設置された。１日６往復(平成７年６月現在)のリフトバスが運行されている。

8．4　皇太子殿下サン・コミュニティ・大神行啓

8．7～ 9　愛知むぎの会が別府本部見学ツアーを催した。

9．3～ 7　第６回北京フェスピック大会(9.3～9.7)応援ツアーを実施。参加者76名

9．6　北京市において開催されたフェスピック連盟総会で畑田理事長がフェスピック連盟会長に指名された。

12．9　京都建都1200年を記念して催された「1200人の第九」に22名が参加し、日頃の練習の成果を発表するとともに、交流を図った。

平成７年(1995)　4．3　京都太陽の家にＡＴＭ（自動現金預金、支払い機が設置された。

4.13　愛知太陽の家創立10周年記念式典を行った。

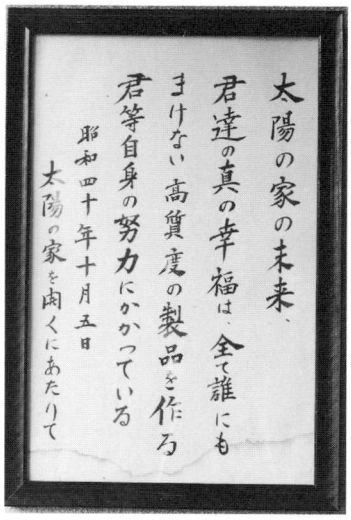
6．7　ホンダ太陽株式会社、ホンダアールアンドデー太陽株式会社日出工場竣工式。

三笠宮ご夫妻ご臨席のもと、式典が挙行された。

敷地面積	43,400m²	
建築面積	5,780m²	
総事業費	1,130,000千円	
従 業 員	ホンダ太陽	87名
	ホンダＲ＆Ｄ	24名

平成７年(1995)　6.30　オムロン太陽株式会社が国際標準化機構ISO 9001を取得した。この認定は、太陽の家福祉工場、制御機器科も拡大認証された。

オムロン太陽をはじめ各工場は、だれもが品質管理しやすい体制づくりをめざしている。



開所当時作業場に掲げられていた額

7. 2　別府、愛知、京都それぞれのむぎの会で阪神大震災（１月17日）の募金活動を行った。

別府	472,566円
愛知	207,781円
京都	176,000円

7. 3　富士通カストマ太陽株式会社が設立された。

資本金	2000万円
代表取締役会長	桑　原　　晟
代表取締役社長	畑　田　和　男

7. 8　愛知太陽の家に高円宮ご夫妻ご来訪

8.21　富士通カストマ太陽株式会社創業式典

愛知太陽の家を訪れた
高円宮ご夫妻

10. 8　創立30周年記念式典を別府市内のビーコンプラザで催す。

記念行事として、大分フィルハーモニアオーケストラの演奏する交響曲第九番第四楽章に合わせて太陽の家ディノイン合唱団と、全日本、日豊、大分と、京都の各「第九を歌う会」の有志らが合唱する音楽会を開催。また、ゆうわ入居者と琴藤智会との合同による大正琴の演奏も披露。

組織・運営の概要

定款目的の変遷

変更認可日	第１条　目的の条文	変更の理由及び内容
昭和41年２月14日 （設立認可日）	この社会福祉法人は、身体障害者であって著しく機能の低下をきたし社会復帰の困難な者で、援護、育成又は更生の措置を要する者に対し、その独立心をそこなうことなく、職業的能力を充実し、正常有能な社会人として生活することができるように援護することを目的として、次の社会福祉事業を行う。	
昭和63年３月９日	この社会福祉法人は、障害者がその有する能力を活用することにより、進んで社会、経済、文化活動に参加することに対し、総合的にリハビリテーションの機会を提供し、健全な社会人として生活することができるように援助することを目的として、次の社会福祉事業を行う。	サン・コミュニティ・大神を建設し、事業の拡大を図るとともに、自立生活者や近隣居住者のためのディケアサービスが求められるなど、総合的リハビリテーションの中で事業を進めねばならなくなった。
平成５年９月17日	この社会福祉法人（以下「法人」という。）は、福祉サービスを必要とする障害者が、心身ともに健やかに育成され、その有する能力を活用することにより、進んで社会、経済、文化活動に参加することに対し、その環境、年齢及び心身の状況に応じ支援を行なうとともに総合的リハビテーションの機会を提供し、さらに地域において必要な福祉サービスを提供されるように援助することを目的として、次の社会福祉事業を行なう。	厚生省の定める定款準則を参考にしての改訂 また、第二種社会福祉事業として「身体障害デイサービス事業」「身体障害者短期入所事業」を加えるとともに、「諸外国の障害者、団体との体育及び福祉に関する情報交換」を明文化し、大分国際車いすマラソン大会やフェスピックなどの支援活動も明文化することができた。

施　設　一　覧

（創立　昭和40年10月 5 日）

平成７年４月１日現在

法　　人	
設立認可申請書	昭和40年11月 1日
認　　可　　日	昭和41年 2月14日 （厚生省社 第25号）
法 人 登 録 日	昭和41年 3月 8日

別府事業本部	大分県別府市大字内竈1393番地
〃（日出事務所）	大分県速見郡日出町大字大神字寒水1402-6
愛知事業本部	愛知県蒲郡市形原28番１
京都事業本部	京都市南区上鳥羽塔ノ森上河原37番２

	施設名	施設種類	指定申請日	指定認可日	事業開始日	当初定員	定員変更経過	現定員
別府事業本部	太陽の家 授産場	身体障害者 授産施設	昭和 41年3月5日	昭和 41年4月1日 （厚生省社 第210号）	昭和 41年4月1日	34名	昭和41年12月 1日付　34名→124名 昭和44年 9月25日付 124名→154名 昭和47年10月 1日付 154名→130名 昭和54年 4月 1日付 130名→110名 昭和57年 4月 1日付 通所−25名 平成 3年 7月 2日付 通所 25名→０名	110名
	太陽の家 重度授産場	重度 身体障害者 授産施設	昭和 46年4月27日	昭和 46年6月1日 （厚生省社 第430号）	昭和 46年6月1日	83名	昭和47年10月 1日付　83名→110名 昭和54年 4月 1日付 110名→145名 昭和56年10月 1日付 145名→175名 昭和57年 4月 1日付 通所−15名 平成 3年 7月 1日付 通所 15名→０名	175名
	太陽の家 通所授産場	身体障害者 通所 授産施設	設置届 平成 3年6月24日	なし	平成 3年7月1日	50名	平成５年５月１日付 通所授産施設分場開設（定員10名）	50名 10名
	ゆたか寮	重度 身体障害者 更生 援護施設	昭和 56年2月16日	昭和 56年4月1日 （厚生省社 第721号）	昭和 56年4月1日	50名		50名
	太陽の家 福祉工場	身体障害者 福祉工場	なし	なし	昭和 47年4月1日	50名		50名
	ゆうわ	身体障害者 療護施設	設置届 昭和 63年3月28日	なし	昭和 63年4月1日	50名		50名
	大神ハイツ A・B・C	身体障害者 福祉ホーム	設置届 昭和 63年5月27日	なし	昭和 63年6月1日	30名	大神ハイツC 平成 3年 6月 1日付10→24 大神ハイツA 平成 3年 6月 1日付10→20 大神ハイツB 平成 3年 6月 1日付10→16	60名
愛知事業本部	愛知 太陽の家 蒲郡授産場	重度 身体障害者 授産施設	昭和 59年3月7日	昭和 59年4月1日 （厚生省社 第581号）	昭和 59年4月1日	50名		50名
	愛知 太陽の家 蒲郡 福祉工場	身体障害者 福祉工場	昭和 59年3月7日	なし	昭和 59年4月1日	100名		100名
京都事業本部	京都 太陽の家 授産場	重度 身体障害者 授産施設	設置届 昭和 61年3月6日	なし	昭和 61年4月1日	50名		50名
	京都 太陽の家 福祉工場	身体障害者 福祉工場	設置届 昭和 61年3月6日	なし	昭和 61年4月1日	100名		100名

現　在　の　役　員

（　）内は就任年月日　平成７年７月１日現在

会　長	井深　大	（昭和48年７月５日）
顧　問	水上　勉	（昭和61年３月９日）
	吉村益次	（昭和61年３月９日）
理事長	畑田和男	（昭和43年３月８日理事 昭和44年７月４日常務理事 昭和59年７月26日理事長）
理　事	後藤孔明	（昭和46.4.1～48.4.19日 再任 昭和59年３月９日）
	吉松時義	（昭和56年２月１日）
	福島親比古	（昭和59年３月９日）
	中村廣子	（昭和59年７月26日）
	清水芳信	（昭和61年３月９日）
	三島直介	（昭和61年11月22日）
	水藤　勇	（平成元年３月３日）
	日下照雄	（平成２年３月９日）
	向井一正	（平成２年３月９日）
	横田繁夫	（平成２年９月１日）
	小島克輝	（平成６年３月９日）
	林　栄一	（平成６年３月９日）
監　事	秦野晃郎	（昭和57年３月９日）
	陣　征一郎	（平成６年３月９日）

評議員	秋山ちえ子	（昭和41年３月８日）
	畑田和男	（昭和41年３月８日）
	河野昭五	（昭和47年３月８日）
	荒金　進	（昭和51年３月９日）
	井口竹彦	（昭和51年３月９日）
	中村信博	（昭和51年３月９日）
	染川　通	（昭和52年３月18日）
	宮野茂博	（昭和52年３月18日）
	安部ツヤ子	（昭和55年３月９日）
	佐伯秋介	（昭和55年３月９日）
	山下　猛	（昭和56年２月１日）
	長田博行	（昭和56年２月１日）
	佐竹孝之	（昭和61年３月９日）
	江藤秀信	（昭和62年５月25日）
	飯倉大八郎	（平成２年３月９日）
	中村太郎	（平成２年３月９日）
	上野　茂	（平成２年３月９日）
	杉本邦弘	（平成２年３月９日）
	横田繁夫	（平成２年３月９日）
	明石衛幸	（平成２年３月９日）
	河野利之	（平成４年３月９日）
	下谷脩子	（平成４年３月９日）
	伊方博義	（平成４年４月１日）
	横繁隆夫	（平成５年11月１日）
	大坪　茂	（平成５年11月１日）
	竹友哲夫	（平成６年４月１日）
事務局長	横田繁夫	（平成２年４月１日）

歴代役員

顧問	高安慎一	(昭和43年3月8日～昭和48年3月24日)
	松田亘次	(昭和43年10月15日～昭和45年11月16日)
	早川徳次	(昭和42年5月18日～昭和55年6月24日)
	本田宗一郎	(昭和53年10月16日～平成3年8月5日)
	立木勝	(昭和54年6月1日～昭和62年4月13日)
技術顧問	森政弘	(昭和49年3月8日～昭和63年5月22日)
理事長	高安慎一	(昭和41年3月8日～昭和43年3月7日)
	中村裕	(昭和41年3月8日常務理事 昭和43年3月8日～昭和59年7月23日)
理事	水上勉	(昭和41年3月8日～昭和61年3月8日)
	黒木利克	(昭和41年3月8日～昭和47年3月7日)
	伊勢久信	(昭和41年3月8日～昭和43年10月1日)
	山本清人	(昭和41年3月8日～昭和59年3月8日)
	羽田野次郎	(昭和41年3月8日～昭和42年8月31日)
	工藤秀明	(昭和41年3月8日～昭和41年5月　日)
	菅誠義	(昭和41年9月12日～昭和43年3月7日)
	日高市蔵	(昭和42年1月12日～昭和56年9月4日)
	菊池次郎	(昭和42年1月12日～平成6年1月6日)
	松平平逸	(昭和42年11月15日～昭和55年6月1日)
	椎原ムツ子	(昭和42年11月15日～昭和44年7月　日)
	廣瀬重信	(昭和43年10月1日～昭和46年3月31日)
	森政弘	(昭和43年8月1日～昭和49年3月7日)
	河村友吉	(昭和44年9月1日～昭和57年3月8日)
	小進幸平	(昭和48年4月1日～昭和57年3月8日)
	渡辺英一	(昭和48年4月18日～昭和50年8月31日)
	鍋島敏	(昭和49年3月8日～昭和57年3月8日)
	村上博之	(昭和50年9月1日～昭和54年9月18日)
理事	宮野茂博	(昭和55年3月9日～昭和56年5月31日)
	吉村益次	(昭和57年3月9日～昭和61年3月8日)
	明石六郎	(昭和58年1月21日～平成元年10月27日)
	小尾知愛	(昭和59年3月9日～昭和63年3月31日)
	大西利勝	(昭和59年3月9日～昭和61年3月8日)
	谷岡豊次	(昭和61年3月9日～昭和61年11月22日)
	飯倉大八郎	(昭和63年3月9日～平成2年3月31日)
	大竹重雄	(昭和63年5月23日～昭和63年12月9日)
	佐竹孝之	(平成2年3月9日～平成4年11月30日)
監事	堀七衛	(昭和41年3月8日～昭和50年6月2日)
	橋本和子	(昭和41年3月8日～昭和42年5月16日)
	児玉宗忠	(昭和42年11月15日～昭和57年3月8日)
	佐藤迪男	(昭和50年9月1日～昭和53年5月24日)
	後藤孔明	(昭和53年5月31日～昭和59年3月8日)
	林栄一	(昭和59年3月9日～平成6年3月8日)
運営委員	畔上てる子	(昭和41年3月8日～昭和42年3月22日)
	衛藤知一	(昭和41年3月8日～昭和42年3月22日)
	大蔵善雄	(昭和41年3月8日～昭和42年3月22日)
	角田耕一	(昭和41年3月8日～昭和42年3月22日)
	河野昭五	(昭和41年3月8日～昭和42年3月22日)
	ジャスティン・W・ダート	(昭和41年3月8日～昭和42年3月22日)
	調一興	(昭和41年3月8日～昭和42年3月22日)
	高橋隆一	(昭和41年3月8日～昭和42年3月22日)
	富田忠良	(昭和41年3月8日～昭和42年3月22日)
	中村泰友	(昭和41年3月8日～昭和42年3月22日)
	橋本祐子	(昭和41年3月8日～昭和42年3月22日)

歴　代　役　員

運営委員	畑田和男	(昭和41年3月8日～昭和42年3月22日)
	松本平逸	(昭和41年3月8日～昭和42年3月22日)
	石尾博一	(昭和41年3月8日～昭和42年3月22日)
	菊池次郎	(昭和41年3月8日～昭和42年3月22日)
	中村希代子	(昭和41年3月8日～昭和42年3月22日)
評議員	畔上てる子	(昭和41年3月8日～昭和43年3月7日)
	調　一興	(昭和41年3月8日～昭和52年3月17日)
	橋本祐子	(昭和41年3月8日～昭和50年3月8日)
	吉田嗣義	(昭和41年3月8日～昭和43年3月7日)
	高橋隆司	(昭和41年3月8日～昭和47年3月7日)
	糸永孝夫	(昭和41年3月8日～昭和43年3月7日)
	松本平逸	(昭和41年3月8日～昭和43年3月7日)
	佐成　正	(昭和41年3月8日～昭和47年3月7日)
	富田忠良	(昭和41年3月8日～昭和45年3月7日)
	角田耕一	(昭和41年3月8日～昭和43年3月7日)
	伊藤正喜	(昭和41年3月8日～昭和43年3月7日)
	佐藤敬次郎	(昭和41年3月8日～昭和43年3月7日)
	田村春夫	(昭和41年3月8日～昭和43年3月7日)
	牟田雪義	(昭和41年3月8日～昭和47年3月7日)
	中村　裕	(昭和43年3月8日～昭和47年3月7日)
	山本清人	(昭和43年3月8日～昭和59年3月8日)
	成田三吉郎	(昭和43年3月8日～昭和49年3月7日)
	山田敦子	(昭和43年3月8日～昭和47年3月7日)
	村上博之	(昭和43年3月8日～昭和50年8月31日)
	稲田春苗	(昭和43年3月8日～平成4年3月8日)
	長田シゲ	(昭和43年3月8日～昭和54年4月16日)

評議員	相良好仁	(昭和43年3月8日～昭和59年3月8日)
	羽田野忠文	(昭和43年3月8日～昭和59年3月8日)
	松延陽一	(昭和43年3月8日～昭和47年3月7日)
	河野友吉	(昭和43年3月8日～昭和47年3月7日)
	渡技京馬	(昭和43年3月8日～昭和47年3月7日)
	北島雅治	(昭和43年3月8日～昭和47年3月7日)
	岩男穎一	(昭和47年3月8日～昭和51年3月7日)
	中根正勝	(昭和47年3月8日～昭和50年8月31日)
	吉村益次	(昭和47年3月8日～昭和55年3月8日)
	増田元彦	(昭和47年3月8日～昭和49年3月7日)
	佐々木忠重	(昭和47年3月8日～昭和49年3月7日)
	柚木崎次郎	(昭和47年3月8日～昭和49年3月7日)
	佐藤　正	(昭和47年3月8日～昭和59年3月8日)
	平岡　弘	(昭和47年3月8日～昭和51年3月7日)
	水迫幸平	(昭和47年3月8日～平成2年3月8日)
	今村由男	(昭和47年3月8日～昭和62年5月25日)
	河合伊六	(昭和49年3月8日～昭和55年3月8日)
	菊池　宏	(昭和49年3月8日～昭和55年3月8日)
	草原周司	(昭和49年3月8日～昭和50年8月31日)
	後藤孔明	(昭和49年3月8日～昭和55年3月8日)
	波多野裕敏	(昭和49年3月8日～平成4年10月9日)
	山本喜昭	(昭和49年3月8日～昭和61年3月8日)
	萩島秀男	(昭和50年9月1日～昭和51年8月5日)
	田中嘉男	(昭和50年9月1日～昭和53年3月8日)
	吉松時義	(昭和50年9月1日～昭和61年3月8日)
	吉永栄治	(昭和52年3月18日～平成4年5月31日)

歴　代　役　員

評議員	佐藤重智	(昭和53年3月9日～昭和55年3月8日)
	右田光雄	(昭和55年3月9日～昭和63年3月8日)
	大田友規	(昭和50年2月1日～平成4年3月8日)
	中村廣子	(昭和59年7月26日～平成2年3月8日)
	菅沢泰三	(昭和61年11月22日～昭和63年3月8日)
	江藤道浩	(昭和61年11月22日～平成元年5月22日)
	岡田正友	(昭和61年3月9日～平成2年3月8日)
	神野有三	(平成元年5月23日～平成3年5月26日)
	沢田富雄	(平成2年3月9日～平成3年3月10日)
	柳瀬忠男	(平成2年3月9日～平成5年3月31日)
	相馬　滋	(平成3年3月11日～平成4年9月30日)
評議員	渡辺泰望	(平成3年5月27日～平成6年3月31日)
	羽田野勝彦	(平成4年6月1日～平成6年1月9日)
	西田　実	(平成4年10月1日～平成5年10月30日)
所長	中村泰友	(昭和40年10月5日～昭和41年3月31日)
事務局長	牟田雪義	(昭和40年10月5日～昭和41年11月20日)
	林　明次	(昭和41年11月21日～昭和42年12月30日)
	水迫幸平	(昭和43年4月1日～昭和47年3月31日)
	宮野茂博	(昭和47年4月1日～昭和55年3月31日)
	佐藤　保	(昭和55年4月1日～昭和61年3月31日)
	飯倉大八郎	(昭和62年4月1日～平成2年3月31日)

※　S61.4.1～S62.3.31の事務局長は
飯倉大八郎が職務代行

（以上、敬称は省略させていただきました。）

主　な　補　助　金

（単位＝円）

昭和40年(1965)	大分県補助金	20,205,000	第一期工事
昭和41年(1966)	大分県補助金	10,102,500	第一期工事
	お年玉賦課金寄付	2,500,000	プールの建設
	日本自転車振興会補助金	24,565,000	第二、三作業棟の建設
昭和42年(1967)	日本自転車振興会補助金	18,255,000	桜寮の建設
昭和43年(1968)	日本自転車振興会補助金	21,510,000	集塵器ほか設備
昭和44年(1969)	日本船舶振興会補助金	6,000,000	労働研究機器の購入
昭和45年(1970)	日本自転車振興会補助金	51,000,000	本館建築工事
	清水基金補助金	7,000,000	本館冷房装置
	別府市補助金	9,000,000	浴場の建設
	労働省委託研究	1,000,000	労働機能研究、脊髄ハンドブック
	三菱財団補助金	8,000,000	多用途監視装置等機器の購入
昭和46年(1971)	大分県補助金	59,499,000	福祉工場の建設
	日本自転車振興会補助金	25,510,000	
	三菱財団補助金	11,000,000	重度障害者の労働に関する研究
昭和47年(1972)	大分県補助金	1,500,000	労働研究
	中央競馬補助金	2,500,000	リフト付車いすの研究
	日本船舶振興会補助金	28,560,000	研修センターの建設
昭和48年(1973)	大分県補助金	2,000,000	労働研究
	労働省委託研究	800,000	
	日本自転車振興会補助金	9,910,000	射出成型機の購入
	清水基金補助金	5,000,000	桜寮暖房設備
昭和49年(1974)	大分県補助金	2,200,000	労働研究
	労働省委託研究	1,500,000	
	三菱財団補助金	5,500,000	サーベックマシン他機械の購入
昭和50年(1975)	通産省委託事業	19,000,000	福祉機械工場モデル開発
	日本自転車振興会補助金	88,720,000	機能強化センター増改築
	日本IBM補助金	2,000,000	補装具などの研究
	大分県補助金	2,000,000	脳性マヒ研究ほか
	厚生省補助金	4,250,000	SIC自助具等展示事業
	丸紅基金補助金	1,250,000	SIC相談事業
昭和51年(1976)	日本機械工業連合会委託研究	10,000,000	NC機械作業の研究

昭和51年(1976)	大分県補助金	3,000,000	桜寮屋内消火栓設備
	厚生省展示委託事業	4,038,000	SIC自助具等展示事業
	丸紅基金補助金	1,250,000	SIC相談事業
	東京都補助金	1,737,500	SIC相談事業
	身体障害者雇用促進協会委託	1,000,000	作業用椅子の研究
	清水基金補助金	5,000,000	鶴見寮暖房工事
昭和52年(1977)	身体障害者雇用促進協会委託	5,000,000	職域拡大研究、調査
	三菱財団補助金	10,000,000	リンガダックシステムによる職域拡大研究
昭和53年(1978)	身体障害者雇用促進協会助成金	50,000,000	職能開発センター建設
	大分県補助金	31,166,000	消防設備事業
	身体障害者雇用促進協会委託	10,000,000	職域拡大研究、開発
昭和54年(1979)	身体障害者雇用促進協会助成金	50,000,000	職能開発センター建設
	身体障害者雇用促進協会助成金	67,286,000	杵築作業場設置
	大分県補助金	5,000,000	ビデオ教材機器購入
昭和55年(1980)	日本自転車振興会補助金	172,730,000	ゆたか寮の建設
	別府市補助金	20,000,000	コミセン備品、機器
	身体障害者雇用促進協会委託	10,000,000	
	三菱財団補助金	4,000,000	コンピュータ関係
昭和56年(1981)	日本自転車振興会補助金	68,090,000	第二作業棟改築
	身体障害者雇用促進協会委託	10,000,000	
昭和57年(1982)			
昭和58年(1983)	愛知県補助金	798,660,000	愛知太陽の家建設
	蒲郡市補助金	63,000,000	愛知太陽の家建設
昭和59年(1984)			
昭和60年(1985)	京都市補助金	800,105,000	京都太陽の家建設
	京都府補助金	433,795,000	京都太陽の家建設
	蒲郡市補助金	25,000,000	愛知太陽の家コミセン建設
昭和61年(1986)			
昭和62年(1987)	大分県補助金	291,667,500	サン・コミ・大神建設
昭和63年(1988)	大分県補助金	43,832,500	サン・コミ・大神建設
	愛知県共同募金寄付	2,500,000	愛知太陽の家車庫建設
	蒲郡市補助金	1,500,000	顕彰石碑建造

昭和63年(1988)	大分県補助金	262,500	非常通報装置の設置
平成元年(1989)	大分県補助金	55,693,696	別府・大規模修繕
	日本船舶振興会補助金	24,900,000	モデルハウスの建設、実験
平成元年(1989)	大分県補助金	26,285,000	モデルハウスの建設、実験
	大分県補助金	15,000,000	機械設備の近代化
	大分県補助金	10,300,000	スプリンクラーの設置、別府・ゆうわ
平成2年(1990)	日本自転車振興会補助金	367,920,000	機能強化研修棟の建設
	大分県補助金	697,481,000	作業棟、食堂棟の建設
	大分県補助金	50,000,000	設備整備
平成3年(1991)			
平成4年(1992)	大分県補助金	100,559,000	別府・大規模修繕
	大分県補助金	14,904,000	公共下水道工事
	三菱財団補助金	7,000,000	職能評価機器の開発
	中村裕記念身体障害者福祉財団	1,000,000	マラソン練習機の研究
	愛知県共同募金寄付	850,000	愛知、医務室自動ドア工事
平成5年(1993)	大分県補助金	107,116,000	別府・大規模修繕
	中央競馬補助金	4,000,000	リフト付車両の購入
	愛知県補助金	796,000	愛知・小規模整備
平成6年(1994)	中村裕記念身体障害者福祉財団	1,000,000	言語障害者の発声練習効果の研究
	愛知県補助金	15,128,000	エアコンプレッサー増設
	愛知県補助金	6,643,000	ＮＥＣオフィスプロセッサー設備
	中央競馬馬主社会福祉財団	3,000,000	公共下水道継ぎ込み工事（愛知）

見学・来訪者の状況

1995年3月調

	見学・来訪者数			外国からの来訪者数		
	別府	愛知	京都	別府	愛知	京都
昭和40年(1965)	不明					
昭和41年(1966)	不明			6		
昭和42年(1967)	不明			7		
昭和43年(1968)	不明			22		
昭和44年(1969)	不明			7		
昭和45年(1970)	不明			20		
昭和46年(1971)	不明			19		
昭和47年(1972)	不明			16		
昭和48年(1973)	不明			60		
昭和49年(1974)	6,454			7		
昭和50年(1975)	7,898			12		
昭和51年(1976)	8,200			9		
昭和52年(1977)	8,544			12		
昭和53年(1978)	7,565			18		
昭和54年(1979)	8,975			85		
昭和55年(1980)	8,738			92		
昭和56年(1981)	11,053			157		
昭和57年(1982)	8,413			15		
昭和58年(1983)	5,769			47		
昭和59年(1984)	5,785	9,538		112	42	
昭和60年(1985)	5,443	3,973		269	20	
昭和61年(1986)	4,553	2,406	5,193	99	(不明)	130
昭和62年(1987)	5,403	2,149	3,978	97	14	110
昭和63年(1988)	5,274	2,415	2,681	59	7	44
平成元年(1989)	4,302	2,142	2,310	97	2	75
平成2年(1990)	4,235	2,211	2,013	144	4	78
平成3年(1991)	5,584	1,491	1,942	186	12	155
平成4年(1992)	5,067	2,307	1,253	256	10	37
平成5年(1993)	7,272	2,139	1,375	165	11	14
平成6年(1994)	5,848	1,471	663	212	52	27

人員の推移

（　）内障害者

	総人員	施設利用者	雇用障害者	健常者	事務局職員人員（左再掲）		
					別府	愛知	京都
昭和40年(1965)	12 (7)		7	5	12 (7)		
昭和41年(1966)	32 (29)	22	7	3	10 (7)		
昭和42年(1967)	86 (78)	69	9	8	17 (9)		
昭和43年(1968)	119 (103)	94	9	16	25 (9)		
昭和44年(1969)	156 (138)	130	8	18	26 (8)		
昭和45年(1970)	177 (156)	150	6	21	27 (6)		
昭和46年(1971)	208 (183)	177	6	25	30 (6)		
昭和47年(1972)	326 (273)	234	39	53	50 (8)		
昭和48年(1973)	347 (288)	225	63	59	50 (8)		
昭和49年(1974)	393 (318)	245	73	75	56 (8)		
昭和50年(1975)	392 (310)	243	67	82	63 (8)		
昭和51年(1976)	388 (304)	235	69	84	61 (9)		
昭和52年(1977)	389 (304)	235	69	85	62 (8)		
昭和53年(1978)	410 (321)	250	71	89	66 (8)		
昭和54年(1979)	431 (341)	256	85	90	70 (8)		
昭和55年(1980)	455 (366)	262	104	89	74 (9)		
昭和56年(1981)	525 (396)	294	102	129	100 (9)		
昭和57年(1982)	623 (487)	348	139	136	104 (9)		
昭和58年(1983)	647 (505)	363	142	142	110 (11)		
昭和59年(1984)	815 (610)	405	205	205	107 (11)	29 (2)	
昭和60年(1985)	901 (670)	419	251	231	109 (10)	31 (2)	
昭和61年(1986)	1075 (819)	471	348	256	113 (10)	30 (2)	29 (2)
昭和62年(1987)	1104 (838)	473	365	266	119 (10)	29 (2)	29 (2)
昭和63年(1988)	1236 (925)	501	424	311	141 (11)	29 (2)	26 (1)
平成元年(1989)	1294 (961)	516	445	333	138 (9)	30 (2)	25 (2)
平成2年(1990)	1304 (970)	519	451	334	131 (9)	29 (2)	28 (2)
平成3年(1991)	1437 (999)	502	497	438	138 (7)	29 (2)	33 (2)
平成4年(1992)	1453 (1010)	509	501	443	141 (8)	29 (2)	32 (3)
平成5年(1993)	1491 (1022)	482	540	469	140 (7)	29 (2)	32 (2)
平成6年(1994)	1539 (1055)	512	543	484	138 (8)	29 (2)	33 (2)
平成7年(1995)	1576 (1078)	514	564	498	141 (9)	29 (2)	33 (2)

施設の概要

現在の作業場

平成7年(1995)8月1日現在

印　刷　科

授産従業員数
8人

協力企業
有限会社 電子印刷センター

作業内容
電子組版機、
集版システムによる
印刷、製本

設 置 日
昭和41年(1966)4月

プラスチック科

授産従業員数
27人
（杵築分場を含む）

協力企業
株式会社 タジマツール
ホンダ太陽株式会社
福岡東陶株式会社

作業内容
プラスチック製品の製造(巻尺関係、車載関係、紙切板等)

設 置 日
昭和44年(1969)2月
（杵築作業所設置 昭和54年(1979) 8月1日）

金　工　科

授産従業員数
55人

協力企業
株式会社タジマツール

作業内容
巻尺の組立

設 置 日
昭和45年(1970)10月

園　芸　科

授産従業員数
4人

協力企業
な　し

作業内容
施設内の清掃管理
農園芸作業及び園芸品の販売

設 置 日
昭和48年(1973)10月

特　機　科

授産従業員数
13人

協力企業
ソニー・太陽株式会社

作業内容
ウォークマン等に附属するヘッドホン

設 置 日
昭和49年(1974) 6 月

電子科ＴＩ

授産従業員数
41人

協力企業
日本テキサス・インスツルメンツ株式会社

作業内容
ＩＣの外観検査

設 置 日
昭和52年(1977)10月

商　業　科

授産従業員数
1人

協力企業
株式会社トキハインダストリー

作業内容
レジ係、その他商業サービスの実習

設 置 日
昭和52年(1977)12月

電　機　科

授産従業員数
77人

協力企業
オムロン太陽株式会社

作業内容
リレーソケット組立

設 置 日
昭和53年(1978) 6 月

精　機　科

授産従業員数
42人

協力企業
ホンダ太陽株式会社

作業内容
自動車用部品製造
（スピードメーター
タコメーター他）

設 置 日
昭和53年(1978) 7 月

情報処理科

授産従業員数
10人

協力企業
三菱商事太陽株式会社

作業内容
コンピュータソフトの
開発

設 置 日
昭和55年(1980) 6 月

制御機器科

授産従業員数
26人

協力企業
オムロン太陽株式会社

作業内容
パワーリレー

設 置 日
昭和56年(1981) 9 月

機　材　科

授産従業員数
26人

協力企業
ホンダ太陽株式会社

作業内容
自動車用部品組立
(リヤーストップスイッチ、オイルレベルスイッチ)

設 置 日
昭和60年(1985) 4 月

ＦＪ機器科

授産従業員数
８人

協力企業
富士通カストマ太陽株式会社

作業内容
現金自動支払い機ユニット部品のリペア作業及びＯＡ機器（ワープロ、パソコン）のリペアとメンテナンス

設 置 日
平成４年(1992)４月

工　芸　科

授産従業員数
38人

協力企業
な　し

作業内容
革製品製作、電子部品組立

設 置 日
平成６年(1994)４月

愛知 電 装 科

授産従業員数
50人

協力企業
デンソー太陽株式会社

作業内容
自動車用部品、
自動車用コンビネーションメーター部品

設 置 日
昭和59年(1984) 4 月

京都　制御機器科

授産従業員数
50人

協力企業
オムロン京都太陽株式会社

作業内容
センサ用部品加工
センサ用部品袋詰
ＩＣ外観検査
電源ユニット用ソケット

設 置 日
昭和61年(1986) 4 月

別府 福祉工場

従業員数
45人

協力企業
オムロン太陽株式会社

作業内容
リレーソケット
リレー

設 置 日
昭和47年(1972) 4 月

愛知 福祉工場

従業員数
92人

有期雇用者
11人

協力企業
デンソー太陽株式会社

作業内容
コンビネーションメーター組立
ゲージ組立
フュエールセンダー組立

設 置 日
昭和59年(1984) 4 月

京都 福祉工場

従業員数
92人

有期雇用者
27人

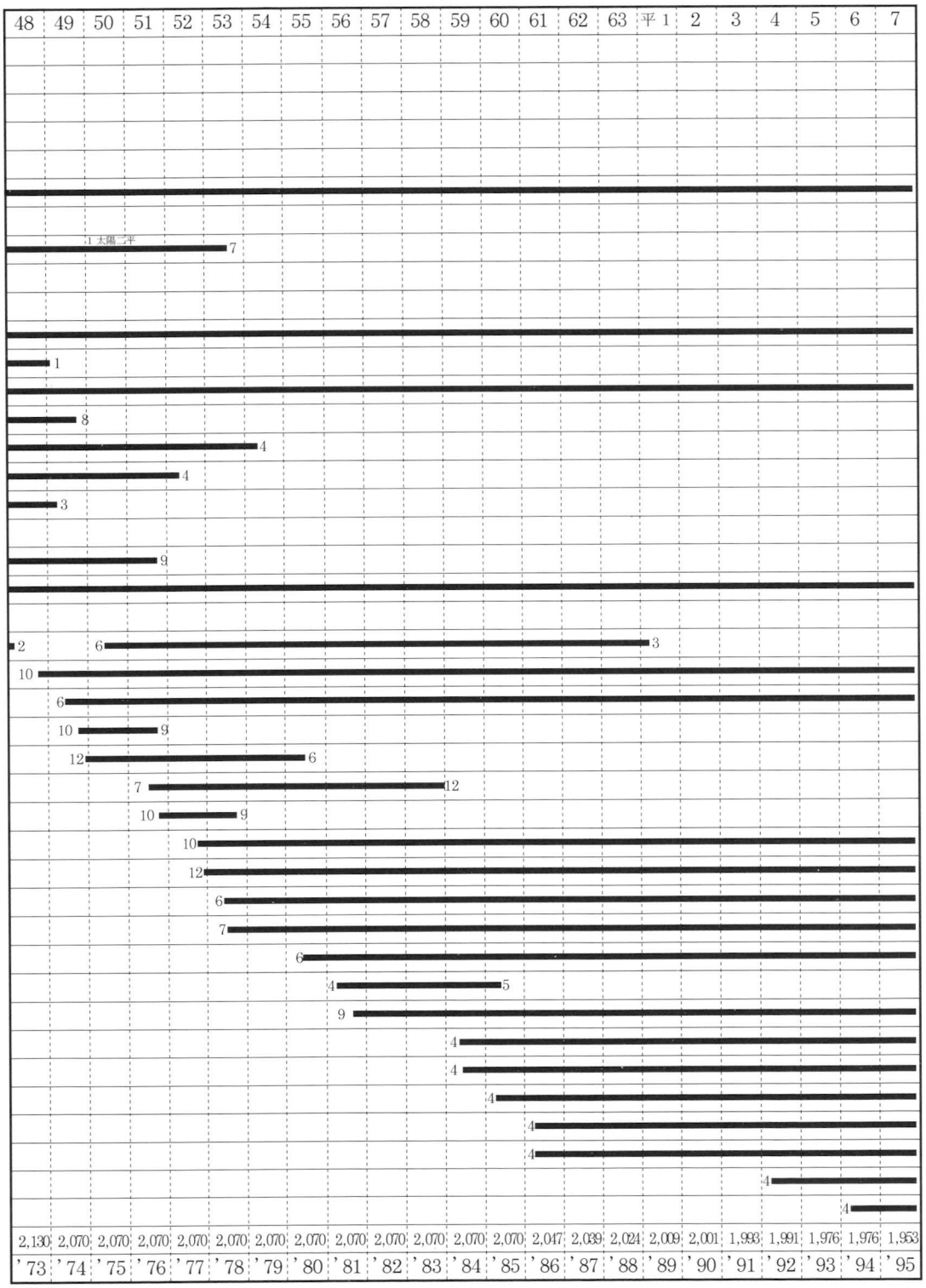
協力企業
オムロン京都太陽株式会社

作業内容
電子センサ、ワイヤハーネス（ＡＴＭ用）
センサ用電源ユニット

設 置 日
昭和61年(1986) 4 月

事業種目の変遷

現存	科目	協力企業	昭40	41	42	43	44	45	46	47
	竹工科	並松製作所	10					5		
	義肢科	別府義肢	10				9			
	縫製科		10			12				
	木工科		10		12					
	金工科 プレスパイプイス	菅製作所	10		12					
○	印刷科	㈲電子印刷センター		4						
	金工科 エバー(カメラ商品)	関西エバーブラック㈱		11						10
	木工科 シャープ(コタツ)	シャープ㈱			5					
	クリーニング科	綿久寝具㈱			5					11
	金工科 京都度器	京都度器製作所				6		9		
○	プラスチック科 第一	㈱タジマツール					2			
	プラスチック科 第二	京屋工芸(マネキン)						6		
○	金工科	㈱タジマツール						10		
	医療機器科	川澄化学㈱							4	
	木工科 神棚	サンアップ工芸㈱							9	
	木工科 唐木(高級家具)	伏野唐木㈱							11	
	電機科								12	
	電器科	ウェストン音機㈱					9	5		
	応用資材科	オムロン太陽㈱								4
⊙	福祉工場	〃								4
	工芸科 木工									5 11
	工作科(リハビリテーション機器科)									5
○	園芸科									
○	特機科	ソニー・太陽㈱								
	特産科	㈱O.S.K.								
	工芸科 つげ	㈲釜我つげ工芸								
	工芸科 カナクラ	㈲金倉仏光堂								
	特修科									
○	電子科 T.I	㈱日本テキサスインスツルメント								
○	商業科 サンストア	㈱トキハインダストリー								
○	電機科	オムロン太陽㈱								
○	精機科	ホンダ太陽㈱								
○	情報処理科	三菱商事太陽㈱								
	応用訓練科									
○	制御機器科	オムロン太陽㈱								
○	電装科	デンソー太陽㈱								
⊙	蒲郡福祉工場	〃								
○	機材科	ホンダ太陽㈱								
○	制御機器科	オムロン京都太陽㈱								
⊙	京都福祉工場	〃								
○	FJ機器科	富士通カストマ太陽㈱								
○	工芸科									3
	作業所所定内年間作業時間								2,235	2,220
			'65	'66	'67	'68	'69	'70	'71	'72


48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 平1 2 3 4 5 6 7
1 太陽 2平
7
1
8
4
4
3
9
2
6
3
10
6
10
9
12
6
7
12
10
9
10
12
6
7
6
4
5
9
4
4
4
4
4
4
2,130 2,070 2,070 2,070 2,070 2,070 2,070 2,070 2,070 2,070 2,070 2,070 2,070 2,047 2,039 2,024 2,009 2,001 1,993 1,991 1,976 1,976 1,953
'73 '74 '75 '76 '77 '78 '79 '80 '81 '82 '83 '84 '85 '86 '87 '88 '89 '90 '91 '92 '93 '94 '95

共同出資会社一覧

社名	オムロン太陽株式会社 Omron Taiyo Co., Ltd.	ソニー・太陽株式会社 Sony Sun Corporation	ホンダ太陽株式会社 Honda Sun Manufacturing Co., Ltd.	三菱商事太陽株式会社 Mitsubishi shoji & Sun Co., Ltd.
設立	昭和47年(1972) 2月4日	昭和53年(1978) 1月14日	昭和56年(1981) 9月25日	昭和58年(1983)12月1日
資本金	2,000万円	5,000万円	3,000万円	1,000万円
株主構成	オムロン株式会 50.75% 太陽の家 12.5% 障害者特株会 16.25% オムロン関係者 6.75% 太陽の家関係者 13.75%	ソニー㈱ 52.6% 太陽の家 23.3% その他関係者 24.1%	本田技研工業㈱ 51% 日本精機㈱ 5% ㈱本田ロック 5% 東洋電装㈱ 5% スタンレー電気㈱ 5% ㈱三つ葉電機製作 5% 太陽の家 24%	三菱商事㈱ 67% 太陽の家 33%
人員構成	社員 52名 福祉工場従業員 45名 入所者 26名 有期雇用者 21名	社員 157名 有期雇用者 6名	社員 112名 入所者 42名 有期雇用者 19名	社員 30名 入所者 10名
	計 144名	計 163名	計 173名	計 40名
生産品目	リレー リレーソケット	マイクロホン ヘッドホン 補聴器	自動車用部品 （スピードメーター、 タコメータ ウインカー キーロック ストップスイッチ）	コンピュータソフトの開発
所在地	大分県別府市大字内竈1407-2	大分県速見郡日出町大字大神寒水1402-14	大分県別府市大字内竈1399-1	大分県別府市大字内竈1393

平成7年(1995)8月1日現在

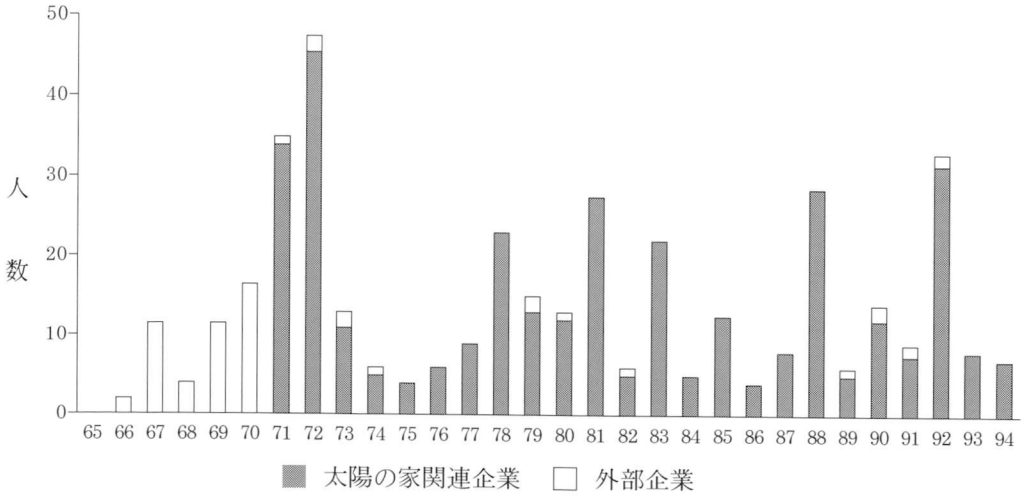
ホンダアールアンドデー太陽株式会社 Honda R&D Sun Manufacturing Co., Ltd.	デンソー太陽株式会社 DENSO TAIYO CO., LTD.	オムロン京都太陽株式会社 Omron Kyoto Taiyo Co., Ltd.	富士通カストマ太陽株式会社 FUJITSU CUSTOMER & SUN Ltd
平成4年(1992)7月17日	昭和59年(1984)3月30日	昭和60年(1985)3月6日	平成7年(1995)7月3日
3,000万円	1,500万円	1,500万円	2,000万円
㈱本田技術研究所 60% 本田技研工業㈱ 25% 太陽の家 15%	日本電装㈱ 51% 太陽の家 49%	オムロン㈱ 61% 太陽の家 39%	富士通カストマエンジニアリング㈱ 75% 太陽の家 25%
社員 24名	社員 53名 福祉工場従業員 92名 入所者 50名 有期雇用者 11名	社員、嘱託社員 34名 福祉工場従業員 92名 入所者 50名 有期雇用者 27名	社員 17名 協力会社社員 2名 入所者 8名 有期雇用者 6名
計 24名	計 206名	計 203名	計 33名
CAD設計	自動車用コンビネーションメーター	電子センサー タイマ 各種電子機器付属品	端末機器及びOA機器のリペア
大分県速見郡日出町大字川崎字子招3981	愛知県蒲郡市形原町北浜28-1	京都市南区上鳥羽塔ノ森上河原	大分県別府市大字内竈1399-1

(※　入所者とは、授産施設等の施設入所者)

授産施設から社会復帰した人の数

平成７年(1995)３月

	別府		愛知		京都		計
	内部	外部	内部	外部	内部	外部	
昭和40年(1965)							
昭和41年(1966)		2					2
昭和42年(1967)		11					11
昭和43年(1968)		4					4
昭和44年(1969)		11					11
昭和45年(1970)		16					16
昭和46年(1971)	34	1					35
昭和47年(1972)	45	2					47
昭和48年(1973)	11	2					13
昭和49年(1974)	6	1					7
昭和50年(1975)	4	0					4
昭和51年(1976)	7	0					7
昭和52年(1977)	9	0					9
昭和53年(1978)	23	0					23
昭和54年(1979)	13	2					15
昭和55年(1980)	12	1					13
昭和56年(1981)	27	0					27
昭和57年(1982)	5	1					6
昭和58年(1983)	22	0					22
昭和59年(1984)	5	0	11	1			17
昭和60年(1985)	12	0	7	9			28
昭和61年(1986)	4	0	4	7	2		17
昭和62年(1987)	8	0	4	4	4		20
昭和63年(1988)	18	0	3	1	10	5	37
平成元年(1989)	5	1	3	4	1	4	18
平成２年(1990)	11	2	3	6	2	1	25
平成３年(1991)	6	3	1	4	2	3	19
平成４年(1992)	29	3	8	1	2	1	44
平成５年(1993)	8	0	2	2	0	1	13
平成６年(1994)	8	0	3	0	0	0	11



給与・工賃支給実績(平均月額)

(単位：円)

	別府授産(身障重度)	愛知重度授産	京都重度授産	別府福祉工場	愛知福祉工場	京都福祉工場
昭和40年(1965)						
昭和41年(1966)	(3,000)					
昭和42年(1967)	(6,000)					
昭和43年(1968)	(12,500)					
昭和44年(1969)	(14,500)					
昭和45年(1970)	(17,300)					
昭和46年(1971)	(19,400)					
昭和47年(1972)	(21,300)					
昭和48年(1973)	(25,800)					
昭和49年(1974)	29,866					
昭和50年(1975)	30,823			69,399		
昭和51年(1976)	34,852			71,536		
昭和52年(1977)	38,344			79,465		
昭和53年(1978)	36,714			92,206		
昭和54年(1979)	35,741			95,590		
昭和55年(1980)	36,464			108,013		
昭和56年(1981)	37,426			119,264		
昭和57年(1982)	36,613			124,237		
昭和58年(1983)	36,949			132,118		
昭和59年(1984)	38,774	24,027		139,290	101,364	
昭和60年(1985)	41,197	28,953		157,342	119,859	
昭和61年(1986)	40,477	29,179	19,519	157,696	122,079	122,520
昭和62年(1987)	41,542	30,522	25,544	162,216	125,963	138,973
昭和63年(1988)	42,052	30,962	26,327	166,902	129,240	139,947
平成元年(1989)	43,342	31,552	29,832	177,000	124,148	149,772
平成2年(1990)	45,533	33,610	30,890	178,477	154,153	166,250
平成3年(1991)	46,175	35,165	32,875	180,067	138,201	172,036
平成4年(1992)	45,329	36,090	33,958	174,659	145,735	180,791
平成5年(1993)	46,083	36,097	36,747	174,690	172,579	187,273
平成6年(1994)	42,679	35,835	36,568	178,280	172,611	189,083

算出　決算報告にある年間総支給額を各月の在籍者の年間延べ人数で除した額である。
昭和48年以前の（　）内は推定。

出　勤　率

	出勤率（%）					
	授産作業場			福祉工場		
	別府	愛知	京都	別府	愛知	京都
昭和40年(1965)						
昭和41年(1966)						
昭和42年(1967)						
昭和43年(1968)						
昭和44年(1969)	95.6					
昭和45年(1970)	93.8					
昭和46年(1971)	93.0					
昭和47年(1972)	93.0					
昭和48年(1973)	92.1					
昭和49年(1974)	95.1			97.5		
昭和50年(1975)	97.7			95.1		
昭和51年(1976)	94.5			97.5		
昭和52年(1977)	94.3			96.0		
昭和53年(1978)	95.0			96.4		
昭和54年(1979)	95.4			95.1		
昭和55年(1980)	95.0			97.1		
昭和56年(1981)	94.3			96.8		
昭和57年(1982)	94.9			96.3		
昭和58年(1983)	96.5			98.4		
昭和59年(1984)	97.2			98.0		
昭和60年(1985)	97.3			91.7	97.3	
昭和61年(1986)	97.4	96.6	92.4	98.1	96.0	92.9
昭和62年(1987)	97.0	98.9	93.0	98.5	97.1	86.9
昭和63年(1988)	97.1	97.5	92.7	99.4	96.0	92.6
平成元年(1989)	97.3	97.7	93.3	98.7	92.9	93.0
平成2年(1990)	96.9	98.2	94.6	98.5	96.4	93.2
平成3年(1991)	97.0	98.7	94.6	97.5	96.2	94.6
平成4年(1992)	98.2	98.4	95.1	96.2	95.3	95.7
平成5年(1993)	96.8	98.2	99.2	96.6	97.6	93.4
平成6年(1994)	97.0	97.3	97.8	98.7	96.8	99.9

障害別人員の推移

平成7年(1995)4月調

	脳性まひ	脊髄損傷	急性灰白髄炎	進行性疾患	骨関節疾患	視聴覚障害	切断	頸髄損傷	脳血管傷害	頭部外傷	その他	MR	計	施設利用者	雇用障害者
昭和40年(1965)		3					4						7		7
昭和41年(1966)	4	8	5		2	1	7				2		29	22	7
昭和42年(1967)	21	12	11	5	5	2	12				10		78	69	9
昭和43年(1968)	30	18	13	6	10	3	12				11		103	94	9
昭和44年(1969)	33	27	18	8	16	3	13				20		138	130	8
昭和45年(1970)	42	35	18	7	21	6	4				23		156	150	6
昭和46年(1971)	50	42	23	8	15	9	8				28		183	177	6
昭和47年(1972)	88	56	38	13	18	12	10				38		273	234	39
昭和48年(1973)	96	59	44	11	22	11	13				32		288	225	63
昭和49年(1974)	114	62	41	11	27	12	18				33		318	245	73
昭和50年(1975)	109	60	38	8	26	13	16		7		33		310	243	67
昭和51年(1976)	104	54	39	8	24	15	15		8		37		304	235	69
昭和52年(1977)	106	51	36	8	22	16	16		6		43		304	235	69
昭和53年(1978)	124	56	40	9	21	14	13				44		321	250	71
昭和54年(1979)	144	44	42	6	19	17	14				55		341	256	85
昭和55年(1980)	162	44	39	10	18	19	12				62		366	262	104
昭和56年(1981)	178	47	36	11	19	17	10	3	1		74		396	294	102
昭和57年(1982)	216	62	39	12	24	19	13	4	7		91		487	348	139
昭和58年(1983)	237	64	38	11	22	21	11	5			96		505	363	142
昭和59年(1984)	285	66	38	14	24	26	22	7	3		125		610	405	205
昭和60年(1985)	325	78	40	20	36	34	25	14	23		106		701	419	251
昭和61年(1986)	379	98	39	22	44	32	29	16	31		129		819	471	348
昭和62年(1987)	379	101	40	22	48	33	30	15	37		133		838	473	365
昭和63年(1988)	408	109	43	21	49	44	31	15	45		160		925	501	424
平成元年(1989)	422	107	44	21	47	47	30	18	54		171		961	516	445
平成2年(1990)	426	106	40	19	45	45	28	20	75		166		970	519	451
平成3年(1991)	426	115	45	34	56	43	36	24	61	5	154		999	502	497
平成4年(1992)	425	111	45	35	56	42	38	30	59	5	160	4	1010	509	501
平成5年(1993)	417	115	43	42	59	44	36	32	61	22	145	6	1022	482	540
平成6年(1994)	434	115	46	43	55	45	39	27	66	26	150	9	1055	512	543
平成7年(1995)	440	124	44	35	56	51	39	37	74	23	144	11	1078	514	564

受　診　状　況（別府事業本部）

	S 55	S 56	S 57	S 58	S 59	S 60	S 61
外　科	5 (17)	7.7 (128)	6.11 (124)	6.1 (140)	7.67 (138)	4.7 (81)	3.9 (73)
形成・整形外科	9 (31)	5.0 (82)	9.2 (187)	11.8 (272)	12.84 (231)	11.2 (193)	9.8 (182)
内　科	34 (114)	37.1 (612)	43.0 (867)	39.8 (915)	38.13 (686)	41.3 (709)	40.5 (750)
脳外科 神経内科	4 (12)	6.5 (107)	4.8 (97)	7.3 (169)	5.50 (99)	6.2 (106)	10.4 (193)
精神科	4 (13)	2.8 (47)	1.7 (34)	3.1 (72)	4.11 (74)	2.0 (34)	1.1 (22)
歯　科	16 (53)	22.9 (379)	16.0 (324)	12.2 (281)	13.95 (251)	9.4 (161)	13.7 (254)
眼　科	11 (37)	3.9 (64)	2.7 (55)	3.5 (81)	2.16 (39)	1.3 (22)	1.5 (28)
耳鼻科	5 (17)	4.5 (75)	4.3 (88)	2.3 (53)	3.66 (66)	5.2 (90)	2.7 (50)
皮膚科	7 (23)	2.9 (48)	3.4 (69)	3.2 (73)	5.16 (93)	7.2 (124)	4.7 (87)
秘尿器科	3 (9)	6.1 (100)	8.4 (170)	10.2 (235)	6.05 (109)	11.1 (190)	11.65 (209)
婦人科	2 (7)	0.6 (10)	0.4 (6)	0.5 (11)	0.77 (13)	0.5 (8)	0.05 (1)
計	(333)	(1652)	(2021)	(2302)	(1799)	(1718)	(1849)

受　診　状　況（愛知事業本部）

	S 59	S 60	S 61	S 62	S 63	H 1	H 2	H 3	H 4	H 5	H 6
外　科	1.7 (3)	6.9 (16)	4.8 (16)	4.3 (16)	2.4 (9)	3.4 (16)	2.4 (13)	7.2 (3.6)	1.3 (6)	1.5 (7)	6.3 (39)
形成・整形外科	9.9 (18)	23.4 (54)	20.0 (66)	21.7 (80)	16.6 (63)	32.8 (156)	26.8 (146)	21.0 (106)	33.4 (151)	38.7 (185)	22.6 (139)
内　科	63.0 (114)	43.7 (101)	39.9 (130)	38.9 (143)	47.6 (181)	33.5 (159)	34.3 (187)	43.8 (221)	39.3 (178)	24.7 (118)	25.3 (156)
脳外科 神経内科	1.7 (3)	7.8 (18)	2.4 (8)	9.2 (34)	6.1 (23)	7.0 (33)	4.0 (22)	5.1 (26)	5.5 (25)	9.8 (47)	8.4 (52)
精神科	2.2 (4)	0.9 (2)	10.0 (33)	1.4 (5)	6.1 (23)	4.2 (20)	2.7 (14)	1.2 (6)	2.2 (10)	2.3 (11)	5.7 (35)
歯　科	14.9 (27)	3.5 (8)	5.5 (18)	3.3 (12)	4.7 (18)	5.9 (28)	5.5 (30)	5.9 (30)	4.6 (21)	4.2 (20)	9.3 (57)
眼　科	1.1 (2)	0.9 (2)	1.8 (6)	5.2 (19)	3.2 (12)	1.3 (6)	8.4 (46)	1.2 (6)	0.7 (3)	0.2 (1)	3.9 (24)
耳鼻科	1.1 (2)	1.7 (4)	4.9 (16)	6.5 (24)	2.9 (11)	2.7 (13)	6.2 (34)	6.1 (31)	2.2 (10)	1.2 (6)	2.1 (13)
皮膚科	1.7 (3)	2.6 (6)	2.7 (9)	2.7 (10)	5.7 (22)	7.2 (13)	2.9 (16)	1.6 (8)	1.5 (7)	3.8 (18)	2.4 (15)
泌尿器科	2.7 (5)	8.6 (20)	7.3 (24)	6.3 (23)	4.2 (16)	6.5 (31)	5.3 (29)	6.3 (32)	8.4 (38)	12.8 (61)	14.0 (86)
婦人科	-	-	1.2 (4)	0.5 (2)	0.5 (2)	-	1.7 (8)	0.6 (3)	0.9 (4)	0.8 (4)	-
計	(181)	(231)	(330)	(368)	(380)	(475)	(545)	(505)	(453)	(478)	(616)

%，（　）内は人数

S 62	S 63	H 1	H 2	H 3	H 4	H 5	H 6
3.7 (70)	3.3 (63)	3.9 (90)	2.9 (49)	5.9 (109)	3.4 (60)	3.0 (71)	4.7 (124)
10.6 (199)	11.6 (225)	11.8 (273)	10.2 (171)	15.1 (280)	8.8 (156)	11.0 (251)	9.7 (253)
44.3 (836)	41.5 (804)	40.1 (927)	37.2 (624)	34.5 (640)	36.3 (639)	41.0 (952)	34.2 (894)
9.7 (183)	8.0 (156)	9.7 (226)	10.5 (177)	11.2 (207)	8.7 (155)	10.0 (238)	9.7 (258)
1.9 (36)	2.8 (54)	2.6 (60)	3.5 (59)	4.2 (78)	7.5 (132)	9.0 (214)	7.7 (201)
13.6 (257)	11.0 (214)	10.0 (232)	9.2 (155)	8.4 (156)	11.7 (206)	9.4 (223)	6.2 (165)
1.9 (35)	2.0 (39)	2.4 (56)	1.7 (29)	2.1 (38)	0.7 (12)	1.3 (32)	2.6 (69)
4.0 (76)	3.4 (66)	2.1 (48)	2.3 (38)	3.1 (58)	1.9 (33)	1.5 (37)	3.8 (100)
3.7 (70)	5.8 (112)	5.7 (131)	4.6 (78)	3.2 (60)	8.4 (147)	3.3 (81)	5.5 (144)
6.5 (123)	10.5 (204)	11.1 (256)	16.9 (282)	11.2 (207)	11.3 (198)	9.6 (228)	14.9 (392)
0.1 (1)	0.1 (3)	0.6 (12)	1.0 (17)	1.1 (20)	1.3 (22)	0.9 (22)	1.0 (25)
(1886)	(1940)	(2311)	(1679)	(1853)	(1760)	(2349)	(2625)

受　診　状　況（京都事業本部）

	S 61	S 62	S 63	H 1	H 2	H 3	H 4	H 5	H 6
外科	3.2 (10)	3.3 (22)	5.3 (46)	3.3 (20)	14.1 (66)	7.1 (32)	1.2 (9)	2.4 (25)	2.9 (33)
形成・整形外科	19.2 (60)	20.7 (140)	11.0 (96)	20.3 (123)	15.0 (70)	13.9 (63)	18.9 (143)	21.4 (227)	17.6 (199)
内科	16.9 (53)	33.0 (223)	31.6 (276)	17.0 (103)	14.3 (67)	21.9 (99)	27.5 (208)	32.4 (344)	31.9 (360)
脳外科 神経内科	8.6 (27)	11.1 (75)	19.2 (124)	18.8 (114)	25.1 (118)	19.7 (89)	103 (78)	9.9 (105)	9.3 (105)
精神科	2.2 (7)	-	0.3 (3)	4.1 (25)	0.6 (3)	0.7 (3)	0.3 (2)	0.7 (8)	3.0 (34)
歯科	33.6 (105)	15.6 (105)	23.7 (207)	20.0 (121)	10.6 (50)	21.5 (97)	20.5 (155)	11.9 (126)	13.4 (151)
眼科	1.0 (3)	4.1 (28)	2.4 (21)	4.1 (25)	3.9 (16)	4.9 (22)	7.7 (58)	5.3 (56)	3.0 (34)
耳鼻科	3.5 (11)	1.8 (12)	1.3 (11)	1.7 (10)	1.2 (6)	-	3.7 (28)	0.6 (7)	2.4 (27)
皮膚科	10.5 (33)	7.6 (51)	3.9 (34)	3.1 (19)	9.8 (46)	1.3 (6)	1.8 (14)	-	-
泌尿器科	1.0 (3)	2.5 (17)	6.2 (54)	7.4 (45)	5.5 (26)	7.7 (35)	4.4 (33)	10.8 (115)	12.8 (144)
婦人科	0.3 (1)	0.3 (2)	-	0.2 (1)	0.4 (2)	1.3 (6)	3.7 (28)	2.5 (27)	0.2 (3)
その他	-	-	小児科 0.1 (1)	-	-	-	-	鍼灸(しんきゅう) 2.1 (23)	3.5 (39)
計	(313)	(675)	(873)	(606)	(470)	(452)	(756)	(1,063)	(1,129)

大分国際車いすマラソン大会参加状況

ハーフの部（21.0975㎞）

大会回数	開催年	別府	愛知	京都	太陽の家のトップランナー
1	昭和56年(1981)	20	—	—	杉尾　良一（総合20位、1°19′56″）
2	57　(1982)	16	—	—	杉尾　良一（総合14位、1°15′27″）
3	58　(1983)	6	—	—	松本千太郎（総合13位、1°26′40″）
4	59　(1984)	11	—	—	白浜美智男（総合12位、1°08′39″）
5	60　(1985)	7	4	—	白浜美智男（総合10位、1°10′32″）
6	61　(1986)	6	2	—	二木　一巳（総合23位、1°09′48″）
7	62　(1987)	4	4	—	吉川　　勇（総合43位、1°14′48″）
8	63　(1988)	4	5	1	近藤　　豊（総合14位、1°04′07″）
9	平成元年(1989)	3	1	3	二木　一巳（総合29位、1°08′15″）
10	2　(1990)	3	2	6	浜岡　正昭（総合97位、1°15′39″）
11	3　(1991)	3	2	6	黒沢　忠巳（総合95位、1°15′02″）
12	4　(1992)	6	2	6	田中　育宏（総合83位、1°05′38″）
13	5　(1993)	9	2	4	城　　隆志（総合34位、　59′31″）
14	6　(1994)	7	2	4	山口　敏喜（総合56位、1°06′8″）

フルマラソンの部（42.195㎞）

大会回数	開催年	別府	愛知	京都	太陽の家のトップランナー
1	昭和56年(1981)	レースなし			
2	57　(1982)	レースなし			
3	58　(1983)	6	—	—	吉松　時義（総合９位、2°24′3″）
4	59　(1984)	8	—	—	吉松　時義（総合15位、2°14′50″）
5	60　(1985)	9	—	—	杉尾　良一（総合23位、2°20′25″）
6	61　(1986)	11	—	3	杉尾　良一（総合23位、2°14′28″）
7	62　(1987)	11	1	2	矢田　成昭（総合25位、2°12′46″）
8	63　(1988)	12	—	2	吉松　時義（総合24位、2°06′50″）
9	平成元年(1989)	12	1	1	矢田　成昭（総合26位、1°55′05″）
10	2　(1990)	15	1	1	矢田　成昭（総合15位、1°47′15″）
11	3　(1991)	14	—	1	矢田　成昭（総合54位、1°55′49″）
12	4　(1992)	10	1	1	矢田　成昭（総合94位、1°52′30″）
13	5　(1993)	8	1	1	吉松　時義（総合98位、2°04′18″）
14	6　(1994)	8	—	1	吉松　時義（総合49位、1°59′29″）

全国身体障害者スポーツ大会参加状況

	大会回数	開催地	開催月日	別府	愛知	京都
昭和40年(1965)	1	岐阜	11.6~7			
昭和41年(1966)	2	大分	11.5~6			
昭和42年(1967)	3	埼玉	11.4~5			
昭和43年(1968)	4	福井	10.12~13			
昭和44年(1969)	5	長崎	11.8~9	吉松　時義、 木部　役子		
昭和45年(1970)	6	岩手	10.24~25	宮本猪一郎		
昭和46年(1971)	7	和歌山	11.6~7	江藤　秀信		
昭和47年(1972)	8	鹿児島	11.11~12	原田のり子、 バスケットクラブ		
昭和48年(1973)	9	千葉	10.27~28	バスケットクラブ		
昭和49年(1974)	10	茨城	11.2~3	杉尾良一、渡辺裕一、 鬼塚理子		
昭和50年(1975)	11	三重	11.8~9	上村　秀行		
昭和51年(1976)	12	佐賀	11.6~7	永末　俊雄		
昭和52年(1977)	13	青森	10.15~16	矢野　修吉		
昭和53年(1978)	14	長野	10.23~24	隅田　晋治		
昭和54年(1979)	15	宮崎	10.27~28	河津　英信、 永田いつ子		
昭和55年(1980)	16	栃木	10.25~26	木本　弘光 佐藤　孝		
昭和56年(1981)	17	滋賀	10.24~25			
昭和57年(1982)	18	島根	10.16~17	椎　正憲、 森崎　一晴		
昭和58年(1983)	19	群馬	10.29~30	西村小百合		
昭和59年(1984)	20	奈良	10.27~28	岩瀬　昭廣、 神崎　一繁		
昭和60年(1985)	21	鳥取	11.2~3	藤原　修	村本　潔	
昭和61年(1986)	22	山梨	10.25~26	田村　浩司 奈良嶋正也		
昭和62年(1987)	23	沖縄	11.14~15	柿木原龍二、 河野　敏幸	真田伊都子	
昭和63年(1988)	24	京都	10.29~30	立野奈美子、冨山順次、 バスケットクラブ	近藤　岩男	塩月有明、松原和廣 辻川真理
平成元年(1989)	25	札幌	9.30~10.1	佐藤　進、隈元弘志、 バスケットクラブ	近藤　豊	山本嘉弘 熊谷直行
平成2年(1990)	26	福岡	11.3~4	日野正弘、田中勝己 バスケットクラブ	大楠　寿博	山中萬里、馬場節子 山田敏之、調子貴之 山添一久、畑野泰子
平成3年(1991)	27	石川	10.26~27	北原友子、バスケットクラブ 寿福院泰秀、田村算啓	山田　成児	
平成4年(1992)	28	山形	10.17~18	龍良彦、嶋隆之 バスケットクラブ	小林信作、清水昭雄、 安井寿美一	矢野喜一、堀　俊人 南清達夫
平成5年(1993)	29	徳島	11.6~7	田中　昌彦、 松本千太郎	大林　四郎	浜岡正昭
平成6年(1994)	30	愛知	11.12~13	松本　秀樹 バスケットクラブ	近藤　豊	田中育宏、 山口良太

国際ストークマンデビル競技大会参加状況

開催年月日	大会回数	開催国	参加者
昭和43年(1968) 11．3～13	17	第3回パラリンピック イスラエル　ラマットガンネ	中村裕理事長（日本選手団団長）
昭和49年(1969) 7.19～24	18	イギリス	江藤　秀信（スラローム1位、槍投100m） 森崎　一晴（水泳3位、スラローム、槍投）
昭和47年(1972) 8．2～ 8.10	21	第4回パラリンピック 西ドイツ　ハイデンブルグ	中村裕理事長（団長） 田中　慶博（槍正確投げ、スラローム） 梅田　幾世（槍正確投、60m、スラローム）
昭和49年(1974) 7.20～ 7.27	23	イギリス	畑田和男常務理事（日本選手団医師）
昭和51年(1976) 8．3～ 8.11	25	第5回パラリンピック カ ナ ダ	中村裕理事長（団長） 杉尾　良一(スラローム、フェンシング、槍正確投、バスケット)
昭和53年(1978) 7.23～29	27	イギリス	中村裕理事長（団長） 神田みす江（フェンシング2位、スラローム3位、60m走） 高橋　　寛（コーチ）
昭和54年(1979) 7.22～28	28	イギリス	畑田　和男（団長兼医師） 小林　順一（コーチ）
昭和55年(1980) 6.21～ 7．5	29	第6回パラリンピック オランダ　アーネム	中村裕理事長（団長） 江藤　秀信（バスケット） 黒沢　忠己（バスケット） 高橋　　寛（コーチ）
昭和58年(1983) 7.24～ 7.30	32	イギリス	黒沢　忠巳（バスケット）
昭和59年(1984) 7.22～ 8．1	33	第7回パラリンピック イギリス	西村小百合（女子バスケット3位） 高橋　　寛（コーチ）
昭和60年(1985) 7.28～ 8．4	34	イギリス	矢田　成昭（バスケット）
昭和61年(1986) 7.22～ 8．9	35	イギリス	西村小百合（女子バスケット3位）
昭和63年(1988) 10.15～10.24	37	第8回パラリンピック 韓　　国	椎　　正憲（100m走） 徳永　裕政（バスケット） 高橋　　寛（コーチ） 小林　順一（コーチ）
平成2年(1990) 7.29～ 8．5	39	イギリス	矢田　成昭（800m走、1500m走、5000m走、マラソン）
平成4年(1992) 9．3～ 9.14	41	第9回パラリンピック スペイン、バルセロナ	徳永　祐政（バスケット） 古手川俊明（コーチ） 高橋　　寛（コーチ）
平成5年(1993) 8.25～ 8.30	42	イギリス	指宿　　立（コーチ）

主な国際スポーツ大会への参加状況

開催年月日	大会名	開催国	参加者
昭和44年(1969) 7.22～7.24	第2回国際半身マヒ者競技大会	オーストリア ウィーン	江藤　秀信、森崎　一晴
昭和50年(1975) 6.1～6.3	第1回フェスピック大会	日　本 大分市、別府市	第15回大分県身体障害者体育大会を兼ね太陽の家から35名の選手と役員5名が出場
昭和52年(1977) 11.20～11.26	第2回フェスピック大会	オーストラリア パラマッタ市	長田博行、松倉英治、永末俊雄、江藤秀信、宮本猪一郎 中村　裕（団長）、高橋　寛（コーチ）
昭和54年(1979) 10.13～11.4	香港プレフェスピックゲーム	香　港	佐藤保事務局長を団長に、車いす選手7名、役員5名が参加
昭和57年(1982) 10.31～11.7	第3回フェスピック大会	香　港	中村　裕（団長） 中原　清、木本弘光、白浜美智男 コーチとして、高橋　寛、小林順一、通訳 後藤敬子
昭和58年(1983) 5.20～5.31	車いすバスケットボール世界選手権大会	カナダ ノバコシア州	小林順一（強化コーチ）
昭和59年(1984) 6.17～6.29	'84国際身体障害者スポーツ大会	アメリカ ニューヨーク	中原　清(クロスカントリー8位)
昭和61年(1986) 8.31～9.7	第4回フェスピック大会	インドネシア スラカルタ市	選手8名、役員4名が参加
昭和61年(1986) 5.31	ゼンバツハ湖一周車いすマラソン	スイス	藤原　修(2°39′12″) 吉永栄治（団長）
昭和62年(1987) 1.25	第10回香港国際マラソン車いすの部	香　港	椎　正憲、二木一己（2位）
昭和元年(1989) 9.15～9.20	第5回フェスピック大会	日　本 神戸市	河津英信、矢田成昭、藤原　修、柿木原龍二、嶋　隆之、田村浩司、河野敏幸、奈良輪正也、徳永祐政
平成2年(1990) 7.5～8.11	世界車いすバスケットボール選手権大会	ベルギー	徳永祐政
平成3年(1991) 12.1	マカオ国際マラソン大会	マカオ	椎　正憲、松本千太郎 今吉　豊（コーチ）
平成4年(1992) 2.13～2.6	オーストラリアオープンテニス	オーストラリア	柿木原龍二
平成4年(1992) 12.6	マカオ国際マラソン大会	マカオ	二木一己、城　隆志 堀川裕二（コーチ）
平成6年(1994) 8.30～9.14	第6回フェスピック大会	中　国	吉次一哉、奈良輪正也
平成6年(1994) 4. 5～4.19	車いすバスケットボール世界選手権予選会	イラン	徳永祐政

海外旅行へのチャンス

昭和46年(1971)	韓　　国	友好施設である聖世再活院への施設訪問（14名）
昭和52年(1977)	オーストラリア	第2回フェスピック大会の応援旅行（23名）
昭和53年(1978)	韓　　国	聖世再活院の開院式に出席のため（23名）
昭和57年(1982)	香　　港	第3回フェスピック大会の応援旅行（145名）
昭和57年(1982)	南太平洋諸国	第5回青年の船に増田茂貴君が参加、オーストラリア、ニュージランド、フィージーなど訪問
昭和58年(1983)	香　　港	1983年東南アジア青少年障害者キャンプに参加（9名）
昭和59年(1984)	韓　　国	バスケットボールクラブが親善バスケット交流試合のために
昭和60年(1985)	香　　港	国際身障者リハビリテーション交流センターに参加（10名）
昭和61年(1986)	オランダ	第2回レジャー・レクリエーション大会に参加（15名）
昭和61年(1986)	インドネシア	第4回フェスピック大会の応援旅行（40名）
昭和63年(1988)	韓　　国	ソウルパラリンピック大会の応援旅行（176名）
平成2年(1990)	韓　　国	姉妹施設との親善交流旅行（16名）
平成4年(1992)	韓　　国	姉妹施設との親善交流旅行（16名）
平成6年(1994)	中華人民共和国	第6回フェスピック北京大会の応援旅行（76名）

※　フェスピック大会には毎回太陽の家から応援旅行団を組み、1989年の第5回フェスピック神戸大会にも50名の応援団が神戸へ旅した。

研究開発の概要

研究開発の概要

●**研 究 名**：重度身体障害者のための居住実験（実験住宅　テトラエース）

期　　間：1969年４月～1970年12月

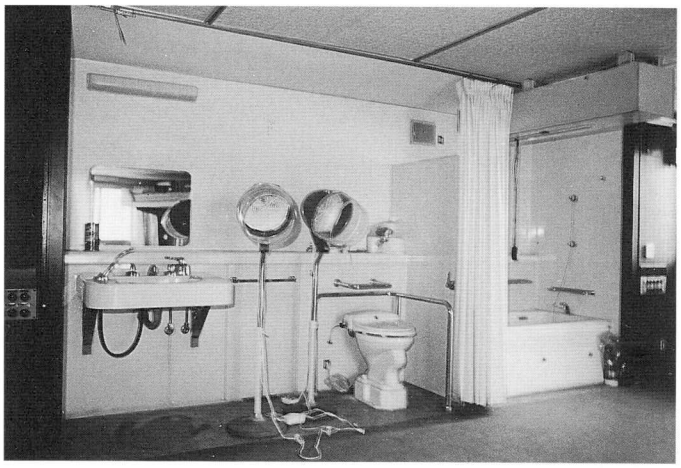
助　　成：あゆみの箱(376万円)

協力機関：東京大学生産技術研究所 東陶機器㈱ ナショナル住宅建材㈱ フランスベッド㈱他

目的および概要：足だけでなく手も十分に使えないという、動き得るもっとも重度の身障者が、誰の手も借りず自立して生活できる住宅の開発。

居住者は機能的に重度の障害者であり、常時電動車いすを使用することを前提として住宅を設計し、設備・機器類にも使いやすい工夫を随所に取り入れた。

実験住宅は「テトラエース」と呼ばれた。テトラとは四肢麻痺者を現している。鉄骨プレハブユニット構造平屋建てで床面積は46.68㎡であり、個人空間（ベッドユニット）、衛生空間（サニタリーユニット）、作業空間（キッチンユニット）から構成されている。昇降式ベッド、自動洗浄便座付き便器、入浴用電動リフト、メリーゴーラウンド式電動棚、さらに自動ドアやリモコンテレビ、オートカーテンなど当時ではまだ一般化されていなかった設備を取り入れ、障害者が生活し易い環境とした。住宅完成後、頸髄損傷者２名が居住実験を行った。テトラエースが身障者用住宅研究の先駆けとなった。



●**研 究 名**：身体障害者労働医学研究機器整備

助　　成：日本船舶振興会（600万円）

期　　間：1969年

目的および概要：多用途監視記録装置、サーミスター温度計、交直両用ポータブル心電計、トレッドミル，ＴＫＫフリッカー、高感度シンクロスコープ、パルスカウンター・発

振器、ビデオテープレコーダー・カメラ一式を購入し、重度身体障害者の労働時の呼吸、循環機能検査、ガス分析、生化学的諸検査、疲労度の測定を行った。

●**研 究 名**：労働省委託研究

助　　成：1969年(100万円)、1973年(80万円)、1974年(150万円)

期　　間：1969年　1973年　1974年

目的および概要：脊髄損傷者や頸髄損傷者などの重度障害者の就労を可能にするために必要な、疲労の問題・褥瘡や尿路感染などの合併症の予防・障害に適した職種や機械器具の改良などの問題を研究し医学的管理法の確立をめざした。

①重度身体障害者労働機能研究（1969年）

②脊髄損傷者に係る合併症の予防および治療に関する研究（1973年）

③労災事故等による頸髄損傷者の工作機器類の改良研究（1974年）

●**研 究 名**：重度身体障害者に関する労働医学的人間工学的研究

助　　成：三菱財団（800万円）

期　　間：1970年４月～

目的および概要：重度障害者の残存能力をさらに引き上げ、障害者に適した生産作業を開拓するための、就労時の疲労の問題、合併症の予防、適性職種の選定、機械器具の改善等、労働医学的、人間工学的研究を行った。研究用に整備した機器は、多用途監視記録装置、集中監視装置、脳波計、レスピロメーター、振動計、騒音計、エルゴメーター。

●**研 究 名**：重度身体障害者の労働に関する研究の拡充

助　　成：三菱財団　（1,100万円）

期　　間：1971年４月～

協力機関：大分大学

目的および概要：重度障害者の就労に関する労働医学的・人間工学的研究に、労働心理・生化学的諸検査を加え、充実をはかった。より科学的な作業姿勢・動作の研究、適性職種・作業量の選定が可能となった。整備した機材は、生化学検査機器一式、酸素テント、カルジオコーダー、心理学的作業機能評価機器一式、レコーダー付筋電計。

●**研 究 名**：身体障害者機能開発補助事業

助　　成：大分県商工労働部労政課（200万円）

期　　間：1973年

目的および概要：身体障害者機能開発センターの運営補助。

〔研究項目〕

１．身障住宅研究

2．知能検査・職業適性検査法に関する研究
3．疲労と生産能率に関する研究
4．作業姿勢にかんする研究
5．自助具・治工具改良、開発
6．その他（脊損ハンドブック作製　各種車椅子開発）

●**研 究 名**：身体障害者機能開発補助事業
助　　成：大分県商工労働部労政課（200万円）
期　　間：1974年
目的および概要：身体障害者機能開発センターの運営補助。
〔研究項目〕
1．知能検査・職業適性検査法の改良・開発
2．疲労度と生産性に関する研究
3．自助具の改良・開発
4．基礎体力と作業適応性についての研究
5．重度障害者用特殊車椅子および付属品の改良・開発

●**研 究 名**：重度身体障害者の労働医学的研究
助　　成：三菱財団　（550万円）
期　　間：1974年４月～
目的および概要：身体障害者の基礎体力を完全に把握し、労働に結びつけるための諸要件を解決する。そのため、サイベックスマシンとマルチスパイログラフを購入。各種筋運動の状態、関節可動域、最大筋力、各位置での力、仕事量、瞬発力、耐久力、疲労度、基礎代謝、酸素消費量、分時最大呼吸気量を測定し、機械器具の位置ぎめ、作業負荷量、疲労度等の研究を行った。

●**研 究 名**：大分県研究事業委託　脳性小児麻痺リハビリテーション専門研究
助　　成：大分県（20万円、20万円）
期　　間：1974年　1975年
目的および概要：重度脳性麻痺者のための自助具の必要性についての基礎研究を行い、各種自助具の改良・開発をすすめる。また、家庭で作れるような自助具製作マニュアルを作製、配布した。

●**研 究 名**：自助具改良、開発研究
助　　成：日本ＩＢＭ（200万円）
期　　間：1975年
目的および概要：　補助具などの研究。

●**研 究 名**：身体障害者機能開発センター補助事業

助　　成：大分県商工労働部労政課（180万円）

期　　間：1975年

目的および概要：身体障害者機能開発センター運営補助。

〔研究項目〕

1．脳性麻痺者の労働能力の開発に関する研究
　鏡映描写・回転盤追従動作による学習過程の分析

2．自助具改良・開発（スプーン　ボタンフック）

3．電動車椅子の改良（あごスイッチ　段差乗り越え機構）

4．手回式車いす仕様設計マニュアル作成研究

5．成人病予防対策

6．その他（エスカレーター用車椅子の開発　海外施設資料収集）

●**研 究 名**：重度身体障害者による電動車いすの製作および製作工場システムの開発研究（身障モデル福祉機械工場）　**助　　成**　：通産省（2,000万円）

期　　間：1975年

協力機関：ソニー㈱　大分大学工学部

目的および概要：当時まだ開発途上であった、重度障害者や高齢者むけの実用性の高い電動車いすの開発を行うと同時に、重度障害者の雇用就労の場を拡大するための生産工場システムの研究を行った。車いすに乗った障害者が操作できる各種工作機械（旋盤・フライス盤・ボール盤など）や溶接装置（ガス・アーク）、治工具、車いすで使用できる電動運搬台車、作業用プラットホームなどの開発を行い、約670㎡のモデル工場内に展開した。

●研 究 名：作業用座椅子の製作・研究

助　　成：身体障害者雇用促進協会(100万円)

期　　間：1976年

目的および概要：1975年の雇用促進法の改正にともない障害者の雇用の機会が増大する事が予想される。重度障害者でも作業環境を整えることにより就労は充分に可能である。障害を考慮した作業環境作りの一環として重度障害者（特に脳性まひ）を対象とした座位作業用のいすの開発研究を行った。

●研 究 名：リンガダックシステムによる重度障害者の新しい職業分野の開拓研究

助　　成：三菱財団　(1,000万円)

期　　間：1977年

協力機関：大分大学

目的および概要：寝たきり、もしくはそれに近い脳性麻痺者を対象に、リンガダックシステムの導入により、日常生活の改善を計り、新しい職業分野を開拓する。重度身体障害者用制御信号発生装置、ＮＣ工作機械用改造インターフエース装置の機器整備を行い、ＮＣボール盤作業命令用プログラムの紙テープパンチングを行わせ、重度障害者にとっての全く新しい重機械使用の職業分野を開拓した。

●研 究 名：コンピューター利用による重度障害者の適職判定ならびに重度障害者を対象とするコンピューター要員の養成

助　　成：三菱財団　(700万円)

期　　間：1979年４月～

協力機関：大分大学

目的および概要：重度障害者の職業適性の判定にコンピューターを導入し、判定者の経験・主観に依存する度合いを軽減、職業適性評価の内容を質的に改善し対象者と対象職種を拡大した。また、蓄積されたデータを基本情報として入力し、標準的なソフトウェアを確立した。さらに、新規授産科目として、重度障害者を対象とするコンピューター要員の養成を行った。　ＭＥＬＣＯＭ86（中古）一式購入。

●研 究 名：身障者雇用自立センター展示用機器の開発

期　　間：1978年～1980年

協力機関：身体障害者雇用促進協会

目的および概要：身体障害者雇用促進協会の設置する「身障者雇用自立センター」では、障害者や事業主が職場において直面する作業上のあるいは職場生活上の技術的・専門的な諸問題の相談を行なうほか、身体障害者が作業し易いように開発改良された作業

用機械器具類や日常生活用具を展示している。東京、大阪、福岡の各センター開設時にこれら展示用の機器を開発した。

①特殊スイッチ　（音声スイッチ、フォトスイッチ、呼気スイッチ、ヘッドスイッチ、ハンドスイッチ、ロッドスイッチなど）

②工作機械の改良（帯のこ盤、ボール盤、角のみ盤、バンドソー、グラインダー、溶接機など）

●**研 究 名**：身体障害者雇用促進協会職域拡大等研究調査委託研究

①重度障害者の雇用管理上の医学的配慮（1977年）

②重度障害者の就労状況を通してみた労働能力の向上
　　－主に脳性まひ者を中心として－　（1977年）

③重度障害者に対する小型工作機械治工具等の改善（1977年）

④重度障害者のプラスチック射出成型作業における仕上げ作業の改良（1978年）

⑤重度障害者の作業姿勢と作業用椅子・作業用具等の改良（1978年）

⑥重度障害者用特殊運搬用具の開発（1978年）

⑦重度障害者の職業適性を解析し適職配置の近代的評価及び企業内訓練システムの確立。（1979年）

⑧重度障害者用電動台車の開発（1980年）

⑨障害者による電動台車の走行・操作・運搬作業の実施に基づく作業効果の測定（1980年）

⑩重度障害者のための電動台車の開発（継続）（1981年）

助　　成：身体障害者雇用促進協会

①②③500万円　④750万円　⑤150万円　⑥100万円　⑦1,000万円

⑧1,000万円　⑨450万円　⑩1,000万円

期　　間：1977年～1981年

協力機関：①②国立別府病院　③大分大学

④⑤大分大学　ミツワ理化学工業㈱　九州ＡＶセンター

⑤ミツワ理化学工業㈱　九州ＡＶセンター　⑦大分大学　⑨大分大学

目的および概要：身体障害者雇用促進協会より委託を受け、身障者の雇用就労に関する研究を行った。

①脊損、脳性麻痺、脊髄性小児麻痺、筋ジストロフィー、その他について、障害別特徴に対応した医学的視点からの課題等について調査した。また、重度障害者の持つ疲労度、及び、それらが身体的・心理的に与える影響等について研究し、雇用管理上必要な医学的配慮と健康管理の留意事項について具体的に検討した。

②脳性麻痺者の就労状況を個別に調査し、その実態を把握した。また、労働上必要

な機能を体系化し、労働能力向上に際して配慮すべき点と労働能力向上の方策について研究した。

③重度障害者の動作分析を行い、使用する機械・設備等の改善計画を調査研究した。特に、小型工作機械をモデルとして改善を実施し、その効果・課題等について研究した。

④重度障害者の従事する可能性の大きいプラスチック射出成型をとりあげ、中でも最も困難とされるばりとりの自動化をはかることにより、生産の向上と職域の拡大に関する研究を行った。(1)作業動作の分析およびプラスチック射出成型の肯定分析　(2)射出成型ばりとり作業の改良　(3)金型、ホットランナーの改良によるばりとりの自動化等、効果的方法の研究　(4)改良されたシステムや器具類の明示。金型本体に仕上げ加工が必要ないよう改良し、ゲート加工装置を開発して自動的に切断加工を行うようにした。

⑤重度障害者の生産能率を向上させるための、障害を考慮した疲労度の少ない作業用椅子・作業用具等の改良、また、そのための治工具の改良に関して研究した。(1)重度障害者の作業姿勢と作業動作の分析。(2)採算能率向上及び疲労度の少ない作業用椅子作業用具の改良。(3)作業姿勢と生産能率向上に関する研究。

⑥重度障害者の生産能率を向上させるための、材料・製品の運搬を容易におこなう特殊運搬具の開発。(1)重度障害者の作業動作と行動分析。(2)材料・製品の運搬を容易におこなう特殊運搬具の開発　(3)開発された治工具による生産能率向上に関する研究　(4)車椅子使用者でも使える電動台車を開発した。

⑦重度障害者の職業適性を解析し、適職配置に至る評価を行い、その結果に基づいて、特殊作業台の設置等による企業内訓練システム及び訓練方法の確立について研究する。具体的には、社会復帰した110名について、社会復帰に際しての問題点を分析し、基礎訓練の確立をはかるため、視聴覚機器を主体とする特殊作業訓練システム設備を整備し、重度障害者に基本作業動作の訓練を行った。同時に、脳性麻痺者を主体に運動学習効果について分析した。また、品質管理・かたづけ作業・聴覚障害者との意志疎通を図るための手話等のＶＴＲテープを作成した。

⑧重度障害者用電動台車の開発に関する研究委員会を設立。７名の委員が、(1)重度障害者の作業能力と既存の電動台車の操作に必要な能力との比較　(2)身体障害者が操作可能となるような既存の電動台車の改造 (3)改造電動台車の実際の操作にもとづく問題点の検討　(4)無線操作電動台車の開発可能性の検討を行った。

⑨369名の障害者を、障害別・職種別に分析調査。特に上肢に強度の麻痺がある場合、適当な運搬用具の開発により、運搬作業を効率よく行うことができるとの結果を得た。市販の電動台車を改造し、使用状況を調査した。

⑩電動台車に最適のパワーステアリング機構、それに適合した動輪の駆動機構、差動機構、それらのシステムを操縦するためのコントローラーの研究を行い、電動

台車６台を試作、作業所で試用して改善を加え、重度障害者への適合を図った。

●**研 究 名**：身体障害者の残存能力強化に関する研究

助　　成：中村裕記念身体障害者福祉財団（200万円）

期　　間：1987年

目的および概要：脊髄損傷者や頸髄損傷者などの車いす走行訓練を効果的に行うため、できるだけ地上走行に近い負荷状態が再現でき、かつ、負荷および運動量が定量的に設定・測定できる車いす用ルームランナーを試作した。このルームランナーは走行体の慣性の状態を作り出す機構と走行抵抗に相当する負荷を発生する機構を備えている。また、走行速度・走行距離が測定できるようにし、訓練者の心拍数は無線式の心拍計で測定した。

●**研 究 名**：シルバーハウジング開発研究

期　　間：1987年～1989年

協力機関：厚生省　㈱竹中工務店　東陶機器㈱　久留米工業大学工学部
プレック研究所　元田電子工業㈱　ブンゴヤヘルスケア

目的および概要：生活の基盤となる住環境の研究開発は高齢化が進む社会の中で大きな課題となっている。特に高齢者が安全かつ快適に在宅生活を営みうる居住環境の整備が強く求められているが、高齢者夫婦の片方に歩行障害が生じた場合、介助者も高齢、非力であることからやむを得ず施設・病院に頼ることが多い。

本研究では高齢者夫婦等が可能な限り自立した在宅生活を送れるような配慮をした構造や設備機器を備えたモデル住宅を開発建設し、実証実験として高齢者夫婦に一定期間居住してもらい、その中で居住性評価、各種福祉機器等の適合性調査を行なう。

分担研究テーマ及び研究者

1987年度

①高齢者および介助者に適した入浴システムの研究

主任研究者：日本大学理工学部　　野村　歡　　（厚生省助成1,000万円）

②高齢者および介助者に適したサニタリーの研究

主任研究者：大分大学工学部建設工学科　片岡　正喜　　（　〃　1,000万円）

③高齢者の介助に適した動力システムの研究

主任研究者：東京工業大学工学部制御工学科　長谷川　健介

（　〃　1,000万円）

1988年度

①高齢者の在宅生活を支援するシステムの開発に関する研究

主任研究者：㈳太陽の家　畑田　和男　　（厚生省助成1,700万円）

● 分担研究者：国立障害者リハセンター　高山　忠雄

研究テーマ：在宅高齢障害者の生活支援機器分類とそれに基づくデータベースの開発に関する研究

● 分担研究者：ホームケア推進協会　高森　晃

研究テーマ：在宅介護サービスシステムの開発に関する基礎的研究

● 分担研究者：国立障害者リハセンター　初山　泰弘

研究テーマ：在宅高齢障害者の生活支援機器の普及システムに関する研究

● 分担研究者：㈳太陽の家　畑田　和男

研究テーマ：高齢者用福祉機器使用マニュアルおよび普及システムについての研究

● 分担研究者：法政大学　高橋　紘士

研究テーマ：高齢者を対象としたシルバーサービスに関する情報処理システムの開発研究

②障害高齢者の移動システムの開発のための基礎研究

主任研究者：東京工業大学工学部制御工学科　長谷川　健介

（　〃　1,400万円）

● 分担研究者：国立障害者リハセンター　数藤　康雄

研究テーマ：障害高齢者の移動を容易にする分離可能ベッドの開発

● 分担研究者：神奈川県総合リハセンター病院　宮崎　一興

研究テーマ：障害高齢者の移動システム開発のための基礎研究

③高齢者のための居住環境整備に関する総合的研究

主任研究者：大分大学工学部　片岡　正喜　　（　〃　1,400万円）

● 分担研究者：国立障害者リハセンター　二瓶　隆一

研究テーマ：高齢者の住宅での自立適応の限界

● 分担研究者：日本大学理工学部　　野村　歡

研究テーマ：高齢者の浴室・便所等衛生設備整備に関する研究

● 分担研究者：村田医院　村田　謙二

研究テーマ：便器付きベッドおよびマットの改良と再開発

1989年度

①高齢者の在宅生活を支援するシステムの開発に関する研究

主任研究者：㈳太陽の家　畑田　和男　　（　〃　1,700万円）

● 分担研究者：国立障害者リハセンター　高山　忠雄

研究テーマ：在宅高齢障害者の介護支援システムに関する研究

● 分担研究者：国立障害者リハセンター　初山　泰弘

研究テーマ：在宅高齢障害者の生活支援機器の普及システムに関する研究

②シルバーモデル住宅における高齢障害者夫婦の生活についての実証実験

主任研究者：大分大学工学部　片岡　正喜　　（厚生省助成1,400万円）

● 分担研究者：国立障害者リハセンター二瓶　隆一

研究テーマ：高齢者・障害者配慮住宅の臨床評価

③高齢者の機能維持を図るための福祉機器の研究

主任研究者：東京工業大学　長谷川　健介　　（　〃　1,400万円）

● 分担研究者：国立障害者リハセンター　数藤　康雄

研究テーマ：障害高齢者の移動を容易にする分離可能ベッドの開発

● 分担研究者：神奈川県総合リハセンター病院　宮崎　一興

研究テーマ：椅座姿勢での移乗介助機の開発

●**研 究 名**：高齢身障用モデルハウスの建築

助　　成：日本船舶振興会（2,490万円）　大分県（2,628万５千円）

期　　間：1989年

目的および概要：大分県シルバーハウジング開発研究委員会で２年間にわたり高齢身障者に適した住宅の研究が進められ（前述の研究）、基本設計が完成した。この研究成果を具体化し、一般に公表するためにモデルハウスを建築した。

建築場所：大分県速水郡日出町大字大神1402－6

敷地面積：480㎡

床 面 積：188.99㎡（１階101.9㎡、２階87.09㎡）

構　　造：木造２階建

建築業者：㈱竹中工務店

●研 究 名：シルバーハウジングモデル住宅における高齢者夫婦の生活についての実験実証研究
助　　成：大分県（160万円）
期　　間：1990年
目的および概要：89年度とは障害状況の異なる夫婦に居住してもらい、モデルハウスでの住み方や移動状況を調査した。今回の居住者は前回に比べ身体機能がより重度であった。一般性の高い空間構成のモデルハウスであったが、身体状況の異なる居住者からの評価が変化する部分があった。

●研 究 名：寝たきり老人および障害者の在宅介護システムの開発研究
期　　間：1990年
研究主体：大分県設備開発協同組合、大分大学、太陽の家
目的および概要：市販されている介護機器はいずれもある動作に対応した単機能機器であり生活の流れの中でシステム化されていない。本研究では一般家庭における介護システムを現実的に想定し、食事・排泄・入浴・着替え・寝返り・移動などの日常生活動作の介助を、高齢な女性でも容易に行えるための介助機器のモデルシステムを提案した。

●研 究 名：車いすマラソンのスピード・トレーニング練習機の試作
助　　成：中村裕記念身体障害者福祉財団（100万円）
期　　間：92年４月１日～93年３月31日（１年間）
目的および概要：車いすマラソン選手が自己最高記録以上の走行速度を体感するため、オートバイで牽引する練習機を試作し、走行実験を行なった。競技用車いすとオートバイは電磁石で連結しており、牽引中簡単に切り離すことができる。時速35㎞位で牽引走行実験行った。

●三菱財団助成研究
テ ー マ：身体障害者の職能評価器具の開発（メカニック検査の標準化）
助　　成：700万円
期　　間：92年４月１日～94年３月31日（２年間）
目　　的：太陽の家では障害者の職能評価法として、分解組立が可能なおもちゃの機関車を検査器具としたメカニックトレイン検査（メカトレ検査）を実施している。検査は「分解」と「組立」の工程から構成される。「分解」では主に手指の機能に支配された検査となり、手指の器用さや作業の速さが評価される。「組立」では手指の機能とともに知的機能が大きく影響し、えられた課題をどのように解決するか、身体機能をどう活用するかなど、その人の全体像が反映される。約１時間の検査を通して多くの情報を得ることができ、就労上の問題点がよく把握される検査方法である。

太陽の家では障害者に対し評価のための評価でなく、実際に就労する場を持ち実践的な評価を行ってきた。約20年間の実績を積んできたこのメカトレ検査を標準化し、障害者の職能評価に利用できる有効な検査手法として確立するため下記の一連の研究を行う。

(1) 現在のメカトレ検査器具の機能・構造の分析および評価要素の抽出
(2) 新しい検査器具の部品・構造の設　計および試作
(3) 評価システム（評価項目、測定方法、記録など）の構築
(4) フィールドテスト
(5) 検査結果の類型化とその解釈

組　織：㈳太陽の家　身体障害者職能開発センター
宮川浩臣　大分大学工学部　教授

結　果：（第１年度）

研究費総額850万円で三菱財団に申請、２年間の継続研究とした700万円の助成金が決定した。今年度は検査器具の概念設計を実施した。また、資料として検査の様子をＶＴＲで収録した。

（第２年度）

今年度は概念設計に基づき検査器具の詳細設計を行った。３次試作の後検査器具の仕様を決定し、各部品を100台分製作した。なお、車体は成形用金型を製作したので検査中に破損しても補充が可能となった。また、評価用記録用紙も統一した評価が可能になるよう実践に即して改訂を進めた。

完成した検査器具を使用してメカニック検査を実施し、評価用紙の改善や評価方法の検討を行った。また、88年度から蓄積しているデータ（太陽の家入所面接検査256件、新入所者検査266件、太陽の家関連企業への雇用労働者の採用検査427件について、労働省編職業適性検査Ｔ版(GATB)やFQ検査との相関などを分析した。

評価方法については今後もデータを集め手法を洗練する必要がある。また、新入所者に関して入所後の作業訓練の成果や雇用状況を追跡し、メカニック検査による判定との関連を研究する必要がある。

●地域技術起業化支援事業研究

テ ー マ：軽量可搬型電動車いす（マニピュレータ付き）の開発

期　　間：92年４月～94年３月（２年間）

組　　織：大分県高度技術研究所の自主研究開発に県内企業および大学等が参加し、県内中小企業が有する開発シーズを製品化し成熟させることを目的とした事業である。
要素研究グループには、大分大学、高度技術研究所、開発・検証グループにはデンケンエンジニアリング㈱、ダイヘンテック㈱、葵エンジニアリング㈱、㈳太陽の家

が参加している。

目的および概要：

①既存の電動車いすより軽量かつコンパクトな構造で可搬的な構造により乗用車などへの搭載を可能にし利用者の行動範囲を拡大する。

②小型軽量で車いすに搭載でき操作性のよいマニピュレータおよびメカニカルハンドを開発する

結　果：（第１年度）

通常の電動車いすでは開発要素がないため、現在市販されていない牽引方式の動力車が採用された。今年度は基本設計と第１次試作まで進んだ。

（第２年度）

第２年度は２次試作まで進み、問題点を改良して２方式２台を完成させた。

車いす牽引車（電動カート）はバッテリーを電源としてモータにより駆動される１輪動力車で、カートの左右に取り付けられた連結ピンと、通常の手動式車いすに取り付けた連結ソケットを接合させ、この車いすを牽引して運転操作できる電動式動力車のことである。

第１次試作は前１輪直接駆動方式を採用、減速機内臓モータ（250W直流27Ｖ×17Ａ）からチェーンで前輪を駆動する構造である。速度はボリュームコントロールによる無段階制御方式で、最高速度は4.5㎞／時とした。駆動部と車いすはピン連結とし、連結・切り離しを可能としている。第２次試作は駆動方式に市販のオートマティックトランスミッションを採用、これをモータで駆動し前輪に伝達した。

なお、電動カートについては開発の関連各社と連名で実用新案申請を行った。

障害者支援マニピュレータには５自由度垂直多関節型のロボットを採用、ハンド部に16個の多接触センサーを内蔵したハンドを取り付けた。このマニピュレータと電動カートは「’93年大分新技術交流プラザ」に展示され一般に公開された。

●大分県産学官共同研究　地域産学交流研究会

テ ー マ：福祉機器の研究

期　　間：93年９月～

組　　織：大分県下の企業10社（クロダデンキ、新鶴海興産㈱、デンケンエンジニアリング㈱、菅原工業㈱、㈱江藤製作所、葵エンジニアリング㈱、㈱ホックス、㈱戸高製作所、㈱長尾製作所）

大分大学、大分高専、産業科学技術センター、太陽の家

結　　果：93年９月から始まった大分県産学官共同研究会の「福祉機器グループ」では、介護用福祉機器の開発をテーマに研究を進めていたが、大分県介護福祉センターに建設されるウエルフェアテクノハウス（ＷＴＨ）での研究にも参画することになり、「大

分ウエルフェアテクノハウス研究開発推進委員会」のメンバーを兼任することになった。ウエルフェアテクノハウス（９５年３月竣工）は通産省工業技術院から事業の委託を受けたＮＥＤＯ（新エネルギー・産業技術総合開発機構）が全国７カ所に建設した、高齢者の在宅介護を研究するためのモデル住宅である。大分ウエルフェアテクノハウス研究会では95年度から４年計画で「高齢者・障害者の実態調査」「モデルハウス内での動態調査」「介護機器の開発」を実施する計画である。今年度はＷＴＨ建設に向けモデルハウスの仕様や必要な計測機器の調査等を行った。

●言語障害者に発声練習が与える訓練効果の研究

助　　成：中村裕記念身体障害者福祉財団（100万円）

期　　間：1994年

目的および概要：脳性まひ者を中心とする重度障害者の多くに、四肢・呼吸筋群の機能障害に伴って言語に障害が見られます。これらの障害者の中には、療育期に言語訓練を受けているものの訓練時間の不足や、障害か重度であるが故に訓練効果が低いなどにより、訓練未了で療育期を終えるといった不幸なケースがみられます。過去３年間太陽の家でのコーラスにおける発声練習の経験から、重度障害者に困難であった「一定期間声を出す」「声の高低など音程の確立」など改善が認められたことは、緊張の緩和、心肺機能の強化など精神的、生理的基礎能力の向上によるものであろうと推察しました。これらの機能改善を医学的・科学的見地にたって２年間研究を行った。

30周年記念作文募集優秀作

創立30周年を記念して「太陽の家とわたし」というテーマで作文を募集しました。
その結果、

最優秀	「私と太陽の家」	岩井　宏夫（愛知福祉工場）
優　秀	「太陽の家に来てからの私」	植田　敏夫（FJ機器科）
佳　作	「太陽の家と私の家族」	福田　博美（事務局 福田 勝夫人）
	「ふれあい」	松田シゲ子（三菱商事太陽 松田美香の母）
	「太陽の家との出会いに乾杯」	森　明美（オムロン太陽 森　清 夫人）

となりました。最優秀に選ばれた作品をここに発表いたします。

最優秀　「私と太陽の家」

愛知太陽の家福祉工場　岩　井　宏　夫

太陽の家30周年おめでとうございます。
私が太陽の家に入所したのが、昭和58年５月６日ですから、早いものでもう12年の歳月が過ぎました。

私は、明石会の研修生として太陽の家に入所して10か月、電機科T.Iに配属され、昭和59年４月開所予定の愛知太陽の家に移るまでの間、職場研修とカラオケ等での人間関係を学び、現在の職場である愛知太陽の家に再入所しました。

私が、この愛知太陽の家の設立を知ったのは、昭和57年の５月頃の新聞に、「太陽の家が愛知に」というような記事でしたが、当時の私には太陽の家の存在も知りませんでした。

またその年の暮に近い頃、母校の名古屋養護学校の先生にあって、この前太陽の家に見学にいってきたことを伝えられ、太陽の家のパンフレットのコピーを「もしよかったら君にあげる」といわれたので頂いた。その内容を見ると、オムロン、ソニー、ホンダという大企業の名に驚き、前出の新聞記事のことも忘れていたので、日本にもこんな素晴らしい障害者の工場があるとは思ってもいなかったので、しかも、私は、学生時代から、大手の企業が工場の一部を障害者のために場所を提供していただいて、そこで私達障害者が、その会社のために働けたらいいなと思っていたので、まさか日本に、こんな素晴らしい企業体があり、またその流れを受け継いで愛知に進出される企業があることも知り、まだ私がのちに太陽の家の一員になるとは夢にも思っていなかったので、また、私のその頃の太陽の家に対するイメージとしても「愛知県内にある障害者の作業所の大きなもの」という観

点でしかとらえてなかったので、明石会の研修生としての審査のために初めて別府の太陽の家を見学したときに、私のそれまでの思いを打ち砕いて、私に「ここそが私が夢に見た障害者の働くところ」と確信しました。

その後、私の父や、父母の会の関係の人達が、太陽の家を下見して、その立派な施設に驚き、すでに何人かの研修生も入っていたのですが、外の地域からもということで、私に父が「太陽の家を見る気はないか」といわれ、私も当時は仕事には着いていましたが、同じ障害をもった仲間と一緒に働いてみたいきもちもありました。

太陽の家では、障害者自身がその職場のリーダーとなりその職場を引張っていく姿に、私が以前に描いてた健常者のリーダーが障害者を引張っていくと思っていた私に何か「私達障害者でもやれば出来るという勇気」がわいてきました。

また、クラブ活動でも、入所してすぐに、さみしさを紛らわすために飲んでいたときに、カラオケの歌声が耳に入り、その場を飛び出していつたら、「一曲歌いませんか」と誘われ、「又来てください」の言葉に誘われて、まだ太陽の家で職場も決まっていない私を迎えてくれたのがカラオケクラブの人達でした。

10か月の研修期間を終えて、昭和59年４月、愛知太陽の家の開所と同時にこの蒲郡に移り、早いもので11年の歳月が流れ、独身で入所した私も結婚し、今は２人の子供にも恵まれて、また仕事のほうも、親会社の日本電装株式会社及び、デンソー太陽株式会社のご協力のおかげで愛知太陽の家に勤める私達従業員や家族の現在の生活の安定のためになくてはならない会社になりました。

そしてもう一つ、私が学校を卒業するときには太陽の家のように、企業と一体となっている施設がなかったのでこれからもできるかぎりの後輩の就職口としての太陽の家でありますように。

まだまだ未熟者の私ではありますが、家族とともに太陽の家の一員として頑張りますのでよろしくお願い致します。

最後に、太陽の家及び、太陽の家に協力下さっている関係企業の方々並びに太陽の家を様々な形で応援してくださっている方々にこれまでのお礼を述べるとともに、私達太陽の家の従業員の一人一人が、今後尚一層の努力をして太陽の家並びに協力企業の発展のため社会の一員として微力ながら力を尽くしていきたいと思っています。

編　集　後　記

太陽の家の30年の歩みをすべて書き記すことはできません。それでも私たちがなにを目指し、なにを試みてきたかは何等かの形で次の世代に語り継がねばならないと考えます。

ここに記された事柄はそうした数々の試みの断片であります。今、私たちはそれらの点と点を線で結ぶことはできませんが、それらの幾らかでもメモリーとして遺すことになりました。語り尽くせない事がまだまだたくさんありありますが、ここに記された事の中から明日への方向が少しでも探し安くなれば幸いだと思っています。

と同時に、これまでに影、日向になって私たちの歩みを支え、励ましていただいた沢山の方々に深い感謝の意を表することができましたらと思っています。

平成７年(1995年) 10月

事務局長　横　田　繁　夫

太陽の家30周年記念誌

編集
発行　社会福祉法人 太　陽　の　家
〒874
大分県別府市大字内竈1393番地
☎0977－66－０２７７
印刷所　電子印刷センター太陽の家工場
発行日　１９９５年10月